

八尾市文化財調査報告40
平成10年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書 I

1999. 3

八尾市教育委員会



『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書 I』正誤表

箇所	誤	正
図版目次 図版4	SD3-1 獣骨出土状況	SD3-1 骨片出土状況
P. 1 9行目	土師器片を確認した	土師器片を確認した。
P. 35 1行目	中世～平安時代後期頃	平安時代後期～中世頃
P. 37 5行目	上層は明褐色粗砂混シルト	上層は明褐色粗砂混粘土シルト
P. 37 23行目	深さ約0.19を測る。	深さ約0.19mを測る。
P. 39 8行目	灰色粘質細粒砂混シルト	灰色細粒砂混粘質シルト
P. 55 5～6行目	検出した溝は南北方向で	検出した。溝は南北方向で
P. 75 12行目	第5区 譲贈現地表は	第5区—現地表は

はじめに

八尾市は、生駒山地西麓から大阪平野東部にかけての範囲に市域を有しております。古くは河内湖、河内潟に面し、旧大和川をはじめとする多くの河川によって、肥沃な平野が形成されてきました。そして、ここには旧石器時代から連綿と遺跡が形成されており、全国的にも有数な遺跡の宝庫と呼べる地域あります。

本書には、八尾市内の個人住宅建設をはじめ、民間の各種事業に先立つ国庫補助対象の遺構確認調査の成果を収めております。「天王の森」の近接地において縄文時代後期から弥生時代前期にかけての遺構・遺物が出土した恩智遺跡、久宝寺寺内町の形成を考える上で貴重な遺構が検出された久宝寺寺内町遺跡、7世紀頃の鍛冶集落関係の遺構を確認した郡川遺跡をはじめ、非常に貴重な成果が得られました。

今後、八尾市内の貴重な埋蔵文化財が、市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれる形で、保存・活用していくことが、重要な課題となっていくことでしょう。本書が微力ながらもその役割の一端を担うことができれば、幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にご協力、ご助力を賜りました関係各位に対し、御礼を申し上げるとともに、今後ともより一層の文化財行政に対するご理解とご協力を頂きますようお願い申し上げます。

平成11年3月

八尾市教育委員会
教育長 西谷信次

例　　言

1. 本書は、平成10年度に八尾市教育委員会が国庫補助事業として、八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。
2. 調査は、八尾市教育委員会が実施した。
3. 調査にあたっては、八尾市教育委員会社会教育部文化財課技師 米田敏幸、清斎、吉田野乃、藤井淳弘、吉田珠己が担当した。
4. 本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、とくに成果のあった調査について、その概要を収録した。
5. 調査一覧表及び報告書抄録の作成は、吉田珠己が行った。
6. 本書の作成にあたっては、清斎、吉田野乃、藤井淳弘、吉田珠己が執筆を行い、文責はそれぞれ文末に記した。編集は吉田珠己が行った。

本文目次

1.	跡部遺跡（97-477）の調査	1
2-1.	恩智遺跡（98-54）の調査	3
-2.	恩智遺跡（98-278）の調査	7
-3.	恩智遺跡（98-395）の調査	20
3.	萱振遺跡（98-9）の調査	22
4.	木の本遺跡（97-515）の調査	25
5-1.	久宝寺遺跡（97-694）の調査	28
-2.	久宝寺遺跡（97-720）の調査	36
6-1.	郡川遺跡（97-696）の調査	43
-2.	郡川遺跡（97-706）の調査	47
-3.	郡川遺跡（98-400）の調査	55
7.	高安古墳群（98-141）の調査	57
8.	東郷遺跡（97-536）の調査	60
9.	中田遺跡（98-27）の調査	62
10.	西郡廃寺遺跡（97-705）の調査	67
11.	福万寺遺跡（98-357）の調査	72
12.	宮町遺跡（98-99）の調査	76
13.	弓削遺跡（98-380）の調査	79
	調査一覧表	81

図版目次

図版1	恩智遺跡 (98-278)	調査区南より天王の杜を望む 試掘調査区 (北より) 立会調査区南壁
図版2	萱振遺跡 (98-9)	S D 1 0 1 (右側) (北より) S D 3 0 1 検出状況 (北より) S K 3 0 1 土器出土状況
図版3	久宝寺遺跡 (97-694)	調査風景その1 調査風景その2 S W O 1 出土状況
図版4	久宝寺遺跡 (97-720)	第1遺構面 (東より) 第3遺構面 (東より) S D 3 - 1 獣骨出土状況
図版5	郡川遺跡 (97-706)	調査地 (南より) 南側調査区 第2遺構面 石組み出土状況 南側調査区 第1遺構面 検出状況 (南より)
図版6	高安古墳群 (98-141)	調査地 (北より) 北側調査区 (東より) 南側調査区 (西より)
図版7	中田遺跡 (98-27)	2区 中～近世畦畔と古墳時代土坑 (西より) 2区 庄内～布留式期土坑 (東より) 3区 古墳時代溝
図版8	福万寺遺跡 (98-357)	第1区 (南より) 第2区 (東より) 第3区 (南より)
図版9	福万寺遺跡 (98-357)	第4区 (北より) 第5区 (西より) 第6区 (東より)
図版10	恩智遺跡 (98-54) 萱振遺跡 (98-9)	出土遺物 出土遺物
図版11	恩智遺跡 (98-278)	出土遺物
図版12	恩智遺跡 (98-278)	出土遺物
図版13	恩智遺跡 (98-278)	出土遺物
図版14	恩智遺跡 (98-278)	出土遺物
図版15	恩智遺跡 (98-278) · 郡川遺跡 (97-706)	出土遺物
図版16	久宝寺遺跡 (97-694)	出土遺物
図版17	久宝寺遺跡 (97-694)	出土遺物
図版18	久宝寺遺跡 (97-720)	出土遺物
図版19	久宝寺遺跡 (97-720)	出土遺物

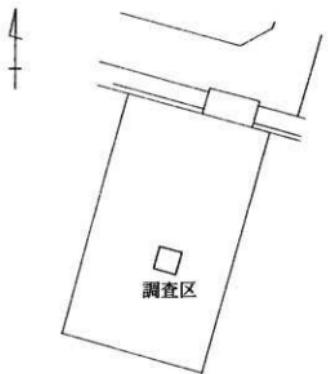
1. 跡部遺跡（97-477）の調査

1. 調査地 八尾市春日町2丁目7-1
2. 調査期間 平成10年1月19日
3. 調査方法 施工予定地内の南寄りに2m四方の調査区を設定し、地表下2.2m前後まで重機と人力を併用して掘削した。
4. 調査概要 地表下0.97m～1.2m前後の明灰茶青色粘砂層、茶灰青色粘砂層で（3）をはじめとする土師器片、須恵器片を確認した。また地表下1.2m（TP+8.2m前後）の明灰茶褐色粘土層上面で2箇所の遺構の切り込みを確認した。このうち遺構1には瓦質陶器片が含まれており、この面は中世末の遺構面と捉えられる。さらに遺構面構成層である明灰茶褐色粘土層より須恵器片、土師器片を確認した。（1）、（2）はこの層から出土した須恵器の壺蓋片である。田辺編年のMT15型式期に位置付けられる。これ以下は地表下2.2mまで確認したが、地表下1.4m以下は灰色～灰青色の粘砂、微砂の堆積であり、遺構面、遺物は確認できなかつた。当調査地では、TP+8.2m前後で中世末の遺構面を、TP+8.1～8.2前後で古墳時代後期とみられる包含層を確認した。

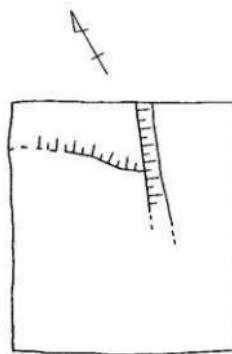
（吉田野乃）



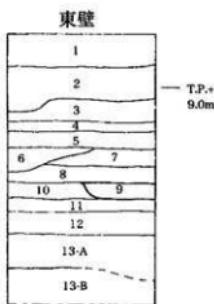
第1図 調査地周辺図 (1/5000)



第2図 調査区設定図 (1 /400)



第3図 遺構平面図 (1 /40)



- 1. 茶灰色粘砂層（表土）
- 2. 黄灰色粘砂層（盛土層）
- 3. 灰色粘砂層（旧耕土層）
- 4. 淡灰色粘砂層（近世陶磁含む）
- 5. 青灰色粘砂層
- 6. 灰青茶色粘砂層
- 7. 明茶灰青色粘砂層（土師器片、須恵器片を含む）
- 8. 茶灰青色粘砂層（土師器片、瓦質土器片を含む）
- 9. 茶灰色炭混粘砂層（遺構1埋土）
- 10. 明灰茶褐色粘土層（土師器片、須恵器片を含む、遺構面構成層）
- 11. 褐色斑灰色粘土層
- 12. 灰色微砂質粘砂層
- 13-A. 灰青色微砂A層
- 13-B. 灰青色微砂B層（粗砂混）

第4図 調査区土層断面図 (1 /40)



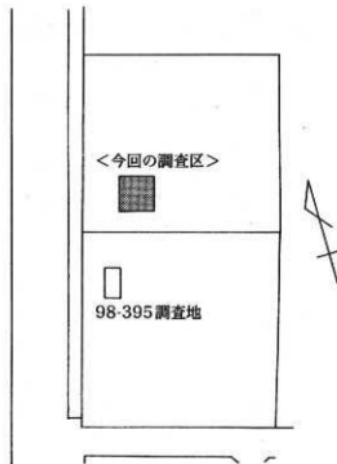
第5図 出土遺物実測図 (1 / 4)

2-1. 恩智遺跡（98-54）の調査

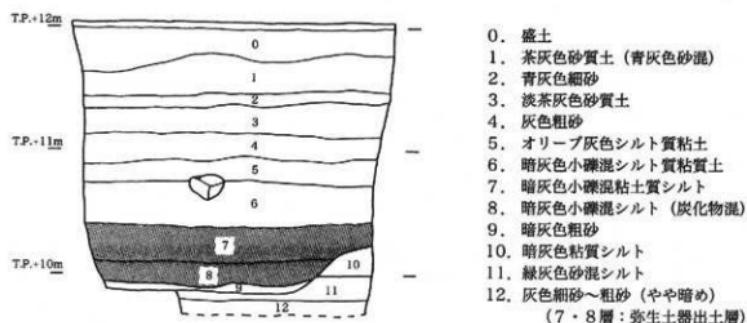
1. 調査地 恩智中町1丁目49
2. 調査期間 平成10年4月23日・6月19日
3. 調査方法 特定郵便局建設に先立ち、浄化槽設置箇所について3m×3mの範囲を地表下2.35mまで遺構確認調査を行った。なお、本調査区は、2-3(98-395)の調査地に隣接しており、両調査区との距離は約5mほどである。
4. 調査概要 現地表面は、T.P.+12.0mを測る。地表下0.3mまでは盛土層が続く。地表下0.85m～1.1mの間に洪水砂が見られ、その直下が、中世頃の水田面になると考えられるオリーブ灰色シルト質粘土層(5層)となる。地表下1.25m～1.6mの間の暗灰色小礫シルト質粘土層(6層)に須恵器・土師器に混じって弥生土器が見られた。そして、地表下1.6m～2.0m (T.P.+10.4m～10.0m) の暗灰色小礫混粘土質シルト層(7層)が多数の弥生時代中期の土器のみを含む層である。特に地表下1.9m付近の暗灰色小礫混シルト層(8層)に集中していた土器は、完形品に近いものが出土している。これらの土器は、土層断面から西から東への落ち込み状の遺構内の遺物と考えられる。
5. 出土遺物 弥生時代中期(IV様式)の遺物が多数出土しているが、特に下層(8層)に集中していた土器が(1)～(22)になる。(1)は、簾状文、流水文を施す広口壺で、口縁部は完存するものの、体部は欠損している。(2)は、簾状文の壺の体部で、(1)とは別個体である。(3)・(4)は広口壺の体部、底部である。接合できなかったもの、同一個体である。(5)は深鉢で、ほぼ完形品である。(6)は器台脚部である。(7)～(9)は甕、(10)は大型甕の口縁部である。(11)・(12)は壺の口縁部である。(14)は



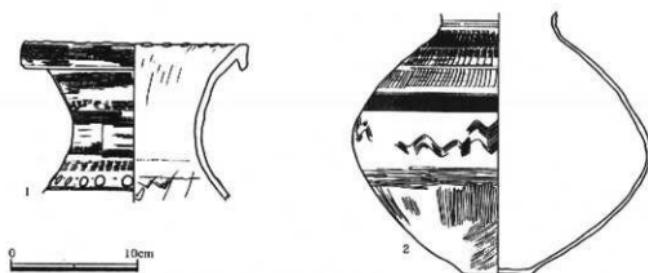
第6図 調査地周辺図 (1/5000)



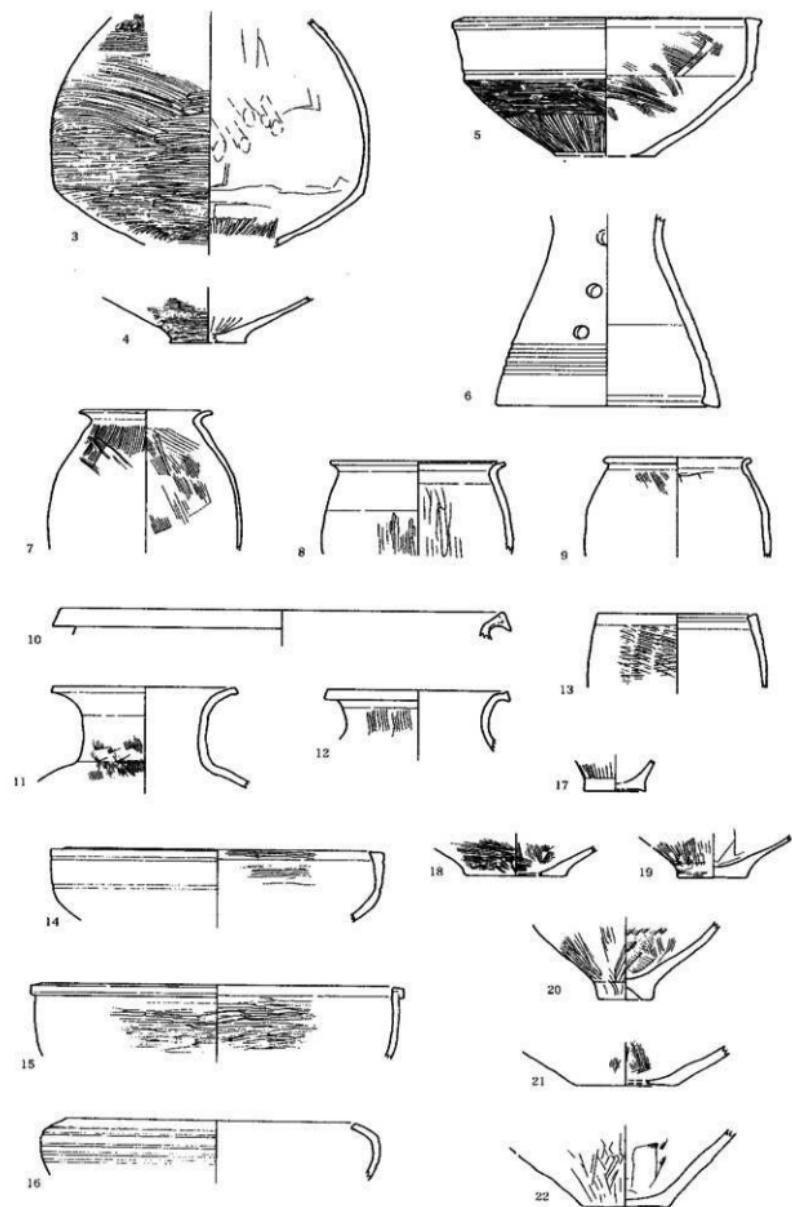
第7図 調査区設定図 (1 /400)



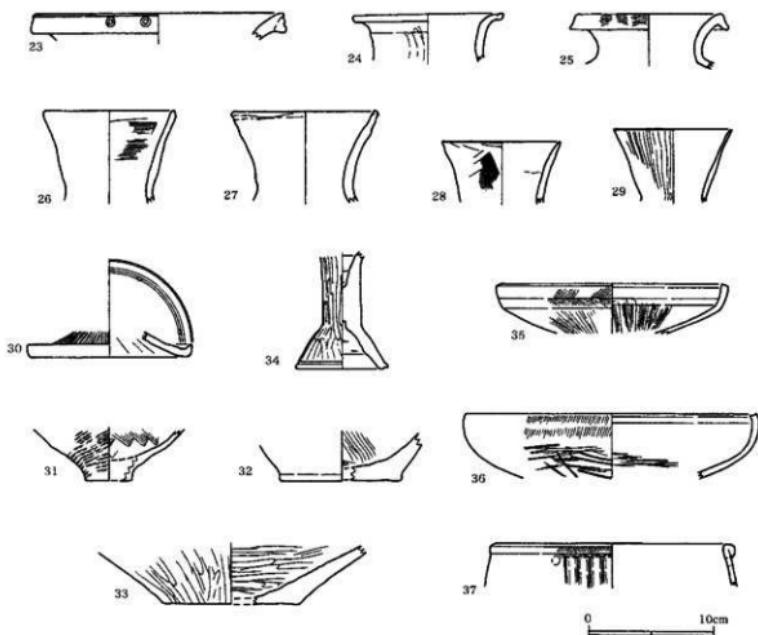
第8図 土層断面図 (1 /40)



第9図 出土遺物実測図 (1 / 4)



第10図 出土遺物実測図 (1/4)



第11図 出土遺物実測図 (1 / 4)

高杯の口縁部、(15)・(16)は鉢の口縁部である。(17)～(22)は底部片である。(23)～(37)は、遺物包含層となる(6層)と(7層)の出土遺物である。弥生時代中期の遺物(壺: 24・25／直口壺: 26～28／蓋: 30／底部: 32・33／高杯脚部: 34／高杯杯部: 35・36／無頸壺: 37)に混じって古墳時代前期の直口壺の口縁部(29)や弥生時代後期の壺の口縁部(23)や甕の底部(31)がある。

6.まとめ

今回の調査区から道路を隔てた西側では昭和59年度に調査が行われており、この調査でもT.P.+10m前後に弥生時代中期の遺物包含層を確認している。このことから、弥生時代中期の集落域がこの深度に広がっていることを示している。今後、面的な調査により、具体的な該期の集落の様相が明らかになることを期待したい。

(藤井)

[参考文献]

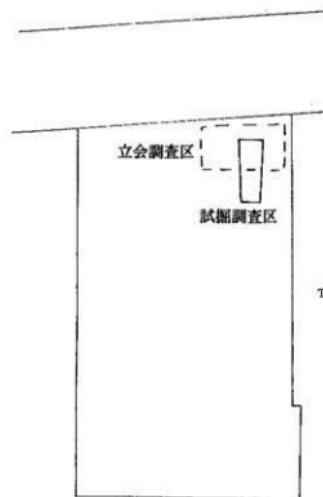
- 瓜生堂遺跡調査会 1980『恩智遺跡I・II』
八尾市教育委員会 1985『恩智遺跡の調査(恩智中町1丁目77-2)』『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告』

2-2. 恩智遺跡（98-278）の調査

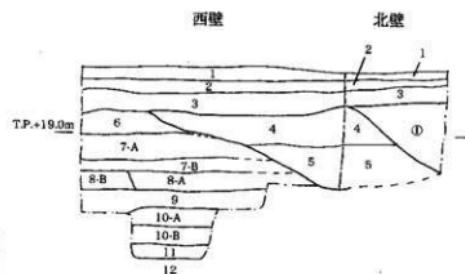
1. 調査地 八尾市恩智中町3丁目71-5
2. 調査期間 平成10年8月14日～18日
3. 調査方法 施工予定地の浄化槽設置予定部分に幅1m、長さ2.5mの南北方向の調査区を設定し、人力にて地表下1.6m付近まで確認した。このうち工事掘削に伴い立会調査を行った。
4. 調査概要 本調査地は大阪府指定史跡、恩智弥生時代遺跡の所在する天王の社の南側近接地である。試掘調査区では地表下0.35m前後、TP+19.2m前後の6層上面で弥生時代中期の土坑状の遺構を2基（遺構1、遺構2）を平面的に確認した。さらに地表下0.84m～1.3m、TP+18.7m～18.26m前後で縄文時代晚期後葉、滋賀里IV式に位置付けられる包含層を確認し、この包含層の一つである9層上面を切り込む遺構になる可能性のある土器溜りを確認した。立会調査では地表下2.0mまで掘削が行われており、断面精査を実施したところ、地表下0.2m、TP+19.3m前後の3層上面で弥生時代第IV様式かとみられる土器片を含む土坑SK01を、地表下0.34m、TP+19.2m前後の6層上面で弥生時代第II様式期に位置付けられる土坑SK02を確認した。さらに地表下0.54m、TP+19.8mの7-B層上面で弥生時代第I様式期に位置付けられる溝SD01を、地表下1.0m、TP+18.5mの8層上面で弥生時代第I様式期に位置付けられる溝SD02を確認した。さらに地表下1.0m、TP+18.5mの滋賀里IV式期の包含層である9層上面で中環の下に同期の土器が集中する箇所を確認した。



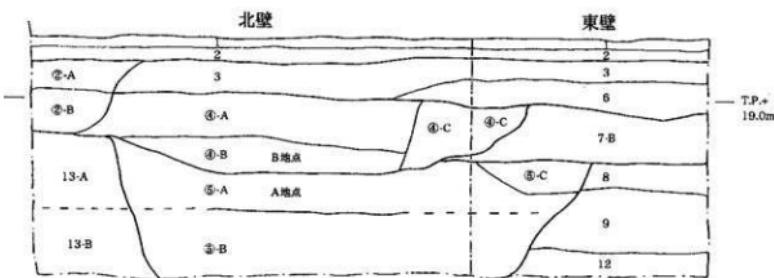
第12図 調査地周辺図 (1/5000)



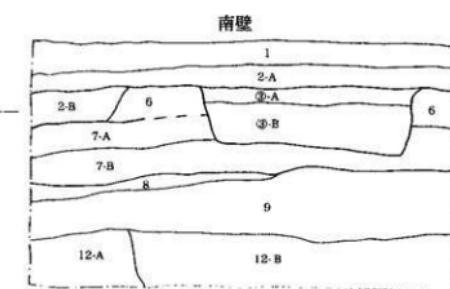
第13図 調査区設定図 (1/200)



第14図 試掘調査区土層断面図 (1/40)

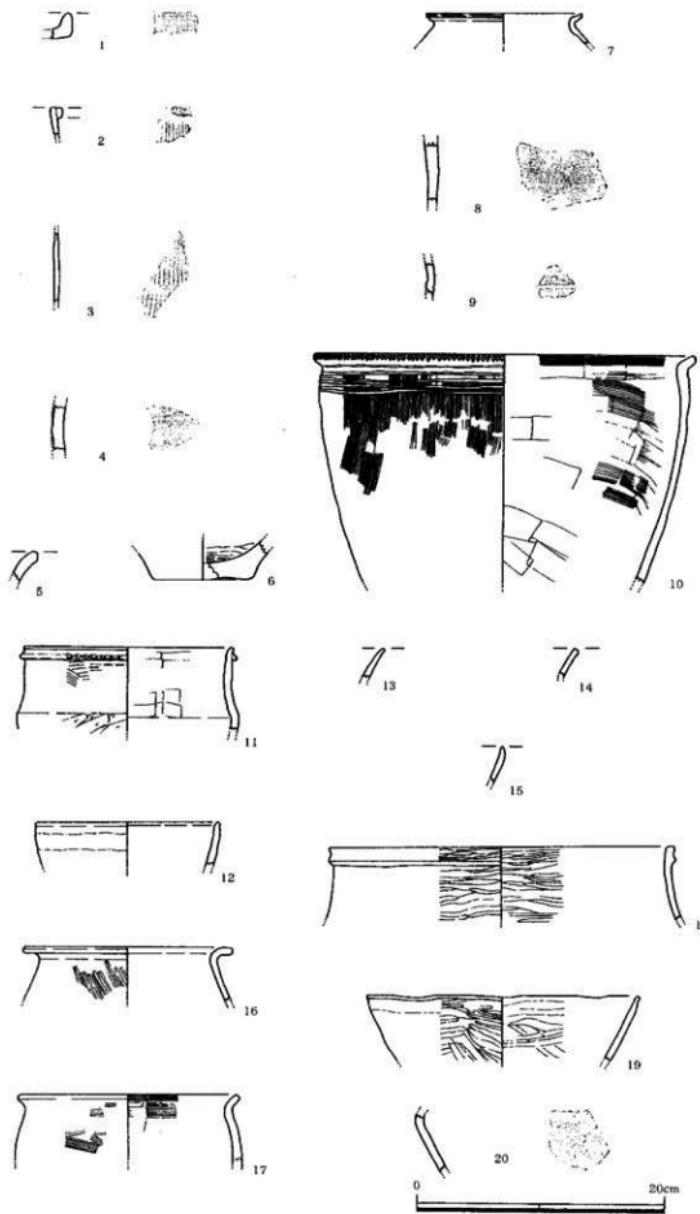


層序
 1. 淡灰色褐色混泥砂質土層
 2. 暗灰褐色混泥砂層
 3. 茶褐色砂質土層
 4. 暗褐色砂質土上フロック混灰褐色砂質土層 (透構 2層+ 8層切りこみ?)
 5. 暗灰褐色砂質土層
 6. 淡灰色砂層
 7-A. 淡黄色鐵砂層
 7-B. 同上 (色濃い)
 8-A. 淡灰色褐色粘性粗砂層
 8-B. 同上 (鐵砂質粗砂層)
 9. 淡灰茶褐色粘性土層
 10-A. 淡灰黑茶色大塊混粘砂層
 10-B. 同上 (やや粘性人)
 11. 淡褐色灰茶色大塊混粘性砂層
 12-A. 不灰色小塊混粘砂層
 12-B. 同左色明
 13-A. 明灰色砂層 (中礫层)
 13-B. 同上 (人礫层)



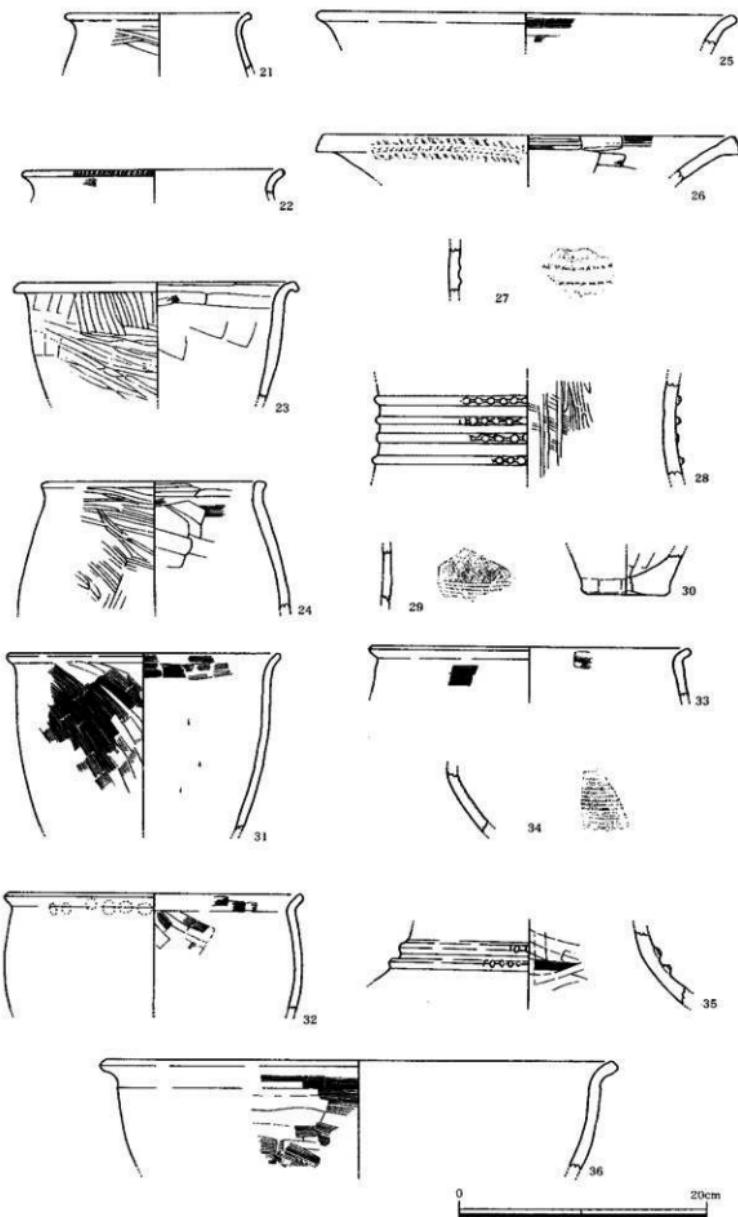
第15図 立会調査区 土層断面図 (1/40)

選機理土
 潜勢1 理土
 SK01 理土
 SK02 理土
 SD01 理土
 SD02 理土
 (1). 黑灰色色粘性砂質土層
 (2)-A. 黑灰褐色粘性砂層
 (2)-B. 同上 (色濃い)
 (3)-A. 黑灰褐色粘性
 (3)-B. 黑灰褐色粘性 (中礫层)
 (4)-A. 淡灰色 (中礫层)
 (4)-B. 淡灰色 (大礫层)
 (5)-A. 淡灰色 (大礫层)
 (5)-C. 淡灰色 (小礫层)

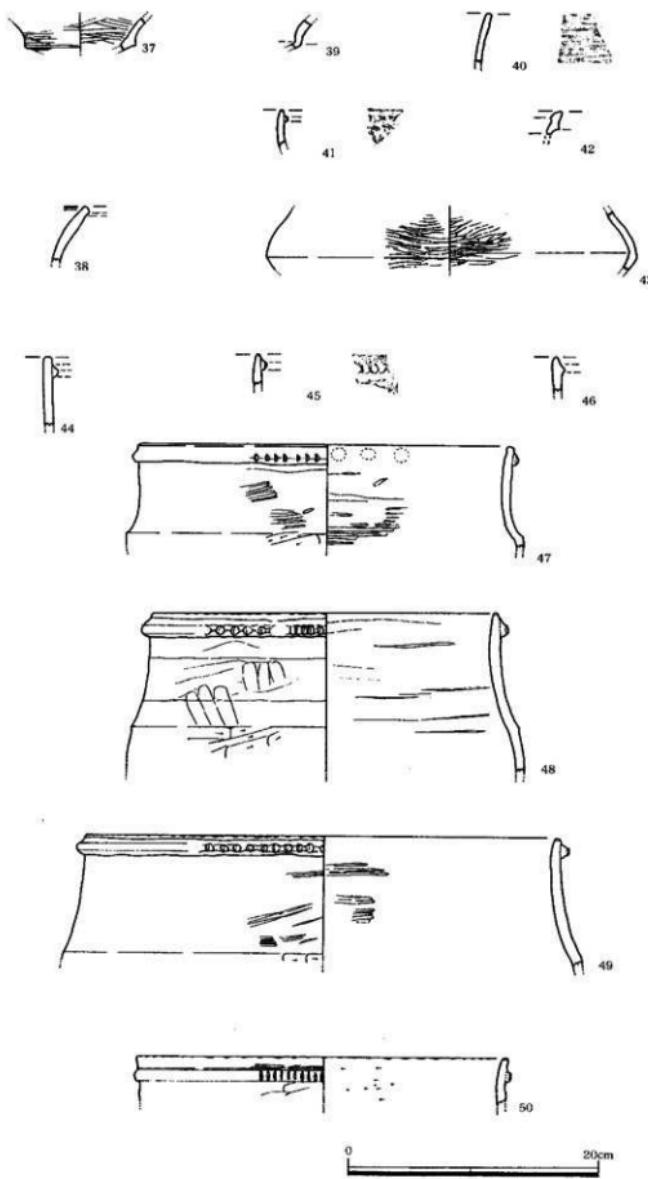


第16図 出土遺物実測図(1/4)

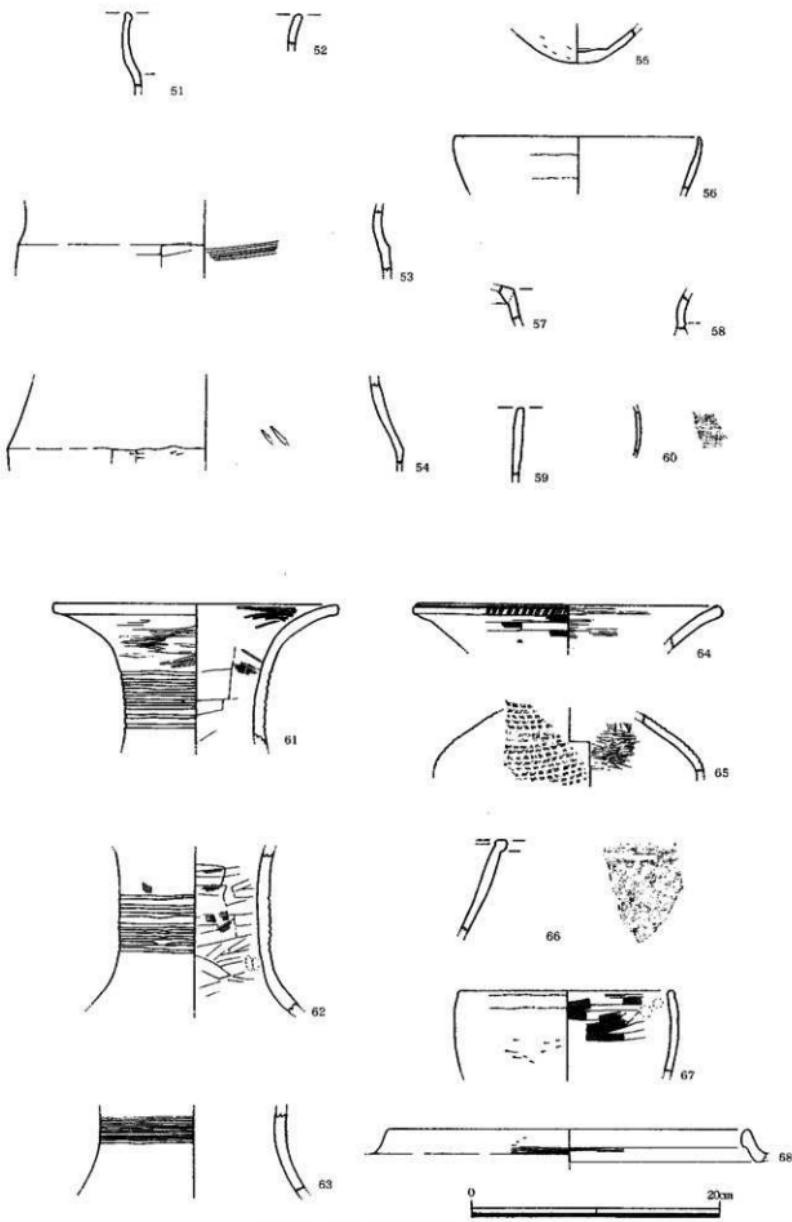
(1~6、道標1出土 7、8道標2出土 10、道標3出土
(11~15 9層土層より出土 16~19 立金SK02出土 20、立金SK02出土)



第17図 出土遺物実測図 (1/4)
(21~30 立金SD01出土 31~36 立金SD02出土)



第18図 出土遺物実測図 (1 / 4)
(37,38 7-A層出土 39~43 8層出土 44~50 9層出土)



第19図 出土遺物実測図 (1/4)

(51～58 9層出土 59,60 10-A層 61～68 立会跡出土上)

番号	調査区	出土層	器種	部位	直 墓 (cm)	形状	色 調	胎土	規 準	備考
1	遺構1内	赤牛土器 広口壺	口縁部	口径 不明 残高 2.1	やや 硬	茶褐色	非常に粗	口周部外面：施灰文 その他：横方向ナゲ		
2	遺構1内	赤生土器 無柄壺	口縁部	口径 不明 残高 3.0	やや 硬	赤褐色	やや粗	口周部外面：ヘラ掛け列埴文 体部外面：施灰文 その他：横方向ナゲ		
3	遺構1内	赤生土器 広口壺	体部	残高 7.5	硬	茶褐色	やや粗	体部外面：施灰文 その他：ナゲ		
4	遺構1内	赤生土器 広口壺	底部	口径 小明 残高 4.0	軟	褐色	非常に粗	体部外面：施追加埴文 その他：不規		
5	遺構1内	赤生土器 廣口壺	口縁部	口径 不明 残高 2.4	普通	褐灰茶色	粗	体部内外面：横方向ナゲ		
6	遺構1内	赤牛土器 金または 墨	底部 1/4	直径 8.0 残高 3.1	やや 硬	淡灰茶色	非常に粗	外面：ナゲか 内面：ヘラミガキ		
7	遺構2内 上層南星	赤生土器 壺	口縁部 1/12	口径 12.7 残高 2.4	硬	淡褐色	やや良	周部外面：輪方向ナゲ その他：横方向ナゲ		
8	遺構2内	赤生土器 広口壺	体部	口径 不明 残高 4.5	硬	茶褐色	非常に粗	外面：疑似風呂文、帶模直線文 内面：横ハケ		
9	遺構1内	赤生土器 壺?	体部	残高 2.6	やや 软	褐灰茶色	粗	外面：ナメ方向ハケメのち化様 内面：厚誠により不規	目立	
10	遺構3内	赤牛土器 壺	口縁部 1/8	口径 30.9 残高 15.2	硬	褐茶褐色	粗	口周部外面：施みび 体部外面：タテハケ (10.4/cm) 最上部にタテハケのち5条のヘラ掛け 化様 口縁部内面：ヨコハケ (10.4/cm) 体部内面：ナメハケ (7本/cm)	体部内外面に スス付着	
11	9層土器層 縄文土器 深鉢	縄文土器 深鉢	口縁部 1/10	口径 17.0 残高 6.7	やや 硬	褐灰茶色	粗	口縁部外面：ロ字割み口 肩部外面：ヨコミガキ 体部外面：板ヘラケズリ 内面：板ナゲ		
12	9層土器層 縄文土器 浅鉢	縄文土器 浅鉢	口縁部 1/10	口径 15.0 残高 3.5	軟	乳白色	やや粗	外外面：ナメメー横方向ナゲ	和製 外芯に粘土糊 成功様に既存	
13	9層土器層 縄文土器 鉢	縄文土器 鉢	口縁部	口径 不明 残高 2.4	やや 硬	褐灰茶色	粗	外面：横方向ナゲ 内面：ヨコミガキ		
14	9層土器層 縄文土器 深鉢	縄文土器 深鉢	口縁部	口径 不明 残高 2.3	硬	褐灰茶色	粗	内外面：横方向ナゲ		
15	9層土器層 縄文土器 鉢	縄文土器 鉢	口縁部	口径 不明 残高 2.9	やや 软	褐灰茶色	粗	外面：横方向ナゲ 内面：横方向ナゲ		

観察表1

番号	調査区	出土器	器種	基準 標高 率	法 長 (cm)	肉質	色 調	形 状	調 査	備 考
16	立会 SK02下層	弥生土器 壺	口縁部 1/4	口径 17.0 底高 4.3	硬	褐乳灰褐色	やや粗	口縁部外側：横方向ナデ 体部外側：既万円へラミガキ 体部内面：ナナメへ定方向ナデ		
17	立会 SK02下層	弥生土器 壺	口縁部 1/8	口径 18.0 底高 5.4	硬	褐乳色	粗	口縁部外側：横方向ナデ 体部外側：不定方向ハケ (8本/cm) 体部内面：ヨコハケ (7本/cm)		
18	立会 SK02	縄文上器 深鉢	口縁部 1/16	口径 28.0 底高 5.2	硬	黒灰茶色	やや粗	内外面：横方向へラミガキ		個人品
19	立会 SK02	弥生上器 深鉢	口縁部 1/12	口径 22.0 底高 5.2	硬	褐乳色	やや粗	内外面：横～ナメ方向へラミガキ		個人品 波状口縁
20	立会 SK01	弥生土器 壺？	蓋～肩 部 不明	残高 4.0	やや 硬	褐灰乳褐色	粗	口縁部外側：横方向ナデ 体部外側：横～ナメ方向ハケ (10本/cm) 内面：ヨコハケ (10本/cm)		
21	立会 SD1 (D地点)	弥生土器 壺	口縁部 1/12	口径 15.0 底高 2.7	硬	灰褐色	やや粗	口縁部外側：横方向ナデ 口縁部内面：横方向ナデ 体部外側：不定方向へラミガキ		外観ス ト行
22	立会 SD1B	弥生土器 壺	口縁部 1/8	口径 29.5 底高 2.0	普通	棕褐色	普通	口縁部外側：判み目 口縁部内面：横方向ナデ		
23	立会 SD1B	弥生土器 壺	口縁部 1/3	口径 22.0 底高 9.3	硬	茶灰黑色	板	口縁部外側：横方向ナデ 体部外側：ヘラミガキのちヨコハケ 体部内面：板ナダ、ヨコハケ		
24	立会 SD1B	弥生土器 壺	口縁部 1/10	口径 18.0 底高 10.2	やや 硬	暗灰茶色	粗	口縁部外側：横方向ナデ 口縁部内面：ヘラミガキ 体部外側：ヘラミガキ 体部内面：板ナダ、ヨコハケ		
25	立会 SD1B	弥生土器 広口壺	口縁部 1/20	口径 34.0 底高 2.5	硬	茶灰褐色	非常に粗	外面～口縁部内面：横方向ナデ 体部内面：ヨコハケ		
26	立会 SD1B	弥生土器 壺	口縁部 1/8	口径 33.0 底高 3.2	やや 硬	棕褐色	やや粗	口縁部外側：判み目 口縁部外側：ナデ 口縁部内面：ヨコハケ		
27	立会 SD1B	弥生土器 壺	肩部	口径 不明 底高 3.5	やや 軟		やや粗	外側：判み目欠希、横方向ナデ 内面：ナナメハケのちタテヘラミガキ		
28	立会 SD1B	弥生上器 広口壺	肩部	底高 7.6	やや 硬	淡褐灰褐色	粗	外側：貼付突起 (キヅミ)、横方向ナデ 内面：ナナメハケ (5本/cm) のちタテヘラミガキ		
29	立会 SD1B	弥生土器 壺	肩部	口径 不明 底高 4.1	やや 硬	褐灰茶色	粗	外側：ナデのち沈縮文 内面：ナナメハケのちナデ		

観察表2

番号	地区	出土場	器種	部位	残存率	法 量(cm)	鉢底	色 調	胎土	測 定	備 考
30	立会 SD 1B	弥生土器 茎又は梗	底部 1/2	底径 残高	6.2 3.3	やや 硬	暗茶灰色	粗	体部外側：瓶方向ナデ 口縁部内面：梗ナデのち瓶方向ナデ 内面：瓶ナデ		
31	立会 SD 2	弥生土器 茎	口縁部 1/10	口径 残高	21.6 14.2	やや 硬	暗茶灰色	非常に粗	体部外側：ナメ方向ハケ (10本/cm) 口縁部内面：ヨコハケ (14本/cm) のち瓶方向ナデ 体部内面：瓶方向ケリのち瓶方向ナデ	外西スヌイ系	
32	立会 SD 2 (A地点)	弥生土器 茎	口縁部 1/6	口径 残高	23.3 9.4	やや 硬	暗茶灰色	粗	体部外側：摩滅により不明 口縁部内面：ヨコハケのち瓶方向ナデ 口縁部内面：ヨコハケ 体部内面：ナメ方向ハケ (12本/cm) のちナデ	外西スヌイ系	
33	立会 SD 2A	弥生土器 茎	口縁部 1/12	口径 残高	25.3 3.9	やや 硬	暗茶灰色	粗	体部外側：ヨコハケのち瓶方向ナデ 口縁部内面：ヨコハケのち瓶方向ナデ 体部内面：ナメ方向ハケのちナデ	外西スヌイ系	
34	立会 SD 2	弥生土器 茎部 全	口縁部	口径 残高	不規 4.8	硬	暗茶灰色	やや粗	体部外側：波線文 口縁部内面：ヨコハケ (7本/cm) のち瓶方 向ナデ		
35	立会 SD 2	弥生土器 茎部 広口部	口縁部	口径 残高	不規 5.6	やや 硬	暗茶灰色	やや粗	外側：貼付突起 (キザミあり) 瓶方向ナデ 内面：ナメ方向ハケ (12本/cm)		
36	立会 SD 2A	弥生土器 茎	口縁部 1/10	口径 残高	41.0 8.7	硬	暗茶灰色	粗	体部外側：瓶～ナメ方向ハケ (7本/cm) 口縁部内面：ヨコハケのち瓶方向ナデ 体部内面：瓶方向ナデ		
37	立会 7-A層	縄文土器 浅鉢	肩部 1/6		残高	2.7	硬	暗茶灰色	粗	内外面：横方向ミガキ	混入品
38	立会 7-A層	縄文土器 浅鉢	口縁部	口径 残高	不規 4.4	やや 軟	暗茶灰色	極めて粗	内外面：横方向ナデ	混入品	
39	立会 S層	縄文土器 浅鉢	肩部		残高	2.3	やや 軟	暗茶灰色	粗	外側：横方向ミガキ 内面：横方向ナデ	
40	立会 B層	縄文土器 浅鉢	口縁部	口径 残高	不規 4.0	やや 軟	暗茶灰色	粗	外側：貝殻条板文調整 内面：横方向ナデ 口縁部：既取りのちキザミメ		
41	立会 B層	縄文土器 浅鉢	口縁部	口径 残高	不規 2.6	やや 硬	暗茶灰色	やや粗	外側：貼付突起 (D字型キザミメ) 横方向ナデ 内面：横方向ミガキ		
42	立会 B層	縄文土器 浅鉢	口縁部	口径 残高	不明 1.9	やや 硬	暗茶灰色	やや粗	内外面：横方向ナデ		
43	立会 B層	縄文土器 浅鉢	肩部	口径 残高	不規 4.5	硬	暗茶灰色	粗	内外面：横方向ミガキ		

観察表3

番号	調査区	出土層	器種	部位・往量 (ca)	形状	色調	跡上	調査	備考
44	立会 9層	縄文土器 深鉢	口縁部	口径 不明 残高 5.5	やや 斜	淡灰乳色	非常に粗	外面：貼付突帯 (D字型キザミ) 横方向ナデ 内面：横方向ナデ	
45	9層	縄文土器 深鉢	口縁部	口径 不明 残高 2.5	やや 斜	淡灰乳色	やや粗	外面：貼付突帯 (D字型キザミ) 横方向ナデ 内面：横方向ナギ 口端部：圓取りのちD字型キザミ	
46	立会 9層	縄文土器 深鉢	口縁部	口径 小柄 残高 2.8	やや 斜	淡灰茶色	非常に粗	外面：貼付突帯 (D字型キザミ) 横方向ナデ 内面：ナデか	
47	9層	縄文土器 深鉢	口縁部	口径 25.8 1/14 残高 8.0	やや 斜	淡灰灰褐色	粗	口縁部外面：貼付突帯 (D字型キザミ) 横方向ナデ 縫隙外面：横方向ミガキのち横方向ナデ 肩部外面：横方向ケズリ 肩部内面：其飽和度文調節のちナデ 船部外面：不応方向ナデ、ユビオサエ	
48	立会 9層	縄文土器 深鉢	口縁部	口径 28.0 1/8 残高 12.7	粗	淡灰灰褐色	非常に粗	口縁部外面：貼付突帯 (D字型キザミ) 横方向ナデ 口縁部：山取りのちD字型キザミ 縫隙外面：横方向ミガキのち横方向ナデ 肩部外面：横方向ケズリ 肩部内面：横方向ナデ	
49	立会 9層	縄文土器 深鉢	口縁部	口径 38.2 1/12 残高 10.3	やや 斜	淡灰灰褐色	粗	口縁部外面：貼付突帯 (D字型キザミ) 横方向ナデ 口縁部：圓取りのちD字型キザミ 縫隙外面：横方向ミガキのち横方向ナデ 肩部外面：横方向ケズリ 肩部内面：其飽和度文調節のち横方向ナデ	
50	立会 9層上面 土器集中箇所	縄文土器 深鉢	口縁部	口径 30.0 1/18 残高 3.9	やや 斜	淡灰乳色	粗	口縁部外面：貼付突帯 (D字型キザミ) 横方向ナデ 振ナデ (突唇) 口縁部：圓取りのちD字型キザミ 内面：横方向ケズリ	
51	9層	縄文土器 深鉢	口縁部	口径 不明 残高 5.8	やや 斜	黒灰色	非常に粗	縫隙外面：ナデ 肩部外面：横方向ケズリ 肩部内面：横方向ミガキのち横方向ナデ 肩部外側：横方向ナデ	
52	9層	縄文土器 深鉢	口縁部	口径 不明 残高 2.5	やや 斜	淡灰乳色	やや粗	外面：其飽和度文調節 内面：横方向ナデ	
53	立会 9層上面 土器集中箇所	縄文土器 深鉢	断部	口径 不明 残高 4.9	やや 傾	淡灰褐色	やや粗	縫隙外面：横方向ナデ 肩部外面：横方向ケズリ 肩部内面：其飽和度文調節のち横方向ナデ 肩部内面：横方向ナデ	
54	立会 9層上面 土器集中箇所	縄文土器 深鉢	底部	口径 不明 残高 6.4	やや 傾	淡灰茶色	普通	縫隙外面：横方向ナデ 肩部外面：横方向ケズリ 肩部内面：其飽和度文調節のち横方向ナデ 内面：不定方向ナデ	
55	立会 9層上面 土器集中箇所	縄文土器 深鉢	底部	口径 不明 残高 2.8	粗	乳白色	非常に粗	外面：ケズリ 内面：ナデ	
56	立会 9層上面 土器集中箇所	縄文土器 深鉢	口縁部	口径 不明 残高 4.3	粗	黒灰色	粗	口縁部外面：横方向ナデ 外面：横方向ケズリのち一ナデ 内面：横方向ケズリ	外間に灰土堆 難日枝存

観察表4

番号	測定区	出土層	器種	部位置	弦量(cm)	形状	色調	胎土	測定	備考
57	立会 9層上部 上部集中窓所	圓文土器 浅鉢	肩部	口径 不明 残高 2.8	やや 鼓	乳白色	粗	腹部外観：横方向ナデ 筋部外観：不定方向ケズリ 内面：不定方向ナデ		
58	立会 8層	圓文土器 浅鉢	肩部	口径 不明 残高 2.8	やや 鼓	暗灰褐色	粗	外観：横方向ナデ 内面：ミガキ		
59	10-A層	圓文土器 浅鉢	口縁部	口径 不明 残高 5.5	やや 鼓	淡暗灰茶色	粗	外観：貝壳子状文様、横方向状文様 内面：横方向ミガキ		
60	10-A層	圓文土器 鉢?	体部	口径 不明 残高 3.4	直通	暗褐色	やや粗	外観：貝壳子状文様、横方向状文様 の一部肥厚向ミガキ 内面：ナデ		
61	立会 上げ土	弥生土器 広口壺	口縁部 1/12	口径 22.8 残高 11.3	鼓	暗灰乳白色	やや粗	口縫部外観：横方向ナデ 筋部外観：横方向ミガキ、8条沈線 口縫部内面：横方向ミガキ 筋部外観：板ナデ、抵觸力向ミガキ		
62	立会 上げ土	弥生土器 広口壺	頸部 1/4	口径 不明 残高 12.7	やや 鼓	暗灰乳白色	粗	頸部外観：磨滅により不明、8条沈線 頸部内面：横方向ミガキのも横方向ナデ		
63	立会 上げ土	弥生土器 広口壺	頸部 1/4	口径 不明 残高 8.4	やや 鼓	暗灰褐色	粗	頸部外観：ナメハケのち横方向ナデ 頸部内面：不定方向ナデ		
64	立会 上げ土	弥生土器 広口壺	口縁部 1/10	口径 24.0 残高 3.5	やや 鼓	暗灰茶色	やや粗	口縫部外観：沈線のち籠状キザミメ 口縫部内面：絞状キザミメ 口縫部外観：横ハケのち横方向ナデ	内面スス付着	
65	立会 上げ土	弥生土器 壺	肩部 1/10	肩部径 21.6 残高 5.1	やや 鼓	暗灰茶色	やや粗	肩部外観：沈線のちキザミメ(多条) 多条文様の間は横方向ミガキ 肩部外観：横方向ミガキのち横方向ミガキ	内面黒色剥離	
66	立会 上げ土	弥生土器 鉢	口縁部	口径 不明 残高 7.5	やや 鼓	茶褐色	粗	口縫部内面：横方向ナデ 体部外観：不定方向ハケ (日本/cm) 体部内面：不定方向ハケ (12本/cm)		
67	立会 上げ土	圓文土器 浅鉢	口縁部 1/8	口径 17.2 残高 6.6	やや 鼓	暗灰茶色	粗	口縫部外観：横方向ナデ 体部外観：横ケズリのちナデ 体部外観：横ケズリのも横方向ハケメ (14本/cm) ; 部ユビオサエ	外観スス付着	
68	立会 上げ土	圓文土器 浅鉢	口縁部 1/12	口径 29.0 残高 2.7	鼓	淡赤褐色	やや粗	口縫部外観：横方向ミガキ 口縫部内面：横方向ケズリのち横方向ミガキ		

※今回図化できなかつたが、この他にサヌカイト製石器未製品（1点）、磨製石器未製品（1点）等が出土している。

観察表5

98-278調査地 土層及び遺構		出土遺物(組入品除く) (1:分類 2:個数)	八尾市教委1986年度調査地 土層及び遺構 (3:地盤・特徴)	土層及び遺構の時期
1層		_____		古代
2層		_____		近～(現代)
3層上面 立会SK01		甕?1 (10)		弥生期IV式様以降
3層		甕1 広口壺5		弥生期IV式様以降
6層上面	遺構1 (1:分類 2: 個数)	甕?1 広口壺2 (1) 気泡甕1 (2) 甕または甕(底部)4	3層上面 S P 2~17 (弥生中期) S P 1 (縄文後期)	弥生期II～III式様期
	遺構2 (1:分類 2: 個数)	広口壺3 (8) 甕1 (7) 甕または甕(底部)1		
	立会SK02 (1:分類 2: 個数)	甕2 (17, 18) 甕?1		
5層		なし	3層 (遺物なし)	弥生期I様式新段階～II様式初期
7～8層			3層 (遺物なし)	弥生期I様式新段階
7～B層上面 立会SD01		広口壺6 (15～19) 甕4 (2)～(4) 甕または甕底部1 (30)		弥生期I様式新段階
7～B層		縄文後期～弥生前期？土器片	3層 (遺物なし)	弥生期I様式新段階
8層上面？ 遺構3		甕1 (10)		弥生期I様式(中)新段階
8層上面 立会SD02		甕5 (3)～(33) 広口壺2 (34, 35) 体1 (36)		弥生期I様式新段階
			4層上面 S P 18～22 S P 21 (縄文後期)	縄文後原式期
			4層 (縄文後原式期、船橋式期、長崎式期)	縄文後原式期
6層		縄体2 (40, 41) 瓢体3 (39, 42, 43) 体1 甕?1		縄文後原式IV式期
9層 土器擦り		縄体7 (11, 13, 14) 瓢体2 (12) 体1 (15)		縄文後原式IV式期
9層上面 土器集中遺所		縄体4 (58, 55, 54, 52) 瓢体1 (57)		
9層		縄体5 (44～49 51, 52) 体1 (56) 瓢体1 (58)	5～6層 (縄文後原式～IV式期)	縄文後原式IV式期
10～A層		縄体1 (59) 瓢体?1 体1 (60)	6層 SW1 (縄文後原式期)	縄文後原式IV式期？
10～B層		なし		
11層		なし		
12層上面 自然洗浄？(12層)			7層上面 S 01 (縄文後原式期)	縄文後原式期
12層			7層 (遺物なし)	

本文表 土層・遺構別の出土遺物及び1986年度調査地との層位関係

6.まとめ

今回の調査地では縄文晩期中葉から弥生時代中期に至る遺構面、包含層を確認した。遺構面は河川氾濫による砂層の堆積に挟まれながらも、連続と累積している。本調査地の近隣西側で行われた本課による1986年度の調査との層位的な対応を、ある程度確認することができた（本文表参照）。狭小な調査区である上に最終的には立会調査であったため、限界のあるデータではあるが、今後、恩智遺跡の性格を検討していく材料の一つとして、ここから伺える当遺跡の時期別の動向を素描しておく。まず縄文時代晩期中葉、滋賀里Ⅲ式期の段階に当調査地周辺の天王の杜近辺で集落の営みが開始される。次の段階の縄文時代晩期後葉の滋賀里Ⅳ式期には密な包含層が確認されており、当該期の当地での集落の発展が伺える。本調査地では確認されていないが、1986年度調査地では船橋・長原式期の包含層、遺構面が確認されており、縄文時代晩期末葉にも引き続き集落が営まれたことがわかる。本調査地では当該期の包含層は河川氾濫層（8層）により削平された可能性があり、8層の上面に弥生時代前期新段階期の遺構が確認されている。さらにこの遺構面を覆う2回目の河川氾濫による堆積層（7-B層）の上面にも同期の遺構が確認されている。さらにこの後、弥生時代中期第II様式期までの間に3回目の河川氾濫による堆積（6層）がみられる。この層は1986年度調査地でも第3層として確認されている。この層の上面では弥生時代中期第II様式～IV様式期の遺構が確認されている。この弥生時代中期の遺構面となる河川氾濫堆積層と対応する土層は、恩智中町2、3丁目地内の複数の調査地でも確認されており、当遺跡の鍵層となる可能性がある。

恩智遺跡では縄文時代晩期の遺構・遺物は天王の杜近辺の限定された範囲でしか確認されていない。弥生時代前期の遺構・遺物は恩智中町2丁目、同3丁目一帯で確認されており、弥生時代中期にはこの範囲で非常に密な遺構・遺物が確認されている。当調査地でのデータを基に類推すれば、恩智遺跡では縄文時代晩期に天王の杜付近の限定された範囲で集落が形成され、弥生時代前期末には河川氾濫に阻まれやや不安定な様相をみせながらも、集落域は恩智中町2丁目、同3丁目一帯（南北長700m×東西長600m程度）の範囲に拡大し、弥生時代中期にはそれ以降の河川氾濫もなく、安定した集落が形成されたとみられる。しかしながら今後の発掘調査で、弥生時代中期遺構面構成層の河川氾濫堆積層の下に、広い範囲で縄文時代晩期の包含層が確認される可能性は充分あり注意を要する。

なお、本調査地周辺では弥生時代前期古・中段階期の遺構・遺物は確認されていない。本調査地と1986年度調査地のありかたをみると限りでは、縄文時代晩期末の長原・船橋式期から弥生時代前期末の間に集落が壊滅したか、平野部では長原式土器と弥生時代前期古・中段階期の土器が併存する時期に、当該地では船橋・長原式の土器が引き続き使用されていた可能性もある。しかしながらこのことを検討するには未だ恩智遺跡内の調査データは僅少であり、未報告資料の検討も不充分である。今後の重要な検討課題としておきたい。

（吉田野乃）

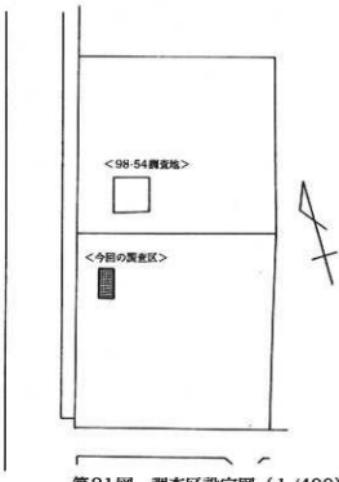
- 参考文献 1、家根祥多「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』雄山閣
2、寺沢薰・森井貞雄「河内地域」「弥生土器の様式と編年—畿内編I—」木耳社 1989
3、鶴村友子「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書」八尾市教育委員会 1987
4、猪斎「恩智遺跡(97-310)の調査」「八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書!」八尾市教育委員会 1988

2-3. 恩智遺跡（98-395）の調査

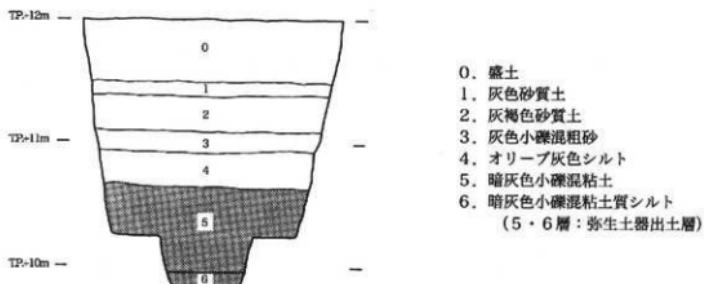
1. 調査地 恩智中町1丁目50
2. 調査期間 平成10年11月19日
3. 調査方法 専用住宅建設に先立ち、浄化槽設置部分について、2.1m×1.3mの範囲を地表下2m付近まで、人力掘削により遺構確認調査を行った。なお、本調査区は、2-1(98-54)の調査地の南側に隣接しており、両調査区との距離は約5mほどの距離にある。
4. 調査概要 現地表面は、2-1とはほぼ同様の高さで、T.P.+12.0mを測る。層厚約0.5m～0.6mの盛土層があり、以下地表下0.9m～1.1mが中世頃の河川堆積層となる。遺構・遺物は確認できなかった。
- そして、地表下1.4m～2.15mの暗灰色小レキ混粘土～粘土質シルト層(5・6層)が、弥生時代中期(IV様式)の遺物包含層となり、弥生土器(1：大型甕口縁部・2：甕口縁部・3：鉢口縁部・4、5：壺底部)の破片やサヌカイト製の石器類(6：石鏃未完成品)・剥片が出土している。但し、2-1で出土した弥生土器と比べて、ほとんどが小片であり、出土量も少なかった。遺構等は確認できなかった。
5. まとめ 今回の調査では、2-1の調査区と同様にT.P.+10.5m付近において、弥生時代中期の密な遺物包含層を確認できた。調査面積が狭小であったため、遺構等は検出できなかつたが、今後の調査で該期の集落域の範囲・様相が明らかになることを期待したい。
(藤井)



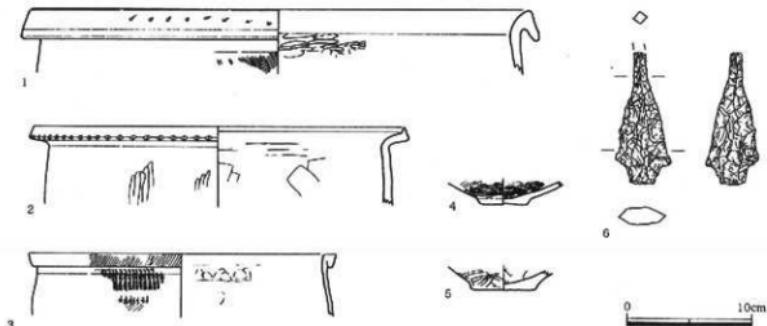
第20図 調査地周辺図 (1/5000)



第21図 調査区設定図 (1/400)



第22図 土層断面図 (1/40)



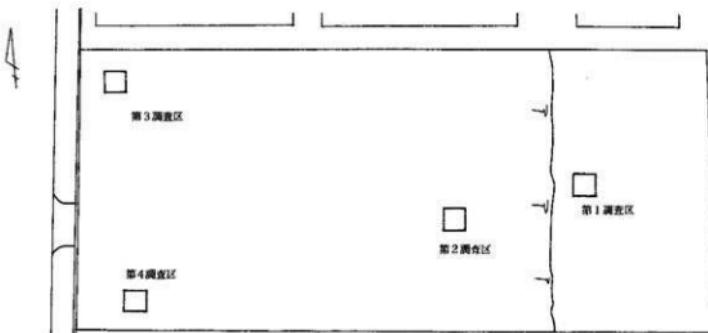
第23図 出土遺物実測図 (1/4) (土器: 1/4・石器: 1/2)

3. 萱振遺跡（98-9）の調査

1. 調査地 萩振5丁目11番地4
2. 調査期間 平成10年4月7日
3. 調査方法 事業計画地は水田として利用されている西部分が隣接している歩道上面より0.7m前後くなっていたが東側の1/3は高くなってしまっており、歩道上面との差は0.2m～0.3mとなる。このような土地に対し、建物及び配水管設置部分を対象として2m×2mの調査区を4ヶ所設定し、地表下0.7m～1.3mまで土層観察を中心とした調査を行った。
4. 調査概要及び遺物について 1区・・・東側の高まりに設定した。上面はT.P + 5.45m前後。盛土層は約0.45mで、地表下1～1.1mの暗茶灰色粘砂（T.P + 4.4～4.3m）で、南北方向の溝（SD101）を検出した。溝は東肩を確認しただけであったが、深さ0.16mを測り、灰色細砂混粘質土を埋土とする。埋土からは遺物は出土していないが、包含層からは瓦器碗、灰釉陶器片に混じって須恵器蓋杯（1・2）や土師器片が出土していることから中世以降のものといえる。
- 2区・・・中央部分に設定した。上面はT.P + 5.0m前後。遺物は表土下部の茶灰色粘砂でも瓦器や土師器片、平瓦（3）、丸瓦（4）が散見される。また、地表下0.5m前後の暗黄茶色粘質土でも土師器片が出土する。この下部層は暗茶灰色砂粒混粘砂でT.P + 4.3m前後にあり、遺構は認められなかったが第1区の遺構検出面と対応するものと思われる。また、地表下0.9mでは粗砂の堆積を確認したことから流路が存在しているものと推定できる。



第24図 調査地周辺図（1/5000）



第25図 調査区設定図 (1/500)

3区・・・北西端の人孔設置付近に設定した。上面はT.P + 4.98m前後。ここでは南西から北東への溝(SD301)を検出した。溝本来の切り込み面は中世以降の削平により明確ではないが、南壁の状況から暗灰褐色粘土上面 (T.P + 4.63m前後)と推定される。埋土は灰色砂粒混粘土で、深さ0.38mを測る。埋土中より、土師器碗(5)や須恵器杯蓋などに混じり馬齒が出土した。また、遺構面には炭化物がみられ、土師器片や須恵器片が出土する。

さらに地表下0.5 m(T.P + 4.48 m前後)の暗灰黄褐色砂質土の南壁付近で土坑(SK301)を検出した。土坑はその大半が調査区外に伸びるため全容は不明であるが、東西長0.83m以上、深さ0.35mで、暗茶灰色粘土を埋土とする。遺物は庄内式新相の範疇に属する庄内甕(6)と直口壺(7)の他、壺口縁部が出土した。

4区・・・南西端に設定した。上面はT.P + 4.98 m前後。約0.7 m掘削を行ったが顕著な遺構を検出することはできなかった。しかし、T.P + 4.3 m前後で暗茶灰色砂粒混粘土があり、これは1区の遺構面に対応するものといえよう。

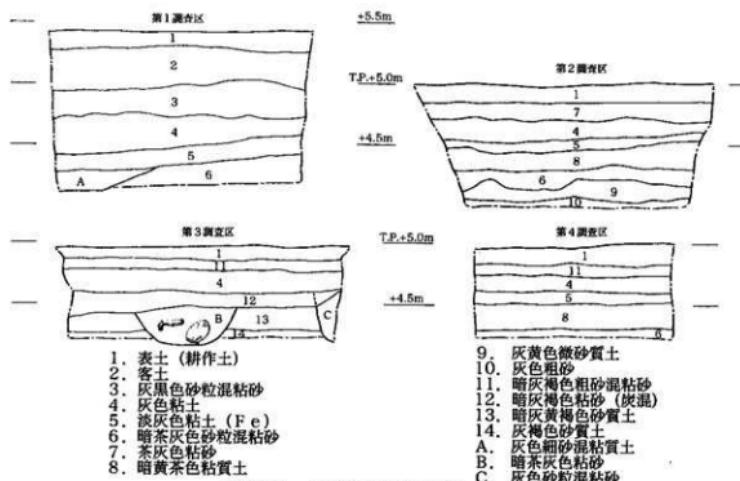
5.まとめ

以上を整理すると、とくに1区～3区でみられた灰色粘土が鍵層となる。2区では灰色粘土の上部層が中世の遺物を含んでおり、1区は灰色粘土の直上部層が耕作土であることから、1区周辺の高まりは中世以降に盛られたものと考えられる。

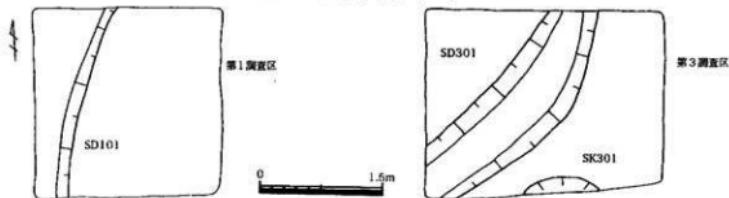
灰色粘土下部では遺物包含層をはさんでT.P + 4.3 m前後で暗茶灰色粘土をベースとする古墳時代後期から中世の遺構面が1・2・4区で確認された。しかし、3区では灰色粘土層直下が古墳時代中期～後期の包含層となり、T.P + 4.48 m前後で庄内式期の遺構が唯一遺存していた。このようなことから、3区周辺はまわりよりやや微高地状を呈していたため、庄内式期の遺構が残存していたものと推定される。

大阪府が調査地西約150 mの学校建設に伴う調査を行い、とくに庄内式期から中世にかけて顕著な遺構を検出して、当地の歴史の一端が明らかになった。今回の調査は同時期の遺構の広がりを確認できたものと思う。

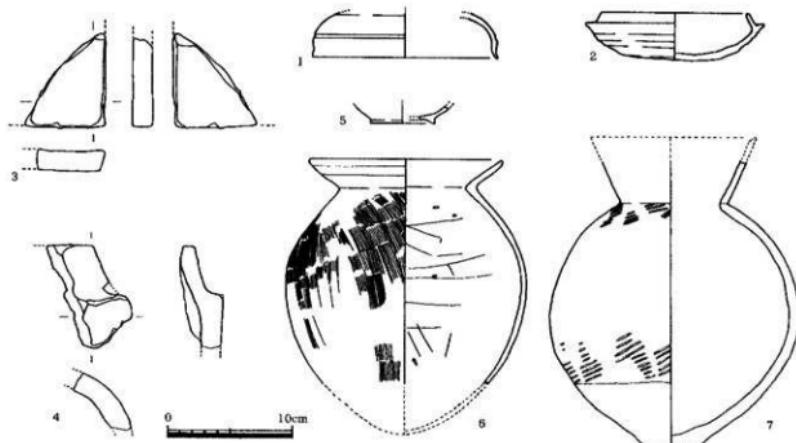
(消)



第26図 土層断面図 (1 / 40)



第27図 遺構平面図 (1 / 60)



第28図 出土遺物実測図 (1 / 4)

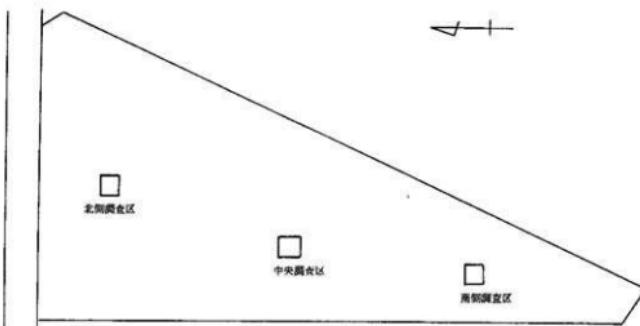
4. 木の本遺跡（97-515）の調査

1. 調査地 八尾市南木の本5丁目34、35-1、40
2. 調査期間 平成10年2月12～13日（調査担当 12日 吉田野乃、13日 藤井淳弘）
3. 調査方法 施工予定地内の北と南と中央に3m四方の調査区を設定し、地表下3.0m前後まで重機と人力を併用して掘削した。
4. 調査概要 北側調査区では地表下1.1m～1.4mの黄褐色粘性砂層及びこの下の褐色斑灰色粘土層で土師器の手の字状口縁の皿片や黒色土器A類の楕片を含む土層を確認した。特に黄褐色粘性砂層直上にこれらの土器片が散布していた。褐色斑灰色粘土層は鉄分が斑点状にみられ、上面がやや凹凸状をなしていた。この上の黄褐色粘性砂層は洪水砂ではないかとみられ、平安時代の水田面である可能性が高い。上面でTP+8.5m前後を測る。さらに地表下3.0m前後まで確認したが、自然堆積かとみられる灰青色～灰緑色の粘土層、シルト層であった。南側調査区では地表下0.9m前後で、北側調査区の水田面に対応するかとみられる褐色斑灰色強粘土層（上面でTP+8.96m）を確認した。ここでは直上に砂層はみられず、遺物もまったく確認できなかった。さらに下層も北側調査区と同様の自然堆積状の土層であった。中央調査区では地表下0.16m～0.46mで近世とみられる土器片を含む茶灰褐色粘性砂質土を確認した。さらに地表下1.2mで北側調査区で確認した水田面（上面でTP+8.59m）を、この上で黄褐色粘性砂層を確認したが、遺物はまったく確認できなかった。下層は北側調査区と同様の自然堆積状の土層であった。

今回の調査区では平安時代中期の水田面を検出した。この遺構は当調査地の東側に拡がる八尾空港の整備事業に伴い、1982～1983年に（財）八尾市文化財調査



第29図 調査地周辺図 (1/5000)



第30図 調査区設定図 (1/800)

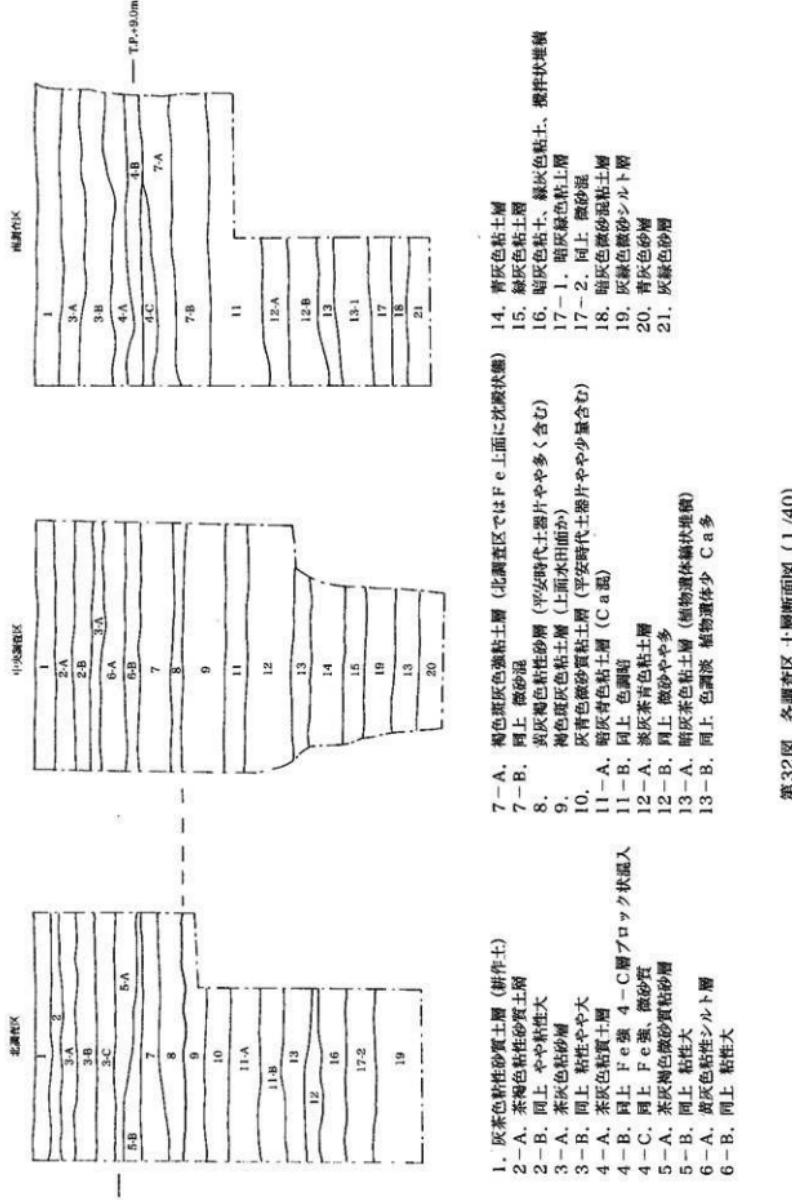


第31図 出土遺物実測図 (1/4)

研究会による発掘調査で明らかにされた古代条里制と合致する水田遺構群とつながるものとみられる。

(吉田野乃)

参考資料 原田昌則他 1984 『木の本遺跡－八尾空港整備事業に伴う発掘調査－』
(財)八尾市文化財調査研究会



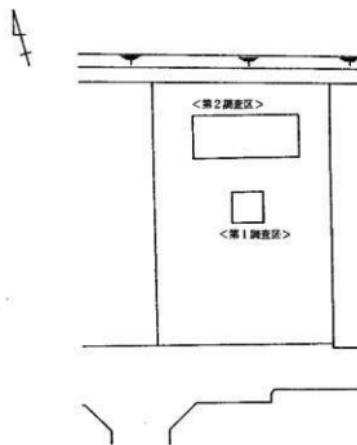
第32図 各調査区 土層断面図 (1/40)

5-1. 久宝寺遺跡（97-694）の調査

1. 調査地 久宝寺4丁目132-7の一部
2. 調査期間 平成10年3月19日（第1調査区）・3月30日～4月2日（第2調査区）
3. 調査方法 事務所付専用住宅建設に伴い、建設予定地内の南側に2m×2mの調査区と北側に3.5m×8.5mの調査区の2ヵ所を設定（南側を第1調査区・北側を第2調査区と呼称）し、それぞれ地表下2.0m付近まで遺構確認調査を行った。
4. 調査概要 第1調査区 現地表面は、T.P.+8.1mを測る。地表下0.7mまでは、盛土及び整地層が続く。この層からは、少量の陶磁器・瓦等が出土している。
そして、地表下0.7m～1.15mの褐色粘質土層（6層）には、陶磁器・土師器・須恵器・瓦器・黒色土器・瓦・弥生土器・埴輪等が含まれている。この層は、近世～中世の遺物包含層と考えられ、地表下1.15mにおいて土坑1基を検出している。出土遺物には須恵器の壺の破片（1）、土師皿等がある。
さらに、地表下1.5m～1.65m付近の暗灰色微砂層（12層）においては、布留式土器片や土師器・弥生土器の小片（底部：2・3）を含む層を確認しているものの、顕著な遺構等は検出できなかった。以下、地表下1.8mから掘削範囲となる地表下2.05mまでは河川堆積層が続くことを確認している。
- 第2調査区 現地表面は、第1調査区と同様にT.P.+8.1mを測る。そして、盛土層の直下、地表下0.5m付近において南北方向の溝（南北溝）を検出した。調査区の西側で検出したこの溝は、幅約2.6m、深さ約0.75mを測る。出土遺物には、陶磁器・土師皿（4）・すり鉢（5）・瓦（6）・瓦器・羽釜・黒色土器・須恵器・円筒埴輪（V期：7）・形象埴輪（蓋形埴輪立ち飾り部分：8）等の破片が出土してい

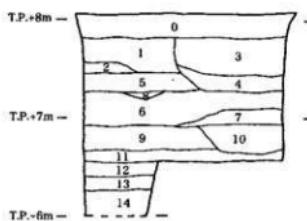


第33図 調査地周辺図（1/5000）



第34図 調査区設定図 (1/400)

[第1調査区]



- | | |
|------------------|--------------|
| 0. 盛土 | 8. 灰色粘砂 |
| 1. 茶褐色砂質土 | 9. 暗褐色粘質土 |
| 2. 黄褐色粘質土 | 10. 暗灰色粘質土 |
| 3. 暗灰色粘質土 | 11. 暗褐色砂混粘質土 |
| 4. 淡灰青色粗砂 | 12. 暗灰色微砂 |
| 5. 暗褐色粘質土 | 13. 淡灰色細砂 |
| 6. 暗褐色粘質土 | 14. 灰白色粗砂 |
| 7. 暗褐色粘質土 (やや暗い) | |

第35図 土層断面図(1/50)



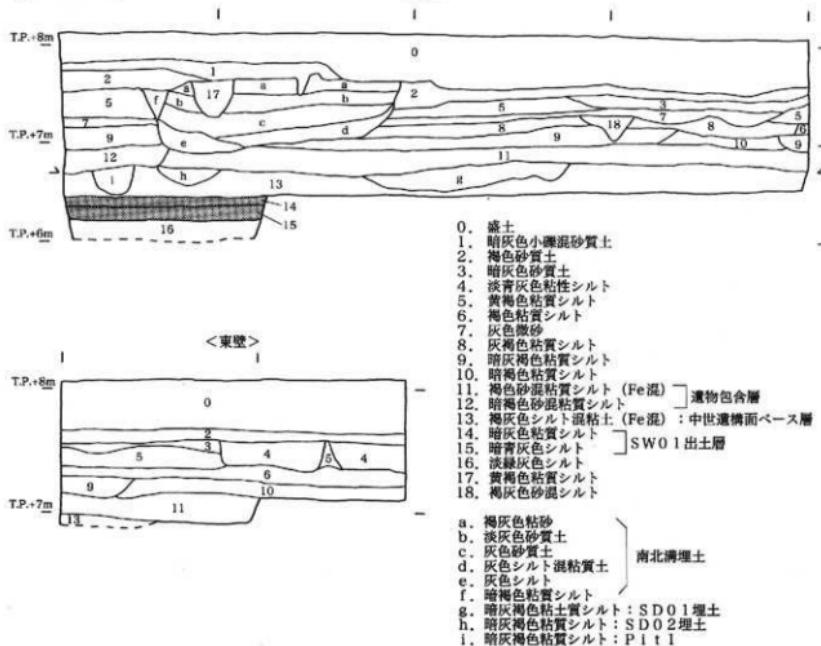
第36図 出土遺物実測図 (1/4)

る。これらの遺物からは、時期は決定しにくいものの、久宝寺寺内町に関する時期の溝の可能性が高い。但し、この溝の性格については不明である。

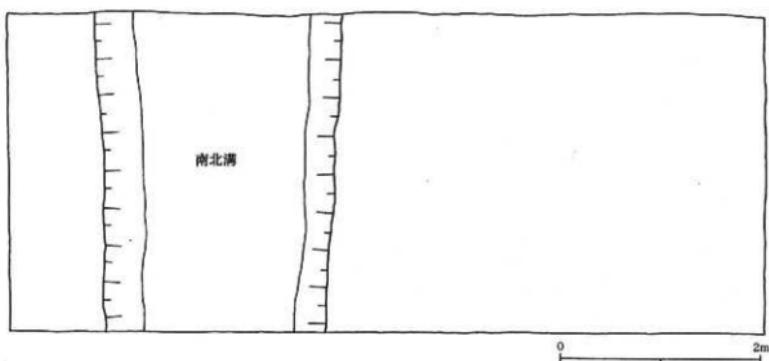
そして、地表下0.8m～0.9mの間（層厚約0.05m）に灰色微砂層があり、以下地表下0.95m～1.45mの褐色砂混粘質シルト層（11層）が遺物包含層となる。この層からは、瓦器（底部：9・10）・土師皿（11・12）・黒色土器（椀：13）・

[第2調査区]

<北壁>



第37図 土層断面図 (1/50)



第38図 近世遺構面平面図 (1/50)

須恵器（楕底部：14）・平瓦（15・16）・羽釜・円筒埴輪（V期：17）・弥生土器（底部：18・19）の破片が多数出土している。

そして、地表下1.45m付近の褐灰色シルト混粘土層（13層）をベース層として中世～平安時代後期頃の遺構面となり、曲げ物枠の井戸（SE01）、その周囲を囲む溝（SD01）、ピット（Pit1）、その東側に南北方向の溝（SD02）を検出した。

SE01は、約0.5mの高さの曲げ物を使用した井戸で、直径約0.4mを測る。湧水層までの深さは約0.6mであった。出土遺物としては、曲げ物枠井戸の埋土の上層に置かれていた土師質の磚（20）の破片、土師器片がある。さらにこの井戸の西側には、水組み用の桶等の紐を結ぶための突起物が、高杯の脚部（21）の軸部分を代用として埋められていた。

SD01は、SE01の周囲を囲む方形区画状の溝で、幅約0.4m、深さ約0.2m～0.3mを測る。埋土は、暗灰色微砂である。出土遺物には、土師器、黒色土器、弥生土器の小片がある。SE01と同時期のものと考えられる。

SD02は、SE01の東側で検出した南北方向の溝で、幅約1.8m、深さ約0.2mを測る。埋土は、暗灰褐色粘土質シルトである。出土遺物には、瓦器、土師皿、埴輪（家形埴輪床先部？：22）、土師器（直口壺口縁：23）、須恵器、布留式甕、弥生土器等がある。この溝は、SD01よりも時期が新しく、それぞれの関係は不明である。

さらに、この遺構面のベース層となった13層にも土師器・弥生土器等の破片が含まれており、遺物包含層となる。固化できた出土遺物には、布留式甕口縁（24）、庄内式甕（25）、V様式系甕（26・底部：27・28）、小型丸底甕（29）、壺口縁（30）、器台脚部（31）がある。

そして、地表下1.7m～1.95m付近（T.P.+6.4m～6.15m：14・15層）において、布留系土器等の完形品が出土した集積（SW01）が調査区東端で検出された。南から北へと落ち込む遺構の一部の遺物と考えられる。埋土は、暗灰色粘土質シルト、暗青灰色シルトである。

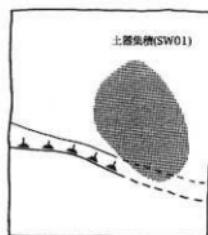
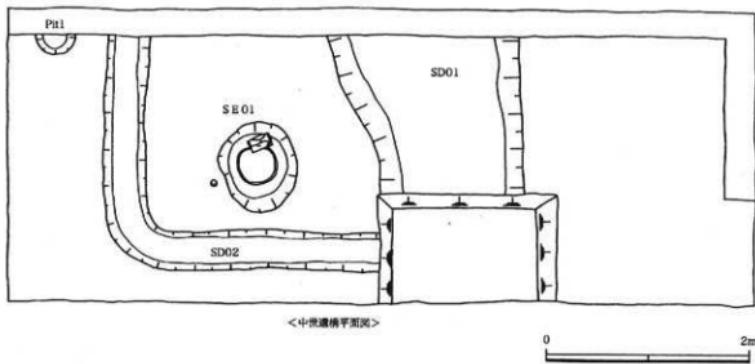
SW01の遺物は、（32）～（40）である。（32）・（33）は、小型丸底甕の完形品である。口縁部径が体部径をわずかに凌駕する。器面は横方向のヘラミガキを施す。口縁内側に暗面を施す。（34）・（35）・（36）は、有段口縁小型鉢である。（34）・（35）は完形品である。器面は横方向のヘラミガキを施し、内面は暗文を施す。（37）・（38）・（39）は布留系甕で、そのうち（37）・（38）は完形品である。やや下膨らみに球形化しており、外面はハケ調整である。（40）は庄内式甕の完形品で、ほとんど球形化しており、外面は全面ハケ調整である。

これらの小型丸底甕と甕の構成から庄内式期IV～布留式期Iの土器集積であると考えられる。

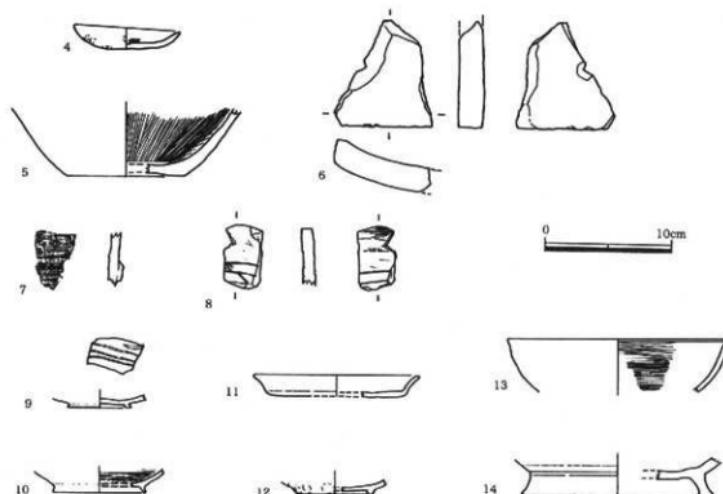
この古墳時代前期以下の層は、第1調査区と同様に河川堆積層が続く。

5.まとめ

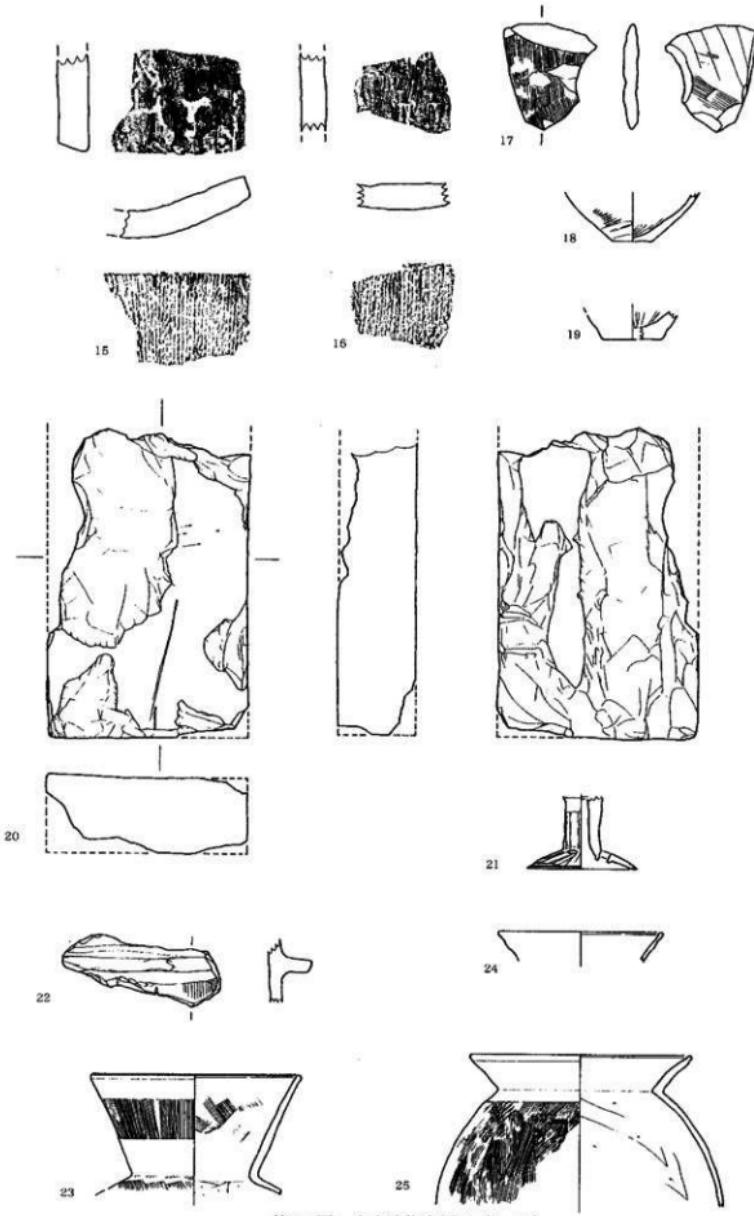
今回の調査区は、現在の顕正寺の南側になり、久宝寺寺内町の環濠の外にあたる【八尾市教育委員会1988】ところになる。今回の調査では、南北溝が該期の遺構として考えられるが、環濠との関係については不明である。



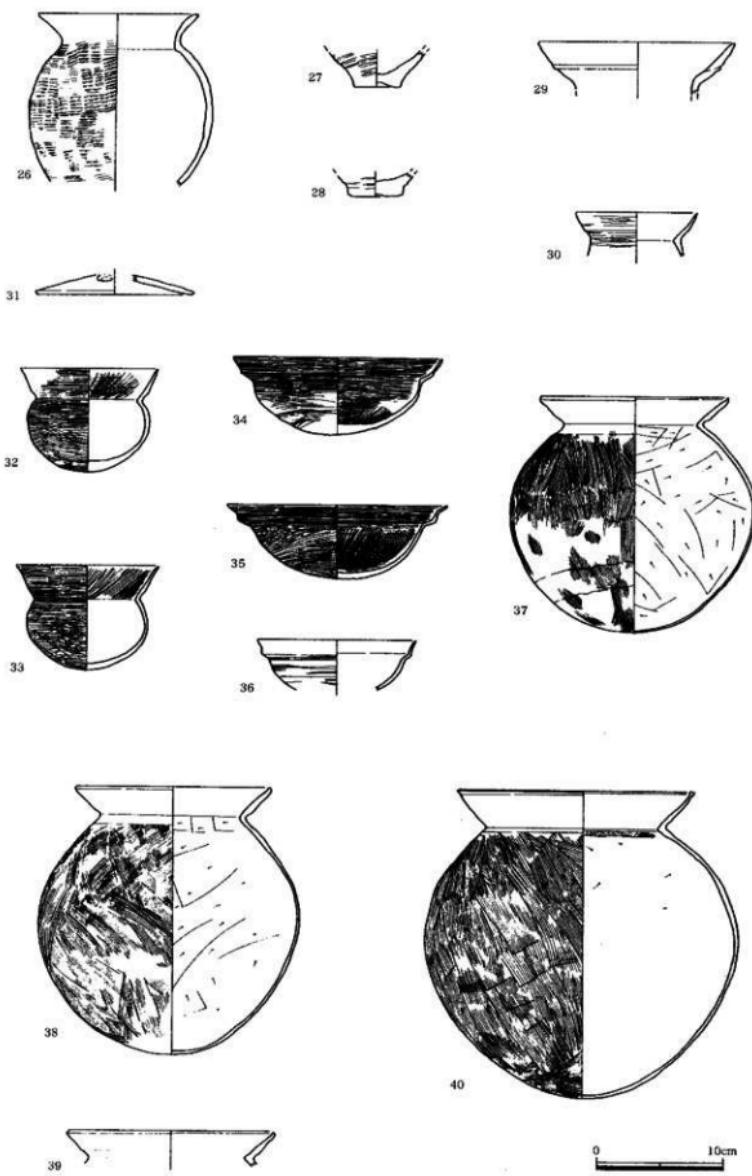
第39図 中世・古墳時代前期 遺構平面図 (1 / 50)



第40図 出土遺物実測図 (1 / 4)



第41図 出土遺物実測図 (1/4)



第42図 出土遺物実測図 (1 / 4)

そして、中世～平安時代後期頃と思われる井戸、埴輪や須恵器等を含む溝など寺内町形成以前の集落の様相を示す遺構を確認した。出土した磚の存在から寺院の存在も考えられる。寺内町以前の集落の様相と寺内町の成立過程の解明を今後の周辺の調査において期待されるところである。

さらに、古墳時代前期(布留式期)の土器集積(SW01)は、今回の調査区の東側約100mの所で確認された方形周溝墓【(財)八尾市文化財調査研究会1989】とほぼ同時期であると考えられる。この周辺は、古墳時代前期(布留式期)においては、墓域であった可能性が高い。さらに、今回の調査で出土した埴輪等の存在から古墳時代後期においても墓域であった可能性がある。

また、弥生時代後期の遺物も確認できることから、この時期の遺構が周辺に存在していた可能性が高い。

このように、久宝寺寺内町の下には、寺内町形成以前の遺物や遺構が確認できることから、それ以前の様相が想定できる反面、その後の寺内町形成によって、それらが削平・整地された可能性がある。その範囲内こそがすなわち久宝寺寺内町の範囲と考えられ、その変遷については今後の調査の進展を待ちたい。
(藤井)

[参考文献]

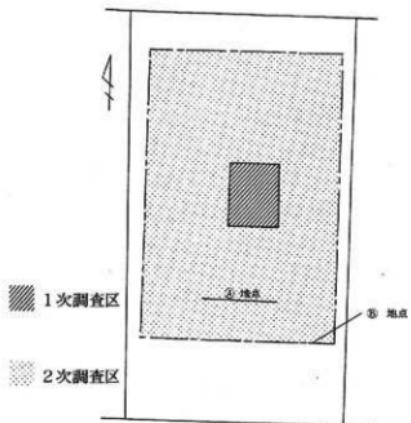
- 八尾市教育委員会 1988『寺内町の基本計画に関する研究－久宝寺寺内と八尾市内を中心として－』
(財)八尾市文化財調査研究会 1988「久宝寺遺跡(第2次調査)」
『八尾市文化財調査研究会年報昭和62年度』
1989「久宝寺遺跡(第3次調査)」
『八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度』
1997「久宝寺遺跡(第17次調査)」
『八尾市文化財調査研究会報告55』

5-2. 久宝寺遺跡 (97-720)

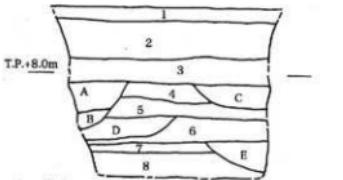
1. 調査地 久宝寺5丁目132
2. 調査期間 平成10年5月14日、18・19日
3. 調査方法 専用住宅の建て替えに伴い、計画地の中央に2.5 m × 2 mの調査区を設定し、地表下1.4 mまで掘削を行い、遺構の検出に努めた。(1次調査) その結果、13世紀後葉から15世紀にかけての遺構面を検出した。このため、原因者と協議を行い、13世紀頃とみられる最終面の掘削を行わないことを確認した上で、工事掘削時の土層観察を中心とした2次調査を行うこととした。なお、調査地は寺内町の一画を形成しているが、本市教委はこれを認識しておらず、現在の遺跡地図では久宝寺遺跡となっている。このため今回はこの標記に従い、久宝寺遺跡とした。
4. 調査概要 ここでは1次調査の成果を主として記述する。1次調査では出土遺物から13世紀後葉から15世紀に比定できる三時期の遺構面を検出し、検出した順に上から第1遺構面から第3遺構面とした。なお、遺構の概要のなかで、遺物について記述のないものは出土していない遺構である。
- 第1遺構面・ 地表下0.6 m前後にある黄褐色極粗粒砂混シルトをベース層として、土坑1基、溝3条、埋甕1基、小穴6基を検出した。
- 土坑 土坑1(SK1-1) 調査区の南西隅で検出した。大半が調査区外にのびるが、東西辺0.75 m、南北辺0.38 m、深さ0.18 mを測る、梢円形あるいは隅丸方形と推測される遺構である。埋土は炭化物を含む淡灰茶色粗粒砂混粘質シルトで、土師器小皿(1)や須恵器の鉢(2)、瓦器細片、瓦質壺細片、丸瓦及び平瓦片が出土している。
- 溝(SD1-1～3) 溝1(SK1-1) 調査区の西側で東肩のみ確認した。検出長約2.15 m、幅約0.42



第43図 調査地周辺図 (1/5000)



第44図 調査位置図 (1/200)



第45図 南壁土層断面図 (1/40)

m以上、深さ0.28m以上である。埋土は灰色粗粒砂混粘質シルトで、土師器皿(3)、瓦質羽釜(4)が出土している。S P 1-1を切っている。

溝2(SD1-2) 調査区東側で検出した南—北にのびる溝で、ここでは西肩のみを確認した。検出長約2.55m、幅約0.73m、深さ約0.38mを測る。埋土は2層に分けられ上層は明褐色粗粒砂混シルト、下層は炭化物を含む灰色細粒砂混粘質シルトである。S P 1-6を切っている。

溝3(SD1-3) 調査区北側で検出した。調査区外にのびる南—北方向の溝である。検出長約0.8m、幅約0.4m、深さ約0.15mを測る。埋土は暗茶灰色粗粒砂混シルト。

埋壺(SX1-1) S K 1-1とSD1-1にはさまれる位置で検出した。壺(5)底部が残存していたのみで明確な掘方を確認することはできなかったが、土器の周囲の土は暗茶褐色を呈していた。埋められていた瓦質の壺(5)は球形の底部で、外面をヘラケゼリの後に上部をタタキ、内面はハケを施している。当初からかどうか不明だが、検出時は底が抜けしており、貯蔵用ではなかったものと推定される。

小穴(SP1-1～6) 小穴1(SP1-1) SD1-1にさまれている円形を呈する小穴である。径約0.38m、深さ0.16mを測る。埋土は暗黃灰色細粒砂混粘質シルト。

小穴2(SP1-2) 円形を呈し、径約0.2m、深さ約0.16mを測る。埋土は灰色細粒砂混粘質シルトで、土師器片が出土している。

小穴3(SP1-3) 長径約0.52m、短径約0.37m、深さ約0.26mを測り、梢円形を呈する。埋土は茶灰色細粒砂混粘質シルトで、土師器皿細片、捏鉢片、平瓦片が出土している。

小穴4(SP1-4) 径約0.28m、深さ約0.2mを測る円形の小穴である。埋土は炭混じりの灰茶色細粒砂混粘質シルトで土師器皿細片、捏鉢片が出土した。

小穴5(SP1-5) 円形を呈し、径約0.33m、深さ約0.19を測る。炭混じりの灰色細粒砂混粘質シルトを埋土とし、瓦器片、鉢片が出土した。

小穴6(SP1-6) 楕円形を呈するとみられるが、SD1-2とSP1-5に切られしており、全容は不明である。長径は検出長0.23m、短径約0.31m、深さ0.2mを測る。埋土は炭を含む灰黄色細粒砂混粘質シルトで、平瓦片が出土した。

第2遺構面・・地表下0.9m前後の灰黄色細粒砂混シルトをベース面とする調査区の東半分を占める南北方向の溝を検出した。

南北方向の溝
溝2(SD2-1) 検出幅約0.8m、深さ約0.2mを測り、灰黄色粗粒砂混シルトを埋土とする。土器皿(6・7)瓦器細片、瓦質羽釜(8・9)、瓦質甌、平瓦(離れ砂痕)、道具瓦、丸瓦、粘土の小塊などが出土している。このSD2-1は2次調査で調査地全体半分を北から南東にのびる大きなものであることがわかった。この時に出土した遺物が瓦質甌(16)、土器皿(17~20)である。

第3遺構面・・地表下1.1m前後の褐色細粒砂混粘質シルトをベース面として、土坑2基、溝2条、小穴5基を検出した。

土坑(SK3-1.2)
土坑1(SK3-1) 調査区北側中央で検出したが、大半が調査区外にあるため全容は不明である。深さ0.15m以上で、埋土は灰色細粒砂混粘土シルトである。

土坑2(SK3-2) SD3-1及びSP3-1、3-3に切られている方形あるいは長方形を呈するとみられる土坑である。南北辺0.65m、東西辺0.35m以上で、深さ0.1mを測り、埋土は黄灰色細粒砂混粘質シルトである。

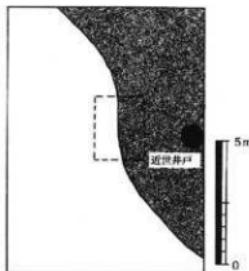
溝(SD3-1.2)
溝1(SD3-1) 調査区西南隅で東肩の一部を検出した。検出長約1m、幅0.6m以上、深さ0.25m以上である。暗灰色細粒砂混粘質シルトを埋土とし、瓦器甌(10~13)、土器皿片、瓦質甌片とともに獸骨が出土している。

溝2(SD3-2) 調査区西北側で東肩の一部を検出した。検出長約1m、幅0.22m以上、深さ0.2m以上である。灰色細粒砂混粘質シルトを埋土とし、羽釜片や丸瓦片、2次焼成を受けた平瓦片が出土している。埋土および位置からみてSD3-1と同じ遺構の可能性がある。

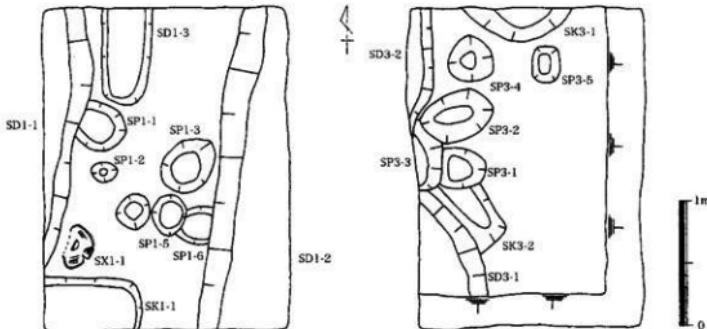
小穴(SP3-1~5)
小穴1(SP3-1) SK3-2とSP3-3に切られている。楕円形を呈し、長径0.36m以上、短径0.34m、深さ0.15mである。埋土は黄灰色細粒砂混粘質シルトに灰色細粒砂混粘土シルトが混じっており、底部には焼成を受けた石がみられた。三巴紋軒丸瓦(14)や凹面に2次焼成を受けた平瓦が出土している。

小穴2(SP3-2) 長径約0.6m、短径約0.48mの楕円形を呈し、深さ約0.32mを測る。埋土は茶黃灰色細粒砂混粘質シルトで、凸面に繩目タタキをもつ平瓦と丸瓦、須恵器甌片、羽釜片等が出土している

小穴3(SP3-3) SP3-2及びSD3-2にきられ、大半が調査区外にのびるために、形状は不明である。深さ0.1m以上で、埋土は暗灰色細粒砂混粘質シルトで、遺物は下部あるいは他所からの混入と考えられる須恵器杯身(15)が出土している。



第46図 SD 2-1 平面略測図 (1/200)



第1遺構面

第47図 遺構平面図 (1 / 40)

小穴4(SP3-4) S K 3-1 と S P 3-2 の間に位置している。円形を呈し、径約0.38 m、深さ約0.12 mを測り、埋土は茶灰色細粒砂混粘質シルトである。

小穴5(SP3-5) S K 3-1 の南側に位置する。梢円形を呈し、長径約0.3 m、短径約0.2 m、深さ約0.1 mを測る。埋土は黄褐色細粒砂混粘質シルトである。

5.2次調査について

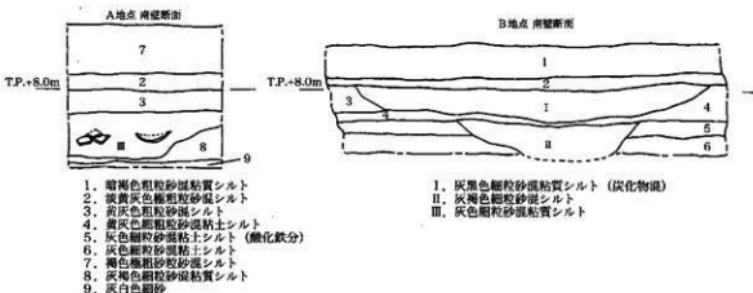
土坑状遺構

18世紀以降の井戸

2次調査は工事掘削時に立ち会ったもので、土層観察を行うにとどまった。しかし前述したように1次調査第2面遺構面検出の南北方向の溝(SD2-1)が大きく東に広がることを確認し、瓦質甌(16)、土師皿(17~20)などが出土した。

A地点の南壁東端付近では地表下0.7 m前後で、灰色粘質細粒砂混シルトを埋土とする土坑状遺構を断面でみることができ、土師質羽釜(21)や擂鉢、薬を含んだ粘土塊などが出土した。

B地点では陶磁器を含む層を切り込み、炭を含む灰黒色細粒砂混粘質シルトを埋土とする土坑が断面でみられた。また、事業計画地の東側中央では瓦質井戸側用材(22.23)を用いた井戸が一部確認された。これは掘り込み面が明らかではなく、また建物の関係上掘削できず、遺物が出土していないため時期は明確ではない。



第48図 2次調査土層断面図 (1 / 40)

6.まとめ 寺内町は中世から現代まで人々の生活が連続して続いている。このため遺構の重複が著しく、切り合い関係は複雑である。このため今回のような小区画の調査による層序や遺構面の構築層については、今後の調査によって新たな事実が判明することもあり得る。そこで、ここでは遺物を取

り上げ、時期を中心としてまとめておきたい。

第3遺構面出土遺物で、最も古い時期に統するものはSP3-3出土の8世紀代の須恵器杯身(15)だが、これは下部あるいは他所からの混入とみられ、今後遺構が検出される可能性がある。(財)八尾市文化財調査研究会が実施した調査(第43図A地点)でも同時期の遺物が見つかっており、この時代に埋没したと推定される河川も検出されている。また、寺内町の外ではあるが、B地点では平安時代の水田が見つかっており、南北方向の河川の東側に畦畔が数条検出されている。次にSD3-1から出土した瓦器(10~13)だが、これらは高台が形骸化あるいは丸底化しており、尾上氏の編年のIV-2~3期に比定でき、近年の瓦器の年代観からすれば13世紀後葉から14世紀初頭の時期が当てられる。同遺構面からは小片のため図化できなかったが、土師器皿、須恵器甕、羽釜があり、また軒丸瓦(14)と2次焼成を受けた平瓦がSP3-2、SD3-2で出土していることはこの時期の建築物の存在を示すものとして興味深い。

第2遺構面のSD2-1では瓦質羽釜(8.9)、瓦質甕(16)、土師器皿(6.7.17~20)がある。瓦質羽釜は鍔が薄く、内傾する口縁の外面に段を有する。胴部外面はヘラケズリ、口縁内面はハケメを施しており、(8)の口縁端部はやや直立気味で面は平坦であり、(9)は凹面を作る。これらの特徴は森島氏の羽釜編年では概ね14世紀中葉~15世紀初頭と考えられる。また口縁端部が玉縁状を呈し、短い頸部と肩部が張る体部をもつ瓦質甕も同様の時期に比定できる。他の出土遺物では離れ砂を用いた瓦や粘土塊がある。粘土塊は、2次調査の土坑状遺構や包含層などからも出土しており、瓦下粘土に用いたことが推定される。

第1遺構面では土師器皿(1.3)、須恵質の鉢(2)、羽釜(4)、瓦質甕(5)がある。時期を特定できる遺物が少なく、また混在していることも考えられるが、それを考慮したうえでおおよその時期をみていく。鉢(2)は口縁部は直立して面を持ち、下方に肥厚している。内外面ともにナデで器面を整える。とくに口縁端部の肥厚は須恵質鉢の新しい形態であり、13世紀前半~後半とされている。羽釜(4)は内傾気味の口縁端部は平坦であり、口縁内面はナデ、胴部外面はヘラケズリなどは(8.9)と同様である。しかし、鍔は厚く、裏側には工具痕が残るなど調整もやや粗雑であることから、(8.9)には後出するものとしておきたい。また、瓦質甕(5)も底部のみであるが、タタキ目が粗く、底近くまで達しており平底化の指向が窺え、14世紀後葉頃と推定される。

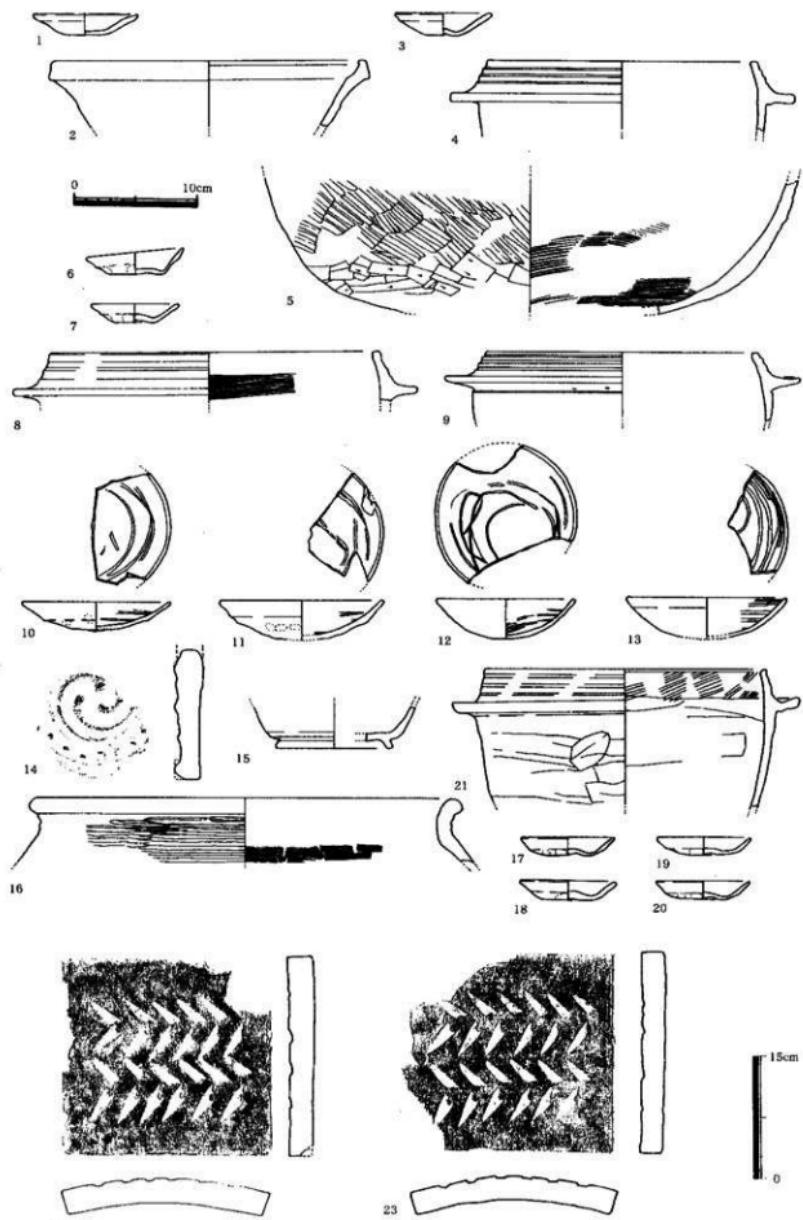
さらに、壁面の土坑から出土した土師質羽釜(16)は直立する口縁をもち15世紀中葉頃に比定できる。

以上から、本調査地では13世紀後葉~15世紀にかけての遺物が存在し、遺構がこの時期の人々の生活痕跡の一端を示すものであることがわかった。そこで次に寺内町と本調査との関連を考えてみたい。

7. 備考 今回調査した場所は正確には寺内町を囲む環濠の外に位置しており、「地下垣内」あるいは「出屋敷」と呼ばれている。ここは久宝寺寺内町のなかでも北西部の「城垣内」と並んで特別扱い(特拔)された地域であり、安井氏が所有していた場所とされている。

「地下」は庶民、または神主を指す言葉で、あるいは「凡下」ともいい、鎌倉時代以降から使用されている。「垣内」は村落あるいは屋敷を指す言葉である。こうしたことから、「地下垣内」は寺内町成立以前の久宝寺集落があった場所ではないかと推定されている。

しかし、近年、金井 年氏は寺内町の成立について、1. 無住の地に寺内町が忽然と作り上げられるケースと2. 当初は寺内町とは異なる集落が存在し、それを改変、あるいは廃絶する形で寺内町が成立するケースについて分け、後者について論じている。このなかで「從来、寺内町は「新立」という觀点からみられてきた」が、「原集落の「改変」という視点で捉え直すべきではないか。」と主張されている。そして、八尾の萱振を取上げ、式内社を中心とする原集落が、新しい精神的中心地である恵光寺の建立とともに旧の精神的支柱=神社を環濠外に置き、集落を形成したその例としてとされている。



第49図 出土遺物実測図 (1 / 4) (22,23のみ1/6)

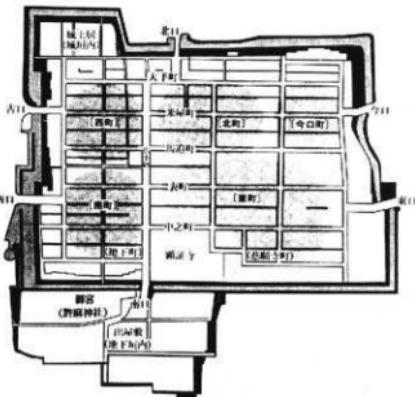
その一方で久宝寺寺内町は地下垣内（出屋敷）に式内社（許麻神社）があるが例外とされ、その根拠として寛政四年（1792）の『觀音院記録書』の「当村氏神正一位牛頭天皇勅請之年曆者天正拾年牛壬正月ニ・中略・京都より勅請 之於村方慈氏神と尊敬し奉る」の文書を挙げられ、当初神社は存在せず、天正十年（1582）に勅請され、これを中心として安井氏によって開発された場所であると考え、「出屋敷が寺内町に先行するものではない」と結論されている。

しかし、今回の調査結果はこれを覆す結果となった。すなわち、13世紀後葉から14世紀初頭にかけての遺物と共に伴う土坑やピット、溝など居住域であったことを示す遺構が検出されたのである。さらに14世紀～15世纪の遺物が出土していることは、久宝寺の中心となる西証寺（後の顯證寺）が建立されたとされる明応年間（1492～1501）以前に居住域として機能していたことを示すものである。第3面から軒丸瓦や2次焼成を受けた平瓦が含まれていたことは寺院などの存在を考えることができよう。

寺内町の古い絵図には α 元禄二年（1689）ものとされる高田家絵図と β 享保八年（1723）の木村家絵図があり、町割りのなかに屋号や所有者の他に検地の坪数などが記入されている。 α では西町、南町、米屋町、馬追町、表町、中之町は町割りが細かく、記載されている屋号から商家や富農が集まっている。東口町と今口町には安井一族と推定される大きな町割りの屋敷地が集まっている。そして、地下垣内にはその大きな屋敷地と同じ所有者の名前が記載されているが、ここには坪数が書かれていないが、町割りもやはり大きい。今回の調査地は東西に長い町割りが成されている。 β では地下垣内が南北方向に細かく割られ、現在の地割りと大きさは変わらないが、この部分と城垣内は所有者が記載されていない。

こうしたことから、安井氏の寺内町での勢力の衰退が見られるのではないか。この α と β の34年間には旧大和川の一つである長瀬川の付け替え（宝永元年（1704））という大きな出来事があり、これにより長瀬川から水を引いていた環濠の状況も β では α ほど詳しくはない。これはすなわち、船を利用しての水運業や環濠を利用しての商品の移動が出来なくなってきたことから、安井氏というより、久宝寺村の衰退が始まっているともいえるのである。これは安井氏の久宝寺からの撤退と関係があるのであるかも知れない。当然安井氏の撤退とともに地下垣内は新興の有力者に分割され、依然ほどは重要視されていない。

つまり、地下垣内は、安井一族の本来の居住地と推定されるのである。これが元々の久宝寺村といえるかどうかは分からぬ。しかし、それ故に安井氏が町の中に入った後でも寺内町の外に出屋敷という突出した不自然な形で残されたと推定できる。そうでなければ要塞ともいえる寺内町の外に有力者の屋敷地が存在することは考えることはできない。「地下」が神主を指す時、それはまさしく、許麻神社を勅請し、それを利用した安井氏を指す言葉として使用されていたものといえるのである。（清）



第50図 伝町名記載図（参考文献2より改変・加筆して転載）

参考文献

1. 金井一郎「寺内町の形成と原聚落」『寺内町研究』創刊号 貝塚寺内町歴史研究会 1995
2. 総合研究大綱「久宝寺の基本計画に関する研究」八尾市教育委員会 昭和63年
3. 内田一川男「久宝寺寺内町の町割りについて」八尾市記念第九号 八尾市教育委員会 昭和61年
4. 若狭一郎「河内 久宝寺寺内町」城と陣屋シリーズ157号 日本古城友の会 昭和59年
5. 金井一郎「史料編」八尾市役所 1960
6. (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度」1988
7. (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度」1989

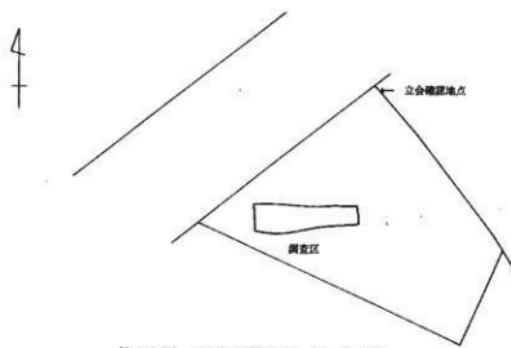
6-1. 郡川遺跡（97-696）の調査

1. 調査地 八尾市教興寺5丁目35番地
2. 調査期間 平成10年3月18日（調査担当 吉田野乃）、23日（調査担当 清斎）
3. 調査概要 施工予定地内の西側に幅1m、長さ4mの調査区を設定し、地表下2.0m後まで重機と人力を併用して掘削した。地表下1.0m前後の茶灰色小礫混粘砂A層上面で溝状遺構1条とピット2基を確認した。また茶灰色小礫混粘砂A層は、瓦器片、土師器片とともに埴輪片が含まれていた。さらに地表下1.2mにおいて淡茶灰色大礫混微砂層を切り込む茶灰色小礫混粘砂B層を確認した。この層には埴輪片、須恵器片が少量含まれていた。工事着工時の立会調査では、施工予定地の北側隅において、地表下0.86mの暗灰色小礫混粘砂層上面で土坑を検出した。検出最大径0.46m、深さ0.2mを測る。埋土は暗茶灰色粘砂層あり、畿内第V様式に位置付けられる甕が人為的に据えられたもの(12)を含め3点出土した。今回の調査区では地表下1.0m前後で鎌倉時代の遺構面を検出した。さらに地表下1.2m前後の茶灰色小礫混粘砂B層は、古墳の周濠となる可能性もある。埴輪片は川西編年V期に位置付けられる。調査地の南西40mの所には現存径約10mを測る円墳の可能性のある塚本塚古墳があり、本課による調査で5世紀後半に位置付けられる須恵器环身が出土している。当調査地の北西側を画する市道は調査地の南側で南西から北東方向へ曲っており、周辺の水田が長軸を南北に揃える地割であるのに対し、不規則なものとなり注意される。当調査地に古墳時代後期の古墳が存在した可能性がある。また立会調査で確認した弥生時代後期の土坑は、なんらかの祭祀に伴うものとなる可能性があり注意される。

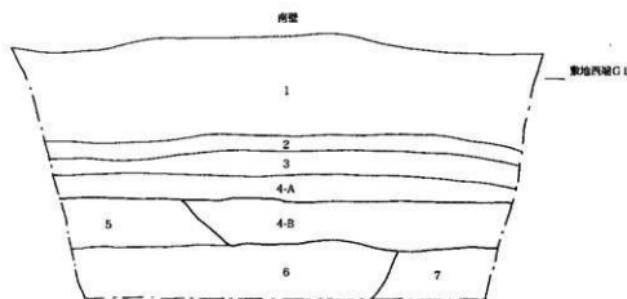
（吉田野乃）



第51図 調査地周辺図 (1/5000)



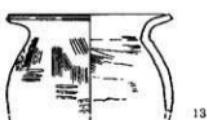
第52図 調査区設定図 (1/200)



第53図 調査区 平・断面図 (1/40)



第54図 立会調査区 平・断面図 (1/40)



第55図 出土遺物実測図（1/4）

番号	調査区	出上層	底 級	部 位	法 量 (cm)	模 型	色 調	触 感	測 定	
1	遺構確認 調査区	第1面 ベース層	上部粗 粒	口縁部 1/10	口径 9.8 残高 1.2	軟	褐色	真	底面：不定方向ナデ その他：不明	
2	遺構確認 調査区	暗灰色粘土	底部粗 粒	口縁部 1/5	口径 15.2 残高 2.5	極め て軟	灰色	真	口縁部外面：ロクロナデ 口縁部内面～内側：ナデか	
3	遺構確認 調査区	第1面 ベース層	二重口縁 部	口縁部 小片	口径 不明 残高 7.0	非常に軟	淡褐色	糊	口縁部外面：一部ヨコハケ、横方向ナデ残 存。 口縁部内面：ナデか	
4	遺構確認 調査区	第1面 ベース層	円筒埴輪	タ万葉	口径 不明 残高 3.3	軟	淡乳白色	非常に糊	体部外面：タタハケ タガホ上端：横方向ナデ 体部内面：横方向ナデか	
5	遺構確認 調査区	第1面 ベース層	車輪	タガホ	口径 不明 残高 3.8	やや 硬	淡褐色	糊	体部外面：タタハケ タガホ上端：横方向ナデ 体部内面：ユビオサエ	
6	遺構確認 調査区	第1面 ベース層	円筒埴輪	タガホ	口径 不明 残高 5.8	軟	淡乳白色	糊	体部外面：タタハケ 体部内面：一部ユビオサエ、ナデか	
7	遺構確認 調査区	第1面 ベース層	円筒埴輪	不明	口径 不明 残高 5.3	軟	淡乳白色	糊	体部外面：ナデか 体部内面：一部ユビオサエ、ナデ	
8	遺構確認 調査区	第1面 ベース層	円筒埴輪	底部	口径 15.0 残高 7.6	軟	淡乳白色	糊	内外面：ナデか	
9	遺構確認 調査区	第1面 ベース層	断形埴輪 ？	品部	口径 不明 残高 6.1	軟	淡乳白色	糊	外面：粘土牽引つけのち横方向ナデ 粘土牽引上部一ナデか 粘土牽引下部一タタハケ 内面：ナデ	
10	遺構確認 調査区	2層	形象埴輪 ？	不明	口径 不明 残高 5.0	軟	淡乳白色	糊	外面：上端に隙割・一部残存の他は不明 内面：ユビオサエ、ナデ	
11	立会調査 区	ピット内	甕	口縁部 1/4	口径 14.5 残高 4.5	やや 軟	暗灰乳色	糊	口縁部外面：横方向ハケメ 底部外面：口縁部と体部の貼りつけに伴う ナデ 底部外面：タタキ 体部内面：横方向ハケメ 底部内面：板ナデ	
12	立会調査 区	ピット内	甕	全体十段 甕	底径 3.5 残高 9.7	軟	褐色	糊	体部外面：ナナメ方向ハケメ、一部縱方向 ～ラケズリ 底部外面：タタキ 体部内面：横方向ハケメ 底部内面：板ナデ	
13	立会調査 区	ピット内	甕	口縁部 1/4	口径 13.1 残高 8.0	軟	赤褐色	糊	口縁部外面：横方向ナデ 底部外面：縦方向ハケメ 底部外面：タタキ 体部内面：横方向ハケメ	外面にスス付 看

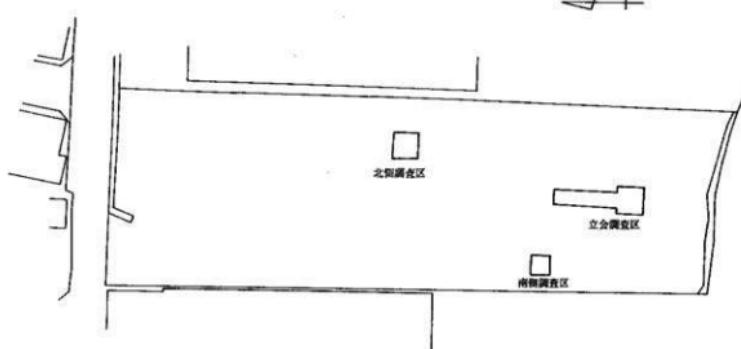
観察表

6-2. 郡川遺跡（97-706）の調査

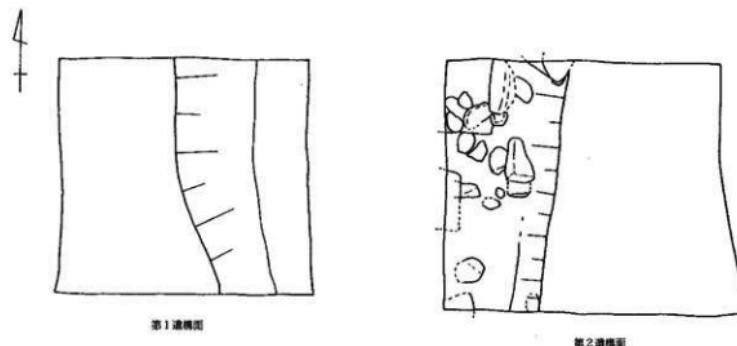
1. 調査地 八尾市郡川5丁目25、26
2. 調査期間 平成10年4月8日、10日、13日、16日
3. 調査方法 分譲住宅建設に伴う遺構確認調査であったが、施工地では既に下水管の埋設工事がなされており、管路の南端の9m分のみが埋められていない状況であった。このためこの部分の断面精査を行ったのちに、建物建設予定地の南と北に2~2.5m前後の調査区を設定し、重機と人力を併用して遺構確認調査を行った。
4. 調査概要 管路部分は幅1.5m、長さ7.5m、南端の人孔部分は2.5m四方で深さ1.2mの掘削がなされていた。東壁の断面精査を行なったところ、遺構面を3面確認した。第1面は地表下0.44mで遺構の切り込み面は削平されているが、北端で自然流路もしくは溝となる遺構を確認した。第2面は地表下0.4~0.6mの暗灰茶色粘性砂質土A層（6-A層）上面であり、幅0.4~0.7m、深さ0.15~0.2mの遺構を3箇所と幅0.6m、深さ0.6mの土坑になるかとみられる遺構を確認した。第3面は地表下0.6~0.7mの淡暗灰茶色粘性砂質土層（7-A層）上面で、幅0.6m、深さ0.15m前後の遺構を4箇所確認した。第2面と第3面の遺構と包含層を中心に6世紀後半から7世紀初頭に位置付けられる遺物が出土した。
(南側調査区) 2面の遺構面を確認した。地表下0.9m~1.0m前後、耕作土直下の茶灰色砂質土層（5層）上面で南北方向の溝状の遺構を検出した。西肩のみを検出したが、埋土のありかたから溝になるとみられる。検出最大幅1.25m、深さ0.79mを計る。埋土は暗灰色小礫混粘砂で3層（4-A~4-C層）に分かれ、下層にいくに従い砂を多く含む。



第56図 調査区周辺図 (1/5000)



第57図 調査区設定図 (1/500)



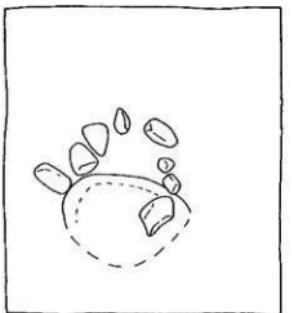
第58図 南側調査区 平・断面図 (1/40)

北側調査区

1. 黄褐色砂層 (表土)
2. 暗灰色粘性砂質土層 (旧耕土層)
3. 暗褐色粘性砂質土層 (灰土か)
- 4-A. 暗褐色粘性砂質土層 (Fe少)
- 5-B. 暗褐色粘性砂質土層 (砂粗)
- 5-C. 暗褐色粘性砂層 (砂細、灰味大)
6. 暗黃褐色粘性砂質土層 (中礫混)
7. 暗黃褐色粘性砂質土層 (漿繩面構成層)

立会調査区

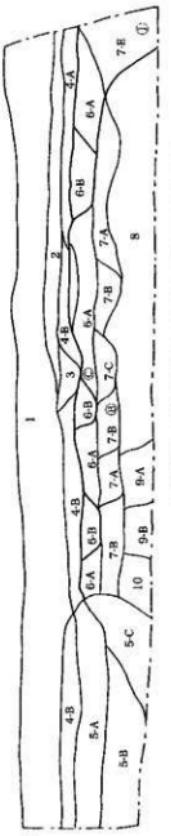
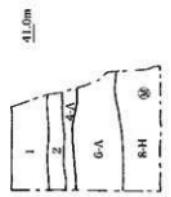
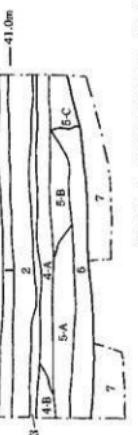
1. 黄灰褐色砂層+灰色粘性砂層 (盛土、耕作土プロック状堆積層)
2. 灰色粘性砂層 (耕作土)
3. 灰色粘性砂質土層
- 4-A. 暗褐色粘性砂質土層 (土塊小片多含む、炭少量含Fe)
- 4-B. 暗褐色粘性砂質土層 (砂細)
- 5-A. 暗灰茶色小礫混粘性砂質土層 (土師陶片含Fe)
- 5-B. 暗灰茶色小礫混粘性砂質土層 (褐黃白色粗砂ブロック混、Fe多)
- 5-C. 暗灰茶色小礫混粘性砂質土層 + 褐黃白色粗砂
- 6-A. 暗灰茶色粘性砂質土層 (粗砂混)
- 6-B. 暗灰茶色粘性砂質土層 (粗砂混)
- 7-A. 淡暗灰茶色粘性砂質土層 (中疊混、色調淡)
- 7-B. 淡暗灰茶色粘性砂質土層 (色調暗)
- 7-C. 淡暗灰茶色粘性砂質土層 (粘性大、色調暗)
8. 淡暗茶色中疊混粘性砂質土層
- 9-A. 暗茶色粘性砂層
- 9-B. 暗茶色粘性砂層 (鉛多)
10. 暗灰青色粘性砂層



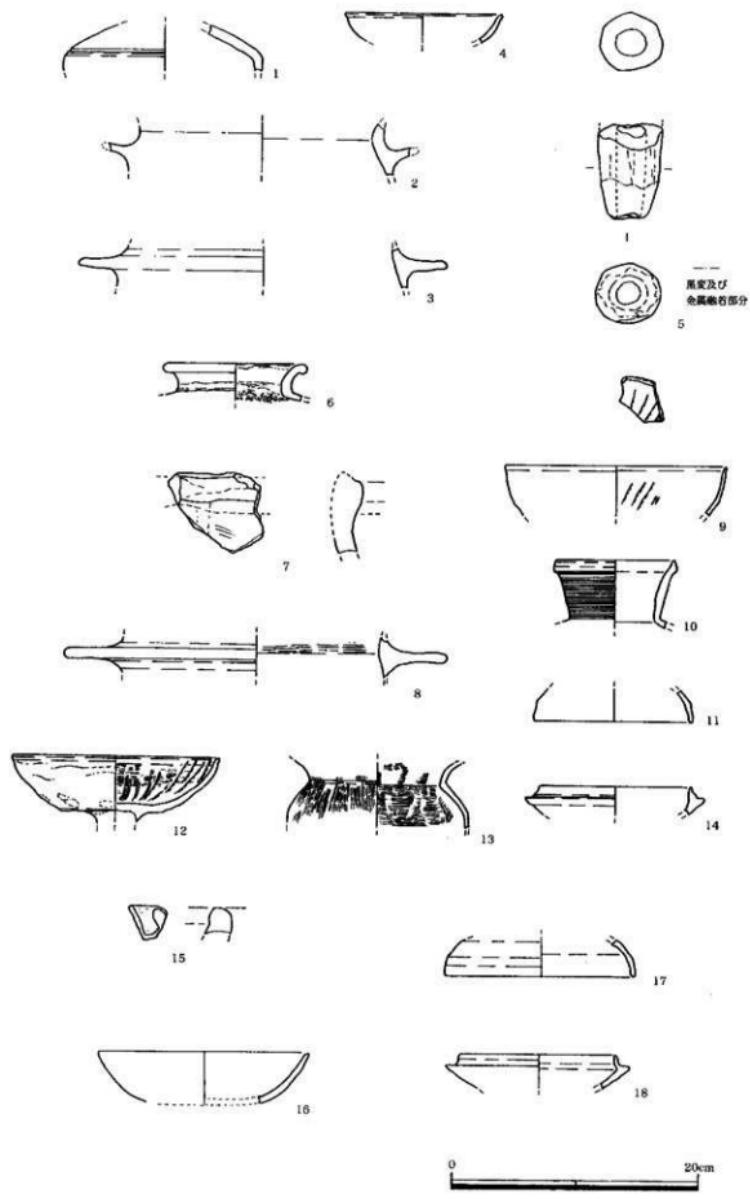
↓

49

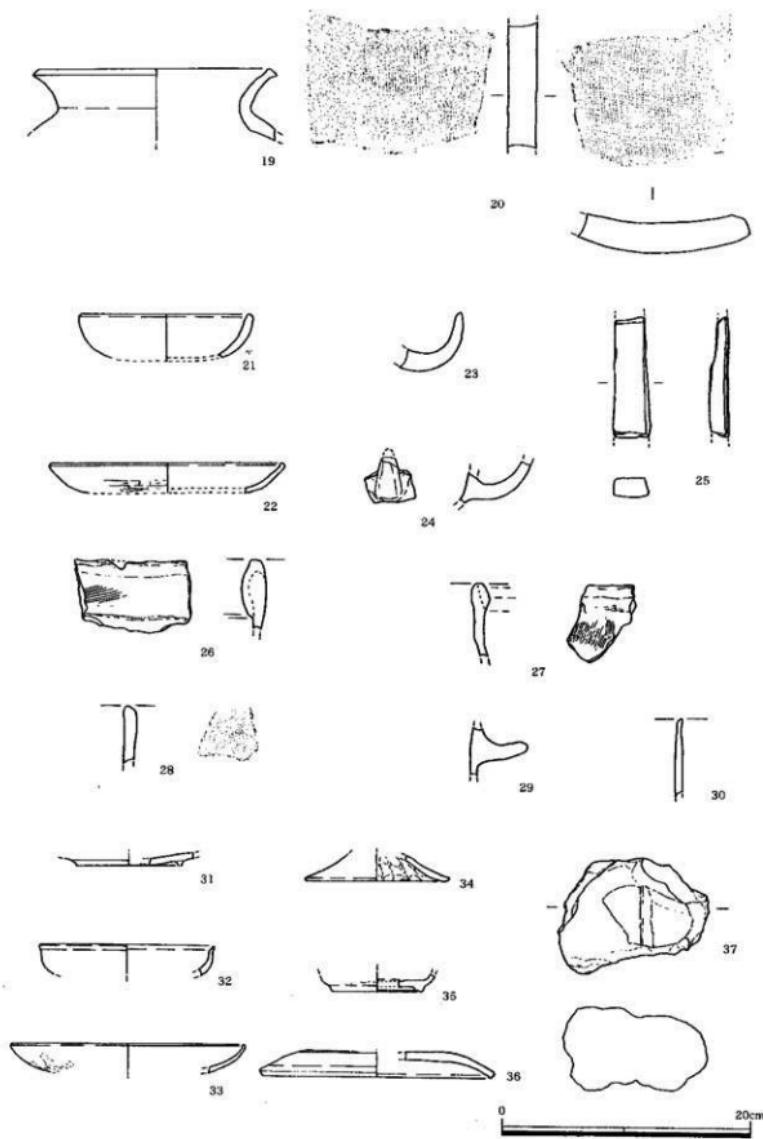
第59図 北側調査区 平・断面図 (1/40)



第60図 立会調査区 東側土層断面図 (1/40)



第61図 出土遺物実測図 (1 / 4) (1~5 立会調査区 6~18 用側調査区)



第62図 出土遺物実測図 (1/4)

(19~25 南側調査区 26~30 北側調査区 31~36 庭園区)

溝埋土からは6世紀中葉から7世紀第3四半期頃の土師器片、須恵器片が密に含まれていた。溝底面の黄灰色砂質土直上で7世紀第3四半期頃に位置付けられる土師器高杯が出土している。第1面構成層である5層とこの下の暗灰茶色粘性砂質土層(6層)からは6世紀中葉から7世紀第3四半期に位置付けられる土師器片、須恵器片がやや密に出土している。この下の地表下1.2mの淡暗灰茶色粘性砂質土(7層)上面で人為的に置かれた礫石群を確認した。第2面になる。これらは長径0.1m~0.5m程の花崗岩とみられる自然石で、一部割り石とみられるものがある。さらに調査区北西角にかかる状態で、方形に組まれたかとみられる石組み状の遺構を確認した。石組み内は深さ0.34mを計る。石組み内及び礫石群付近から6世紀中葉から7世紀第3四半期頃に位置付けられる土師器片、須恵器片が多く出土した。また石組みを構成する石の直上から鉄釘とみられる鉄製品(図版19)が1点出土した。さらに石組み内より馬齒片が、石組み直上の6層中から凝灰岩製の石棺材とみられる石材(37)が1点出土した。

(北側調査区)

地表下0.7m~0.8mの黄褐色粘性砂質土(7層)上面で梢円形を呈する土坑を検出した。これは長径1.0m、短径0.74m、深さ0.34mを計る。埋土は灰色粘性砂質土層である。ここからは6世紀後半から7世紀初頭に位置付けられる土師器片が少量出土した。またこの土坑内及びその東側近縁には、径0.1m~0.35mの自然石がみられた。

5. 出土遺物

1~5は立会調査区で出土した遺物である。5は8層から出土した繩羽口片で先端部分が熱で黒変し、金属の融着がみられる。周辺山麓の胎土である。他は6世紀末から7世紀前半とみられる土師器片、須恵器片である。6~14は南側調査区の溝状遺構埋土から出土した土師器片、須恵器片であり、TK43型式期に位置付けられる須恵器の坏(11、14)等を含むが、7世紀前半を中心とする遺物である。19は南側調査区の第1遺構面構成層である5層から出土した須恵器の甕片、20は5層直上から出土した平瓦で奈良時代以降のものとみられる。21~24は南側調査区の5~6層を中心に出土した土師器片である。22は9世紀前半とみられる土師器皿で5層直上出土の可能性がある。25は6層から出土した砥石状の土師製品である。4面に長軸方向の擦痕があるが、性格は不明である。26~30は北側調査区出土の土師器片である。ここからは土坑埋土を中心に甕片(26、27)、瓶片(28)、羽釜片(29)が出土しており、遺構の性格が注意される。6世紀末から7世紀前半に位置付けられる。31~36は工事廃土出土遺物である。立会調査区北側延長部分の管路掘削中に出土した。32は6世紀後半でかとみられる土師器坏、34は7世紀前半でかとみられる高坏脚部、31~33の土師器及び35、36の須恵器は9世紀代とみられる。

6.まとめ

立会調査区の第2遺構面(TP+40.6m前後)と南側調査区の第1遺構面(TP+40.0m)が同一面となる可能性が高い。また、立会調査区の第3遺構面(TP+40.4m)と南側調査区の第2遺構面(TP+39.7m)が同一遺構面である可能性が高い。北側調査区で確認した遺構面(TP+40.4m)は遺構面構成層は異なるが、遺構面のレベルから判断すれば、立会調査区の第3遺構面と南側調査区の第2遺構面につながるものとみられる。立会調査区と北側調査区で確認した遺構

面は6世紀後半から7世紀初頭に位置付けられる遺物が出土している。南側調査区で確認した遺構面は6世紀中葉に遡る遺物を含むものの7世紀前半に位置付けられる遺物が中心となるが、第1遺構面の溝底面出土の土師器高杯（12）や、第2遺構面の石組み遺構内へ直上出土の須恵器高杯Bの細片等、一部7世紀の第三四半期に下るかとみられる遺物が出土している。また南側調査区では遺構内、包含層とも6世紀中葉に位置付けられる須恵器片が多く出土し、石組み状遺構直上の6層からは石棺材かとみられる擬灰岩片や鉄釘片が出土した。以上から、6世紀代の古墳を削平したのちに、7世紀前半から同第三四半期を下限とする時期の間に石組み状の遺構が構築されたものとみられる。この石組み状遺構については直上の6層から出土した砥石状土師製品、立会調査区8層出土の蘿羽口片から、鍛冶関係の遺構の可能性がある。郡川遺跡では1988年度の本課による調査で今回調査地と同期の鍛冶関係の遺構や古墳の存在を示唆する遺構・遺物が確認されている。郡川遺跡の広い範囲で7世紀前半から同第三四半期に至る鍛冶を行う集落の存在を示唆するものである。また南側調査区の5層直上で出土した平瓦片や、廃土等で出土した9世紀代の遺物は平安時代の遺構の存在を示唆するものである。また当調査地の東隣で弥生時代後期の遺構が確認されている。今回の調査で古墳時代から平安時代の遺構・遺物を確認し、複合遺跡としての郡川遺跡の様相の一端が明らかになった。

なお、石棺材片（37）の石材及び蘿羽口片（5）の胎土等について、八尾市立曙川小学校教諭奥田尚氏より御教示を賜った。記して謝意を表します。

（吉田野乃）

番号	調査区	出土層	器種	埋蔵状況	法寸（cm）	焼成	色調	胎土	調査	
1	菅原部分	B地点	須恵器 高杯	肩部切 り落とす 1/8	縦幅19.8 横幅3.8	硬	灰褐色	やや粗	外表面：ロクロナダ	背面外腹自然 剥離
2	菅原部分	I地点	土師器 高杯	直縁 1/8	口径下径26.0 横幅4.3	やや粗	暗茶褐色	非常に粗	外表面：横方向ナダ	
3	菅原部分	M地点	土師器 高杯	直縁 1/8	口径下径23.4 横幅3.9	硬	暗茶褐色	非常に粗	外表面：横方向ナダ 口縁内面：横ハケ 底面内面：ヘラクズリ	
4	菅原部分	C地点	土師器 高杯	1/10	口径2.6 横幅2.4	やや粗	暗茶褐色	やや良	外表面：ヘラクズリ 内面：口縁外面：横方向ナダ	
5	菅原部分	M地点	土師器 蘿羽口 片のみ 生存	先端部 破損	最大径5.3 横幅7.6	硬	灰乳白色	非常に粗	外表面：板ナダ、タキ?	先端部熱に上 り剥落、溶融 金属付着。
6	南側査区	3層～遺壙上 4～八層	須恵器 高杯	大	口径11.0 横幅3.0	硬	暗茶青色	良	口縁部内外面：ロクロナダ 底面内面：同心円文とて具痕残存	
7	南側査区	3層～遺壙上 4～八層	土師器 瓶（口縁）	小片	口径不明 横幅6.1	硬	暗茶灰色	非常に粗	外表面：ココハケ後ココヘナメ方向ナダ 内面：ナメハケ	
8	南側査区	滑理土 4～八層	土師器 高杯	大	口径下径22.0 横幅3.4	硬	灰褐色	非常に粗	下面：ココハケ後横方向ナダ 内面：横方向ナダ 口縁内面：横ナダ 底面内面：板ナダ	横断下層：ス タッフ差
9	南側査区	滑理土 4～八層	土師器 杯	小片	口径17.8 横幅4.0	硬	灰褐色	良	外表面：横方向ナダ 内面：横方向ナダ、放射状略文	積造された胎 土

観察表

番号	調査区	出土場	器種	部数	寸 厘 (cm)	形状	色 痕	動土	測量	備考
10	南洞爺区	西岸土 4-8月～4-C 層	圓盤器 蓋?	1/4	口径: 9.5 底高: 5.5	破	褐暗灰色	板	口端部外表面: ロクロナダ 側面外表面: カキメ 底部内面: ナメ万瓦ナダ	
11	南洞爺区	海岸上 4-C 層	圓盤器 蓋?	1/10	口径: 12.8 底高: 2.6	破	褐暗灰色	中中破	内外面: ロクロナダ	
12	南洞爺区	海岸上 4-C 層 古墳上	十輪器 高环	1/2	口径: 15.5 底高: 5.4	破	褐暗褐色	非常に壊	口端部外表面: 梶方内ナダ 側面外表面: ユビコウヌのち不運力内ナダ 内面: ヨコハケのち横方向ナダ 底端外表面: テタハケ 体側内面: ヨコハケ	内野結合構造 壁に残存
13	南洞爺区 海岸上	海理土 4-C 層	上部器 蓋?	1/4	口径: 11.0 底高: 5.4	破	褐暗灰色	やや粗	口端部外表面: 植方向ナダ 側面内面: ヨコカケのち横方向ナダ 体側外表面: テタハケ 体側内面: ヨコハケ	内底全面スズ 付着。外側厚 黒化し。
14	南洞爺区	海理土 4-C 層	圓盤器 蓋?	1/6	口径: 12.8 底高: 2.8	破	褐暗青色	やや良	内外面: 不定ナダ	
15	南洞爺区	海岸上 土器 堆?	小片		口径: 不明 底高: 2.8	破	褐暗灰色	非常に壊	内面: 不定ナダ 内面: ヨコヒオサエ	
16	南洞爺区	石組み台上	上部器 蓋?	1/10	口径: 17.0 底高: 4.1	非常 に破	褐乳白色	やや良	外表面により調整不規	内底全面に2 点的に炭素有 る
17	南洞爺区	石組み内 圓盤器 蓋?	1/10	口径: 15.0 底高: 5.0	中中 破	褐暗灰色	やや粗	外表面天端部: ロクロヘラケズリ 外表面下方: 内面: ロクロナダ		
18	南洞爺区	石組み内 圓盤器 蓋?	1/8	口径: 12.5 底高: 2.8	破	褐暗青色	良	内外面: ロクロナダ		
19	南洞爺区	5層	圓盤器 蓋?	1/4	口径: 12.5 底高: 5.9	破	褐暗灰色	やや良	内外面: ロクロナダ	体側外側直角 側面付着
20	南洞爺区	5層以上	下瓦		底高各: 11.2 底高: 3.0	やや破	褐暗灰色	板	背面～側面: 布目模 (6七八) 凸面: 鋼リタキ (4本/枚)	一枚作りか
21	南洞爺区	5～6層	土器器 蓋?	1/8	口径: 13.6 底高: 3.5	破	褐乳白色	良	口端部内側～延長内面: 植方向ナダ 体側外面: 脱落こじり柄	
22	南洞爺区	5層以上か	土器器 蓋?	1/8	口径: 18.6 底高: 2.4	普通	褐暗褐色	やや粗	口端部内側～延長内面: 植方向ナダ 体側外面: ヘラケズリ	
23	南洞爺区	5～6層	上部器 蓋?				褐暗色	やや良	外表面: 不定方向ナダ	
24	南洞爺区	5～6層	把手斧 等			破	褐暗色	やや良	把手部: 植輪に白うナダ 内面: ラテ?	
25	南洞爺区	6層	鐵石状上 部製品		残存各: 9.5 底高各: 2.8 底高: 1.3	褐乳白色				東方向に埋 植修理に残る
26	北洞爺区	上坑壁土	上部器 蓋?	小片	口径: 小切 底高: 5.7	破	英灰褐色	非常に壊	内外面: ヨコハケのち横方向ナダ	
27	北洞爺区	土器器 蓋?	小片		口径: 不明 底高: 6.0	普通	褐暗色	非常に壊	口端部外表面: 植方向ナダ 体側外面: テタハケ 体側内面: ナメ方角ナダ	
28	北洞爺区	土坑壁上	十輪器 蓋?	小片	口径: 不明 底高: 4.5	破	褐暗褐色	非常に壊	外表面: ヨコハケ 口端部内面: 植方向ナダ	
29	北洞爺区	土坑壁 有蓋	小片		口径: 不明 底高: 3.8	破	褐暗褐色	非常に壊	口端部外表面: ヨコハケ 体側外表面: ナメ方角ナダ	
30	北洞爺区	断面塗	上部器 蓋?	小片	口径: 不明 底高: 6.2	破	褐色	やや粗	口端部内側: 植方向ナダ 体側外表面: 不規	
31	T. 東岸上	上部器 高台付			底径: 8.4 底高: 1.0	破	褐色	良	裏面: ロクロケズリのちロクロナダ 高台・外側内面: ロクロナダ 高台上部: 不明	
32	工事場上	十輪器 等			口径: 14.0 底高: 2.4	やや 破	褐暗色	良	内外面: 植方向ナダ	
33	工事場土	土器器 蓋?			口径: 18.8 底高: 2.3	やや 破	褐色～褐 乳白色	普通	口端部内側～延長内面: 植方向ナダ 体側外面: ヨコヒオサエ、 ヘラケズリ	
34	工事場土	土器器 高环			底径: 19.8 底高: 2.2	やや 破	褐色	普通	外表面: 脱落により不明 内面: ヨコヒオサエ、 ナダ 脚端部: ナダ	
35	工事場上	領土器 高台付			底径: 7.0 底高: 1.6	破	褐暗色	やや粗	底面: ロクロケズリのちロクロナダ 高台・外側内面: ロクロナダ	
36	工事場上	領土器 等			底径: 18.3 底高: 2.1	普通	褐暗色	普通	天井板: ロクロケズリ その他の: ロクロナダ 内面中央: ロクロナダのち仕上げナダ	
37	南洞爺区	6層	石堆材か		最大長: 9.0 最大巾: 1.5 最大厚: 1.8				複数個見出川壁塗装 (太子町塗谷等北付近)	

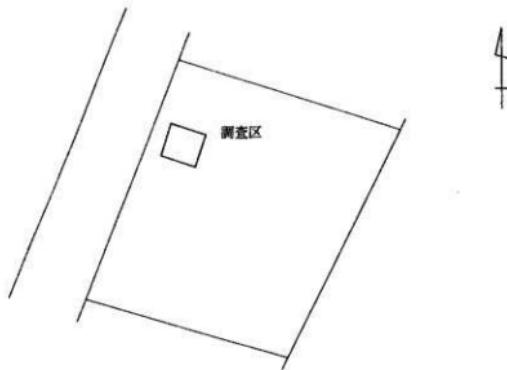
観察表

6-3. 郡川遺跡（98-400）の調査

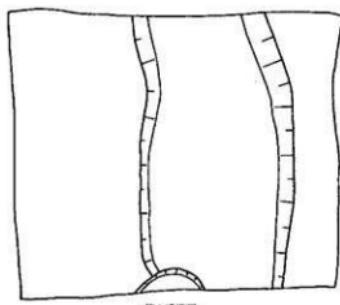
1. 調査地 八尾市郡川5丁目50
2. 調査期間 平成10年12月1日
3. 調査方法 施工予定地の西側、合併浄化槽設置予定部分に3m四方の調査区を設定し、地表下2.0m前後まで重機と人力を併用して確認した。
4. 調査概要 地表下0.64m～0.76mの西側へ傾斜する面で、溝1条とピット1基を検出した。溝は南北方向で最大幅1.24m、最大深0.16mを測る。ピットは調査区の南壁にかかる状態で検出した。最大径0.56m、最大深0.16mを測る。さらに地表下0.98m～1.12mの西側へ傾斜する褐色斑淡灰色粘砂層上面で溝状遺構を1条検出した。これは調査区の西壁にかかる状態で検出しており、東肩のみの検出である。検出最大幅1m、検出最大深0.16mを測る。第1面の直上の茶色斑灰色砂質土層及び第1面と第2面の間に堆積する明茶色斑灰色砂質土層、茶褐色粘砂層等及び第2面構成層の褐色斑淡灰色粘砂層とこの下の褐色斑暗灰色粘砂層には6世紀中葉に位置付けられる須恵器の环身をはじめとする、古墳時代後期の遺物が多く含まれていたが、いずれも瓦器の小片を含む。この包含層は地表下0.5m～1.56mの間にあり、層厚1mに及ぶ。したがって第1面、第2面とも鎌倉時代前後の遺構面とみられる。おそらくは、調査区の東側周辺に拡がる古墳時代後期の遺構面が当調査地にも及んでいたものとみられるが、鎌倉時代前後に削平されたものとみられる。調査地の西側は市道を隔てて一段低い地形となっており、当調査地の土層も西下がりである。山側である東側を削平し、整地して生活面を形成するという比較的大規模な地業が、当調査地付近で鎌倉時代前後に行われた可能性がある。（吉田野乃）



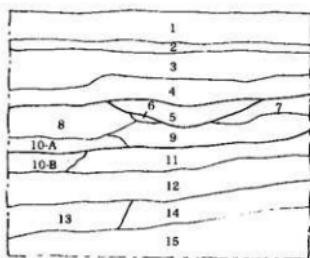
第63図 調査地周辺図 (1/5000)



第64図 調査区設定図 (1 /400)



第1透構面



1. 暗茶灰色砂質土層（表土）
2. 淡茶灰色砂質土層
3. 黄灰白色砂層
4. 茶色斑灰色砂質土層（炭混） 中世包含層
5. 暗茶灰色砂質土層（白色砂ブロック混、炭混、第1面溝埋土）
6. 黄灰白色微砂層（第1面溝埋土）
7. 明茶色斑灰色砂質土層
8. 茶色斑暗灰色砂質土層
9. 茶灰褐色粘砂層
- 10-A. 暗茶灰色砂質土層
- 10-B. 暗茶灰色砂質土層（粘性大、第2面溝埋土）
11. 暗茶灰色砂質土層（炭混）
12. 暗茶灰色砂質土層（炭混）
13. 暗灰色粘砂層（有機物混）
14. 灰色砂礫層（中礫混）
15. 灰白色砂層（中礫混）

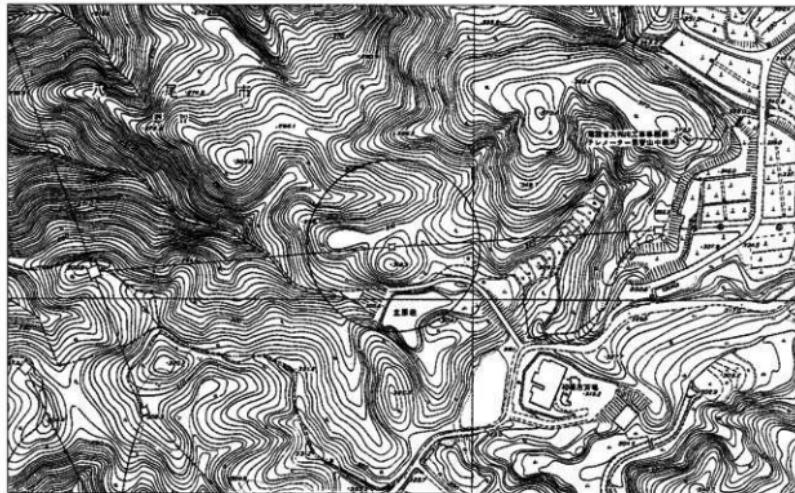
第65図 調査区 平・断面図 (1 /40)

7. 高安古墳群（98-141）の調査

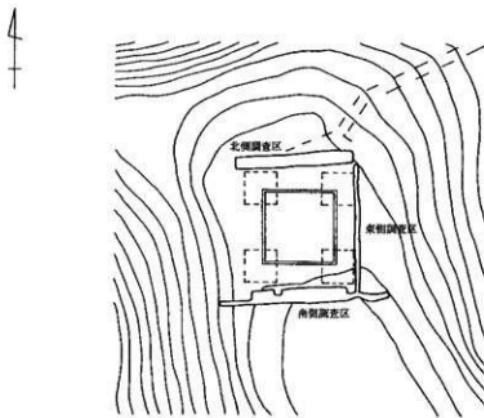
1. 調査地 八尾市大字恩智1734-2
2. 調査期間 平成10年11月9日～19日
3. 調査概要

鉄塔の建て替えに伴い遺構確認調査を行った。調査前に現状地形を確認したところ、調査地は南から北へ下る尾根上にあり、北側、西側、東側の三方が谷となっているが、東側の谷は約40m東側に尾根が迫っており、北側には調査地の所在する尾根とつながる渡り土手状の地形がみられた。このことから信貴山城に関する遺構等の存在が予想されたため、既存鉄塔の北側、東側、南側に幅1mの調査区を設定し、人力にて調査を行った。北側調査区では地表下0.3m～0.4mの地山直上で土坑、ピット4基を検出したが、遺物はまったく出土しなかった。南側調査区では調査区の中央付近の地表下0.5m～0.6mの地山直上で、土坑3基、ピット5基を検出し、S P 5から須恵器片1点が出土した。またSK 6の埋土直上では赤色の小塊及び土師器小片が若干量出土した。須恵器片は壺の頸部かとみられるものであるが、小片のため時期は不明である。またS P 6、S P 7、S P 9は芯々間2.2m～2.3mで円弧状に並び、注意される性格は不明である。遺構の埋土はS P 1～4、SK 1～4が地山起因とみられる土であり、SK 6は地山をブロック状に含む土である。東側調査区は、幅0.4mで土層確認のみを行い、北半分で人為的な削平とみられる地山の平坦面を確認した。本調査地では標高315m前後の山地の尾根上にも関わらず、ピット、土坑といった遺構を確認した。ただ、遺跡の時期は限定できず、性格は不明である。調査地近辺の地表の表面採集も試みたが、遺物は確認できなかった。が、周辺の人为的とみられる地形も含め、注意される。

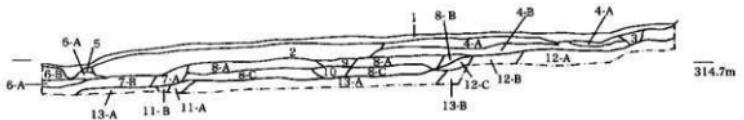
（吉田野乃）



第66図 調査地周辺図 (1/5000)

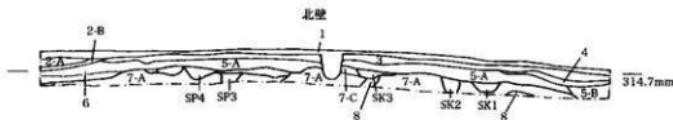


第67図 調査区設定図 (1 /400) (※コンターラインは0.5m間隔)



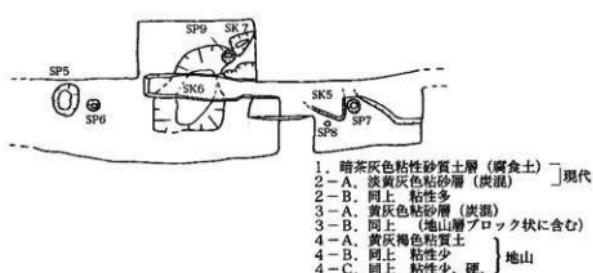
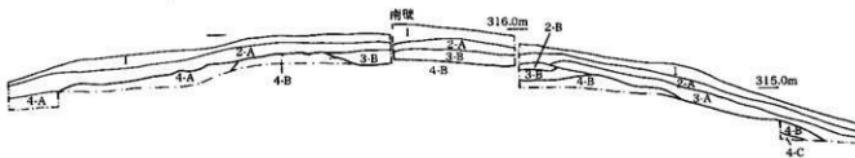
- | | |
|--------------------|---------------------------|
| 1. 暗茶灰色粘性砂質土層（腐食土） | 9. 明黄褐色粘砂層 |
| 2. 黄灰茶色砂混粘砂層 | 10. 明黄灰色粘砂層 |
| 3. 暗茶灰色粘砂層（腐食土混） | 11-A. 黄灰白色粘砂層 |
| 4-A. 黄灰茶色粘砂層 | 11-B. 同上 粘性多 |
| 4-B. 明黄灰茶色粘砂層 | 12-A. 黄灰褐色粘質土層 |
| 5. 茶灰色粘性砂質土層 | 12-B. 黄灰白色粘砂層（花崗岩片ブロック状混） |
| 6-A. 黄灰色粘質土層 | 12-C. 同上 砂多 |
| 6-B. 同上 色調淡 | 13-A. 極灰白色粘質土 |
| 7-A. 淡黄灰色粘砂層 | 13-B. 同上 花崗岩風化状 |
| 7-B. 同上 色調淡 | |
| 8-A. 黄灰色粘質土 | |
| 8-B. 同上 粘性多 | |
| 8-C. 同上 砂多 | |

第68図 東側トレンチ東壁土層断面図 (1 /80)



1. 暗茶灰色粘性砂質土層（腐食土）
 2-A. 明黄色微砂混粘砂層（南側調査区で土師器小片）
 2-B. 同上 腐食土混
 3. 淡黄色粘砂層（炭泥）
 4. 黄茶灰色微砂質粘砂層
 5-A. 黄茶灰色粘性砂質土層（炭泥）
 5-B. 同上 砂多 炭泥
 6. 淡褐色粘砂層
 7-A. 淡褐色微砂混粘土
 7-B. 同上 色調淡
 8. 黄褐色粘砂層（花崗岩ブロック状）
 SP 1. 黄褐色粘土ブロック混黄褐色粘性微砂層
 SP 2. 黄褐色粘土ブロック混微砂多層
- SP 3. 黄灰色粘質微砂層
 SP 4. 同上
 SP 5. 淡赤黄色粘質土層
 SP 6. 同上
 SP 7. 黄灰色粘土層
 SP 8. 茶褐色粘質土層
 SP 9. 黄灰褐色粘土層（炭泥）
 SK 1. 黄灰色粘性微砂
 SK 2. 同上
 SK 3. 黄褐色粘土ブロック混黄褐色粘性微砂
 SK 4. 同上
 SK 5. 黄灰褐色粘質土
 SK 6. 黄灰褐色砂ブロック混黄褐色粘砂

第69図 北側調査区 平・断面図 (1/80)



第70図 南側調査区 平・断面図 (1/80)

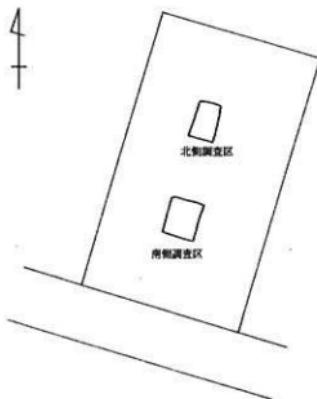
8. 東郷遺跡（97-536）の調査

1. 調査地 八尾市東本町3丁目77-3
2. 調査期間 平成10年2月4日、9日
3. 調査方法 施工予定地の北側に2m×3mの、南側に3m四方の調査区を設定し、地表下3m前後まで重機と人力を併用して調査した。
4. 調査概要 北側調査区では地表下1.4m～1.8mで土師器小片を含む土層を、地表下1.8～2.0mの土層で黒色土器片とみられる土器小片を確認した。さらに地表下2.0mの褐灰色砂質土層上面で淡茶褐灰色粘砂層を埋土とする土坑状の遺構を2基確認した。遺構1からは瓦器片小片、土師器皿片が出土した。遺構2からは土師器小片が出土した。遺構面構成層である褐灰色砂質土層直上からは羽釜片が、土層中からは土師器皿小片が出土した。南側調査区では地表下1.32m～1.44mの遺構埋土となる可能性のある土層で土師器小片を確認した。また地表下1.44mで茶灰色粗砂層を切り込む遺構埋土とみられる灰茶色粘砂層を確認し、黒色土器A類の破片が2点出土した（第73図）。また地表下1.7mの褐灰色粘性砂層上面で暗灰褐色砂混粘土層を埋土とする土坑状の遺構を確認し、埋土から土師器小片が出土した。北側調査区で確認した褐灰色砂質土層と南側調査区で確認した褐灰色粘性砂層が同一の遺構面の可能性がある。

今回の調査区では北側調査区で鎌倉時代の遺構面を確認した。また南側調査区で鎌倉時代の包含層への混入の可能性はあるが、黒色土器A類が出土し、平安時代中期の包含層の存在する可能性を確認できた。さらに平安時代から鎌倉時代に所属するとみられる遺構面を確認した。
(吉田野乃)



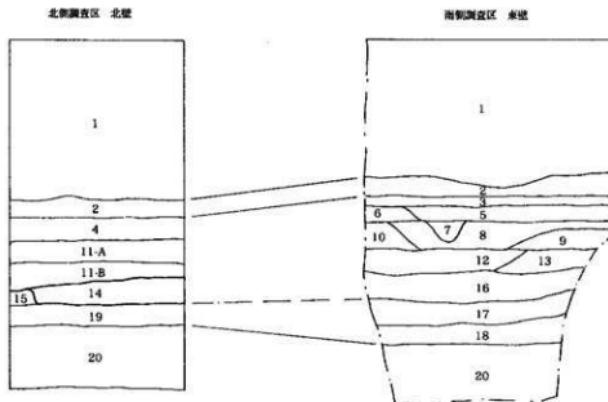
第71図 調査地周辺図 (1/5000)



第72図 調査区設定図 (1/400)



第73図 出土遺物実測図 (1/4)



- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 1. 盛土層 | 12. 暗灰褐色砂混粘土層（土師器小片含む） |
| 2. 暗灰色粘砂層（旧耕土層） | 13. 褐灰色粘性砂層 |
| 3. 緑灰色粘砂層 | 14. 淡茶灰褐色粘砂層（遺構1埋土、瓦器小片含む） |
| 4. 灰色粘砂層 | 15. 褐灰色砂質土（土師器片含む、遺構面構成層） |
| 5. 緑灰褐色粘砂層（土師器小片含む） | 16. 褐色粗砂層 |
| 6. 黄茶灰色粘砂層 | 17. 黄灰白色粘性砂層 |
| 7. 黄灰色炭混粘質土層 | 18. 灰青色砂層 |
| 8. 灰茶色粘砂層（黒色土器片含む） | 19. 灰褐色粗砂層 |
| 9. 褐色斑灰色粘砂層 | 20. 暗灰青色有機物混粘土層（暗灰色粘土ブロック状） |
| 10. 茶灰色粗砂層 | 21. 暗灰青色微砂質粘砂層 |
| 11-A. 灰色砂混粘砂A層 | |
| 11-B. 灰色砂混粘砂B層（粘性大、炭混） | |

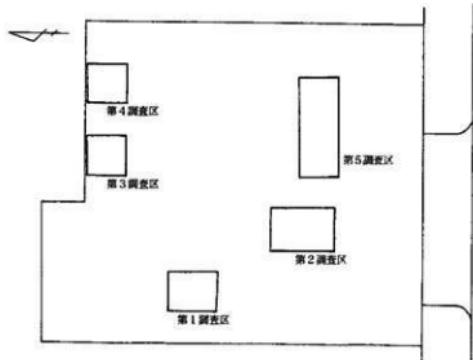
第74図 各調査区土層断面図 (1/40)

9. 中田遺跡（98-27）の調査

1. 調査地 八尾木北6丁目33,32
2. 調査期間 平成10年4月16日・4月27～30日
3. 調査方法 約3m×3mの調査区を設定し、一部3mまで掘削した。その結果、中世遺構面と布留式期遺構面、庄内式土器包蔵層等を確認した。そこで遺構保存のための協議を行ったが、設計変更は不可能との結論に達したため、2次調査として遺構破壊部分について（2区／2.5m×1.7m、3区及び4区／2m×2m、5区／5m×2m）調査を実施した。
4. 調査層序 ここでは遺構あるいは遺物の出土が顕著であった1区・2区・5区を中心として基本層序を設定した。
I 盛土・・・・・・昭和40年代の区画整理以降に盛られた客土。
II 旧耕作土・・・・・・近年までの耕作面。
III 暗緑灰色粘砂・・・耕作土に伴う床土であり、グライ化している。
IV 淡灰色粘質土・・・調査区の西側では粘性が強く、中～近世の水田面となる。また、土師器片や瓦器片等の中世遺物を包蔵している。
V 淡褐色粘砂・・・調査区全域で確認され、土師器や須恵器の細片を含んでおり、中世～古代の包含層となる。
VI 暗褐色粘質土・・・1区以外にあり、粘性が強く、酸化鉄分の沈着がみられる耕作土である。2区では洪水砂と推定される淡灰色細砂が上面に堆積する。
VII 棕褐色斑状粘土・・・マンガン斑、酸化鉄分が顕著にみられる。すべての調査区に遺存し、1・2・3区上面で古墳時代後期の遺構を検出した。



第75図 調査地周辺図 (1/5000)



第76図 調査区設定図 (1/250)

VII褐色斑暗灰色粘質土・・マンガン斑、酸化鉄分が顯著であり、すべての調査区に遺存していた。1～3区で庄内～布留式期の遺構面を検出した。

IX淡茶灰色粘土・・・・1区以外で確認され、細粒砂を僅かに含む。

X暗灰色砂粒混粘土・・1区でのみ確認でき、1～3mm程度の砂粒を少量含んでいる。弥生中期土器片を包藏する。2・4・5区でも近似する土層があるが庄内～布留式期の遺物を包藏しており、区別しておく。

XI黒灰色シルト・・・・植物遺体が遺存し、炭化物が混じっている。西側の1・2区ではみられず、灰色シルトが確認され、北側では高位になることから北側を肩とし、南東に広がる落ち込みを形成している可能性がある。

XII灰色～暗青灰色砂質シルト・・4・5区で黒灰色シルトの下部に遺存する。やや粘性を帯びている。

XIII淡灰色砂質シルト・・最も深く掘削した5区のみ確認。1mm以下の砂粒を含む。

5. 調査概要

中世～近世
水田面

本調査地では中世～近世の水田層、古代～中世遺物包含層、古墳時代遺構面と包含層、布留式期遺構面、庄内～弥生時代遺物包含層を確認した。

中～近世水田面は5区を除いたすべての調査区で確認でき、T.P+9.55mの⑤層淡灰色粘質土がベース層となる。2区では東西方向にのびる畦畔を検出した。畦畔は一部を確認したに過ぎないが、幅約0.56m、高さ0.1m前後を測る。これら水田面の時期を明確に示す遺物は見つかっていないが、水田構築層から瓦器椀、土師質羽釜片(1)、須恵器などの細片が見られたことから、上限を中世としておきたい。

瓦器細片や土師器片、羽釜片(1)を含む中世遺物包含層はすべての調査区で遺存していた。また、1区ではT.P+9.45m前後の⑥層淡乳褐色粘砂から土師器の長胴甕片や高杯片、須恵器片などが出土しており、奈良時代に相当するものと考えられる。

しかし、この遺物包含層に対応する遺構は検出できなかった。

古墳時代

古墳時代遺物包含層は南側に設定した5区で顕著にみられ、2区・3区にも相当層が遺存していた。5区ではT.P+9.2m前後の⑩層から須恵器蓋杯や土師器片とともに、II期～III期の円筒埴輪片(2)、鞍形埴輪片(3)が出土している。さらに1区で

も⑧層から庄内甕に混じって土師器甕(4)や器材形埴輪片(5)が見つかっている。

本調査地の西約100m(第75図⑦地点)には家形埴輪、舟形埴輪を出土した中田古墳(II期)があり、また東約450mでは形象埴輪や完形の須恵器器台、多量の蓋杯を出土した古墳の周濠と想定される遺構が検出されるなど、埋没した古墳の存在が知られており、埴輪の存在から近辺にもそのような遺構が残されていることが推定される。

2区では⑩層中で須恵器、土師器片が出土し、T.P+9.1mの⑪層を切り込む溝あるいは土坑と推定される遺構が検出された。遺構は南肩のみの確認であったが、検出長約1.7m、検出幅1.6m、最深部で0.26mを測り、オリーブ黒色粘質土を埋土とする。遺物は出土していない。4区でもやはり⑪層上面で、東西方向の溝を検出した。南肩のみであったが、検出長1.08m、検出幅0.45m、深さ約0.2mを測り、暗茶褐色粘砂を埋土とする。遺物は出土していない。

庄内～布留式期

T.P+8.9m前後の⑨層上面が遺構面となり、1～3区で遺構が検出された。1区では幅約0.5m、深さ約0.25mの溝が検出され、埋土である暗灰色炭混じり粘土からは布留甕片(6)、弥生土器底部(7)、庄内甕片などが出土している。

2区では西南角で遺構を検出した。大半が区外に伸びるためその性格は明確ではないが、ここでは土坑状遺構としておく。北東側の肩のみの検出であったが、検出長1.7m、幅0.85m以上、最も深いところで0.24mを測り、埋土である炭混じりの灰黒色粘土からは土師器片が出土している。

3区では土坑2基を検出している。いずれも調査区外に伸びるために全容は不明だが、橢円形を呈している。土坑1は長径0.33m以上、幅0.36m、深さ0.14m、埋土は暗灰色粘土である。土坑2は長径0.42m以上、幅0.5m、深さ0.09m、埋土は褐色斑灰色粘質土である。遺物は土坑1より土師器片数点が出土した。

庄内式期～弥生時代

2区・5区ではT.P+8.7m前後で包含層が確認された。2区では庄内甕片に混じって弥生土器の底部(8)が、5区では多くの土師器細片とともに廉状文をもつ弥生中期の壺体部(9)が出土している。5区では細片であるが、土器片が多くみられたことから、遺構の可能性をもつている。

1区では遺構を確認できなかったが、T.P+8.8m前後の⑩層褐色斑暗灰色粘土から庄内式新相に比定できる甕(10)と弥生土器片が出土しており、さらにその下部のT.P+8.6mの⑪層暗灰色砂粒混粘土ではIV様式後半の弥生土器片が見つかった。

6.まとめ 今回は小区画のグリッド調査であり、深い土層までを対象とすることはできなかつたが、いくつかの遺構の存在が確認できた。そこで、周辺で行われてきた調査のなかで今回の調査と関連するところについて述べ、まとめにかえたい。(第75図調査地周辺図参照)

本調査地は中田遺跡と東弓削遺跡の接点に位置している。遺跡の範囲は行政区画を利用して設定されており、集落規模あるいは明確な遺物包含層の断絶をとらえているものではない。いずれも弥生時代から中世まで連綿と続く複合遺跡であり、十分な資料の蓄積がされていないからである。このためここでは近辺の遺跡ということで両方の遺跡を対象としたい。

中近世の水田相当層は①～⑥で検出されており、①・②ではT.P+9.6m前後、③ではT.P+9.1m、④はT.P+9.0mで検出されている。また、②より南ではT.P+10.5～10.8mで検出されている。

古代、とくに奈良時代では近辺は『統日本紀』に記されている由義宮の所在地と推定されている。調

番号	道跡名	文 献 名	調査主体	発行年	備考
①	中田道跡(第25次)	平成6年度 鶴八尾市文化財調査研究会事業報告	鶴八尾市文化財調査研究会	1995.5	穀倉水田、奈良土坑、庄内式土坑
②	東弓削道跡(第7次)	鶴八尾市文化財調査研究会報告41	*	1998	平安水塘水田、布留式土坑七脚瘤
③	中田道跡(第31次)	鶴八尾市文化財調査研究会報告56	*	1997	中田水田
④	中田道跡(第15次)	平成5年度 鶴八尾市文化財調査研究会事業報告	*	1994.5	中世水田
⑤	中田道跡(第20次)	鶴八尾市文化財調査研究会報告43	*	1994	中近世水田 古墳後削土坑
⑥	東弓削道跡(第1次)	昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査	*	1983	中世水田苗
⑦	中田道跡(第19次)	平成3年度 鶴八尾市文化財調査研究会事業報告	*	1994.5	古墳、庄内式土坑、溝地
⑧	中田道跡(第16次)	鶴八尾市文化財調査研究会報告56	*	1997	庄内式小穴、布留式土坑并立
⑨	中田道跡	中田道跡発掘調査概要	大阪府教育委員会	1985	不明遺構
⑩	中田道跡(第13次)	鶴八尾市文化財調査研究会報告39	鶴八尾市文化財調査研究会	1993.12	庄内～布留式土坑・溝地
⑪	中田道跡(第6・53次)	八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書1	八尾市教育委員会	1988.2	庄内～布留式土坑？
⑫	中田道跡(第10次)	平成4年度 鶴八尾市文化財調査研究会事業報告	鶴八尾市文化財調査研究会	1993.3	庄内式土坑、布留式土坑、溝
⑬	中田道跡(第4次)	鶴八尾市文化財調査報告35	*	1992.10	弥生後削土坑、ビット、
⑭	中田道跡(第27次)	平成3年度 鶴八尾市文化財調査研究会事業報告	*	1995.5	庄内～布留式土坑、井戸、土坑
⑮	東弓削道跡(第4次)	鶴八尾市文化財調査研究会報告37	*	1993.3	庄内式土坑、弥生中期土坑
⑯	東弓削道跡	昭和58年度事業概要報告	*	1994	中田道跡で報告
⑰	東弓削道跡	東弓削道跡	八尾市教育委員会	1976.4	布留式土坑、弥生日暮式土坑
⑲	東弓削道跡	八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書II	*	1988.3	弥生中期土坑

表1 調査地周辺既往調査一覧

査地の西に位置する楠根川沿いでは奈良時代の井戸が見つかっており、①でもT.P+9.6 m前後で土坑と溝が検出されている。しかし、決定的に検出遭構が少なく不明な点が多い。これは東側にある旧大和川の流路のひとつである玉串川の氾濫あるいは中世以降に削平されたことが想定される。そうした意味で今回1区での極少量の遺物の出土は本調査地が奈良時代の中心を成すものではなかったといえる。

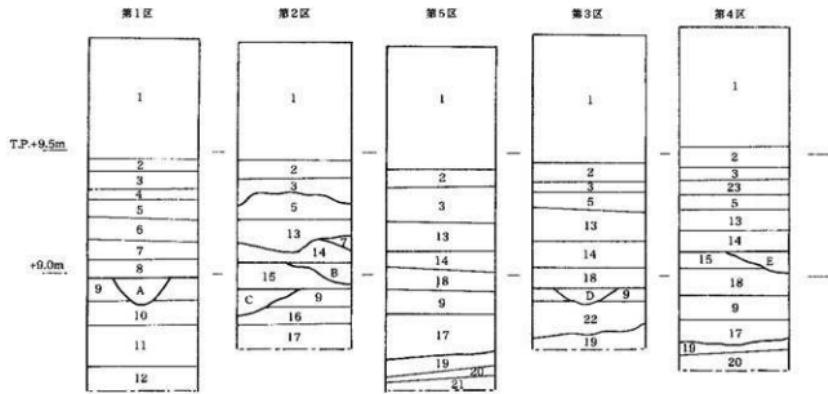
古墳時代中～後期は遺物の出土は多いが、検出遭構は少ない。⑤ではT.P+9.1 mで後期の土坑4基を、⑦ではT.P+9.2～9.6 mで土坑や溝を検出している。先述しているが、⑦では古墳（中田古墳）が見つかっており、周辺が同時代に墓域であったことが窺える。

庄内～布留式期はこの遺跡の最盛期であり、ほとんどの調査区で確認されている。⑧では丸太の刳抜井戸が見つかっており、また⑫でも水汲み場と推定される遺構が検出されている。さらに⑬では布留式期の土坑から陶質土器が出土するなど当歴期は人や物の流入が卓越していたことを示している。

弥生時代は⑩～⑯で遭構が検出されており、⑩では前期(T.P+7.1 m)と中期(T.P+8.2 m)、⑯では中期(T.P+8.4 m)の土坑が、そして⑰でも中期の土坑が確認され、さらに⑲では壺棺が見つかっている。

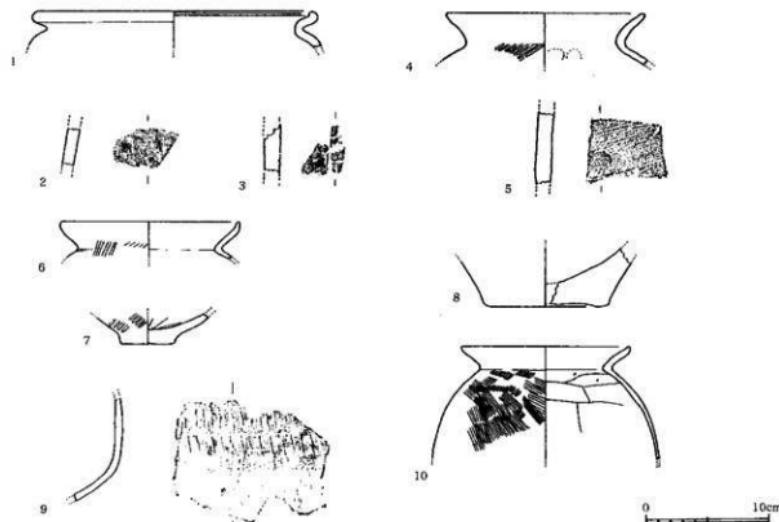
以上、簡単に周辺の状況について述べてきたが、本調査の結果もほぼそれらをトレースしていることがわかる。遺跡は河内平野の動脈ともいえる旧大和川の大きな二つの流れに挟まれるという良好な環境に位置しており、交通の要所と成りえた。それがこのような遭構の重複を促しているのであろう。小さな調査であり、良好な調査結果とはいえないし、遭構の検出にバラツキを生じているが、遭構の有無はこうしたことを物語っているのである。

(消)



1. 盛土（I層）
 2. 旧耕作土（II層）
 3. 暗緑灰色粘砂（III層）
 4. 淡黃灰色粘砂
 5. 淡灰色粘質土（IV層）
 6. 淡乳褐色粘砂
 7. 灰白色細砂
 8. 淡茶灰色粘質土
 9. 暗色纖維灰色粘質土（V層）
 10. 暗色纖維灰色粘土
 11. 暗灰色砂粒混粘土（X層）
 12. 灰色粘質シルト
 13. 淡褐灰色粘砂（V層）
 14. 暗褐灰色粘質土（VI層）
 15. 棕褐色灰色粘土（VII層）
 16. 淡茶灰色粘土（IX層）
 17. 暗灰色シルト混粘質土
 18. 淡茶灰色粘砂
 19. 黑灰色シルト（XI層）
 20. 灰色～暗青灰色砂質シルト（XII層）
 21. 淡灰色砂質シルト（XIII層）
 22. 暗褐色混粘土
 23. 淡灰色シルト
- A. 灰黑色粘砂（溝）
B. オリーブ黒色粘土（溝or土坑）
C. 暗灰色粘土（灰混）（土坑状遺構）
D. 暗灰色粘土（土坑1）
E. 暗茶褐色粘砂（東西方向の溝）

第77図 柱状断面図 (1 / 40)



第78図 出土遺物実測図 (1 / 4)

10. 西郡廃寺遺跡（97-705）の調査

1. 調査地 幸町3丁目109-1

2. 調査期間 平成10年3月9日

3. 調査方法 特定郵便局建設に先立ち、建設予定地内に2m×2mの調査区を南北2ヵ所に設定（北側を第1調査区・南側を第2調査区と呼称）し、地表下1.5m付近まで遺構確認調査を行った。今回の調査区は、平成8年度に市教委が行った遺構確認調査の第2調査区〔八尾市教育委員会1998〕から西に約40mと近接している。

4. 調査概要 第1調査区）現地表面は、T.P.+5.0mを測る。地表下0.85mまでは、盛土及び整地層が続く。そして、地表下0.95mにおいて、西側に向かって落ち込む溝状の遺構を検出している。深さは約0.2mを測る。出土遺物には、土師器・須恵器・瓦がある。時期については、中世～近世のものと考えられる。

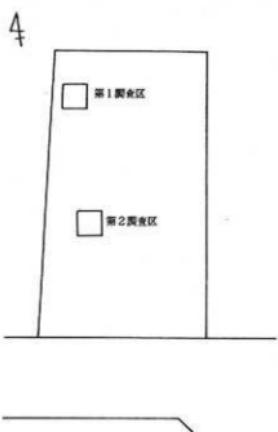
さらに、地表下1.2m～1.35mの暗灰褐色砂混粘質土（7層）が、弥生時代後期後半の遺物包含層となる。図化できたのは（1）の壺底部がある。

そして、地表下1.35m（T.P.+3.65m）の暗茶褐色砂質土（8層）において、遺物包含層に対応する該期の遺構面を検出している。検出した遺構は、ピット3基（Pit 1～3）と土坑1基（SK 101）である。

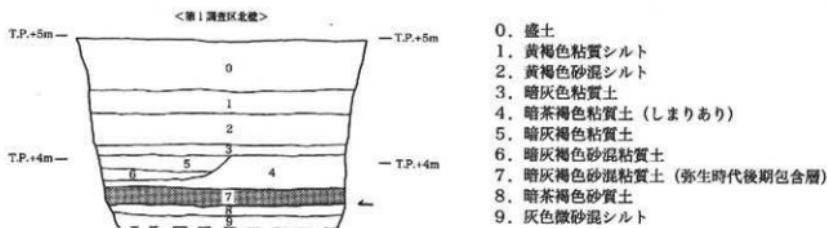
3基のピット（Pit 1～3）は、北東方向に一直線に並び、それぞれほぼ同規模で直径約0.45m、深さ約0.1mである。埋土は、暗褐色粘質土である。土坑（SK 101）は、東の壁際で検出した。土坑半分は、調査区外に伸びる。直径約0.5m、深さ0.15mを測る。埋土は、暗灰色シルト混粘質土である。出土遺物には、（2）の壺口縁～上部と（3）の装飾壺口縁部がある。



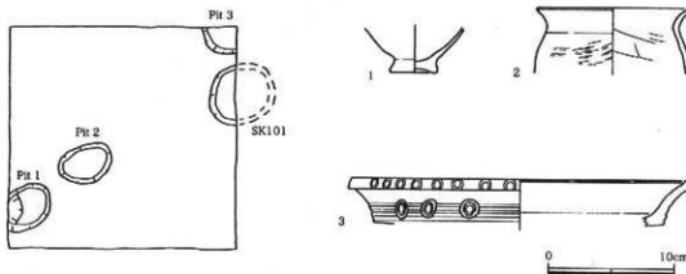
第79図 調査地周辺図 (1/5000)



第80図 調査区設定図 (1 /400)



第81図 土層断面図 (1 /40)



第82図 遺構平面図 (1 /40)

第83図 出土遺物実測図 (1 /4)

弥生時代後期末のベース面以下では、遺構・遺物は確認できなかった。

第2調査区 現地表面は、T.P.+4.95mを測る。第1調査区とほぼ同様の層序を示している。層厚約0.5mの盛土層があり、以下地表下1.15m～1.3mの暗灰褐色シルト混粘質土（4層）が、弥生時代後期後半の遺物包含層となる。この層の出土遺物は壺や壺底部など(4)～(8)がある。この層は、第1調査区の（7層）に対応する。

そして、地表下1.3m（T.P.+3.6m）の暗褐色シルト混粘質土（5層）が遺構面となる。検出した遺構は、土坑が北側に1基、南側に東西に並んで2基の計3基（北側からSK201～203）である。

北側のSK201は、直径約0.5m、深さ約0.3mを測る。埋土は暗灰色砂混粘性シルトであった。そして、土坑中央部には、高杯脚部(9)とミニチュアの高杯脚部(10)がセットに埋められていた。何らかの埋納行為が行われたものと考えられ興味深い。

そして、南側のSK202・203は、どちらも検出したのは一部のみで、調査区外の南側に統く。SK202は、直径約0.75m、深さ約0.25mで、壺2点(11・12)が据えられていた。また、破片では小型壺(13)がある。埋土は、暗褐色粘質シルト・灰色シルト・暗灰色シルトで、炭が多数混じっていた。SK203は、直径約0.5m、深さ約0.15mを測る。広口壺(14)が出土している。埋土は、暗褐色粘質シルトであった。

これらの遺構を検出した遺構面は、調査区内全体がしまっており、特に南半分に関しては硬くしまっていた。これらのことから検出した遺構面は、住居の床面である可能性が高く、土坑類は、住居跡に関連する可能性がある。

5. まとめ

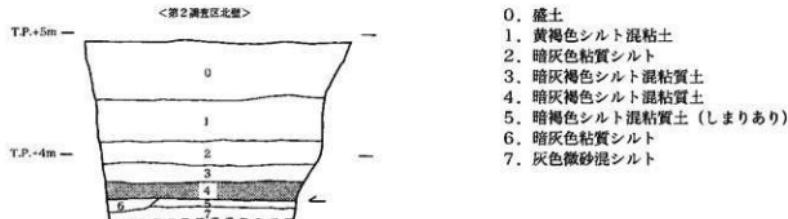
今回の調査では、この周辺一帯に弥生時代後期後半の集落域が広がることが明らかとなつた。これは、周辺で行われた市教委、(財)八尾市文化財調査研究会の調査でも該期の遺構・遺物を検出していることからもわかる。

但し、弥生時代後期以降の顕著な遺構・遺物は、今回の調査では確認できなかつた。今後の調査で、「西郡廃寺」等の遺構・遺物が確認できることを期待したい。

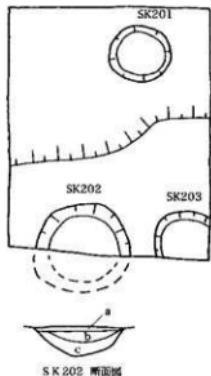
(藤井)

[参考文献]

- (財)八尾市文化財調査研究会1996「I. 葦振遺跡(第6次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告52』
八尾市教育委員会 1997「西郡廃寺遺跡(96-580)の調査」『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書II』

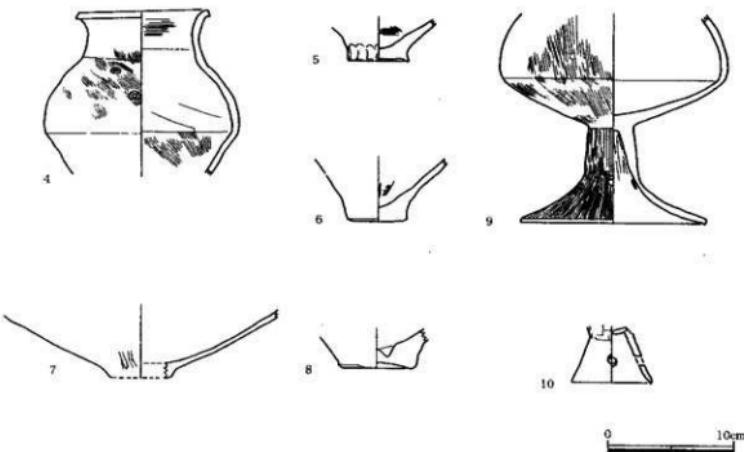


第84図 土層断面図 (1/40)

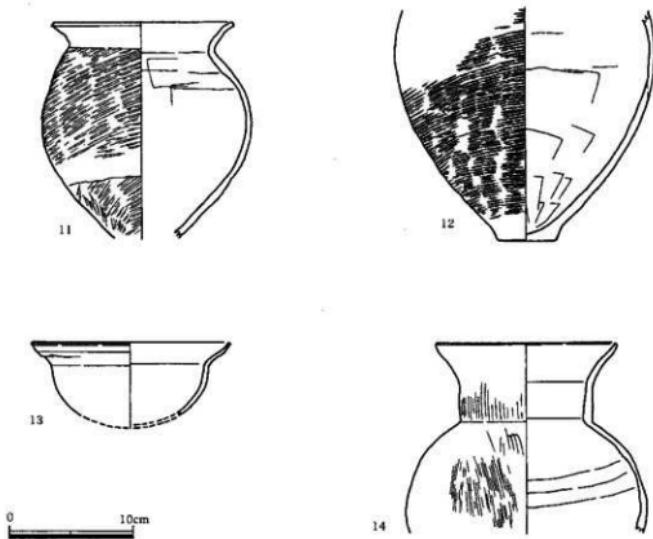


- a. 暗褐色粘質シルト
- b. 灰色シルト
- c. 暗灰色シルト (炭混)

第85図 遺構平面図 (1/40)



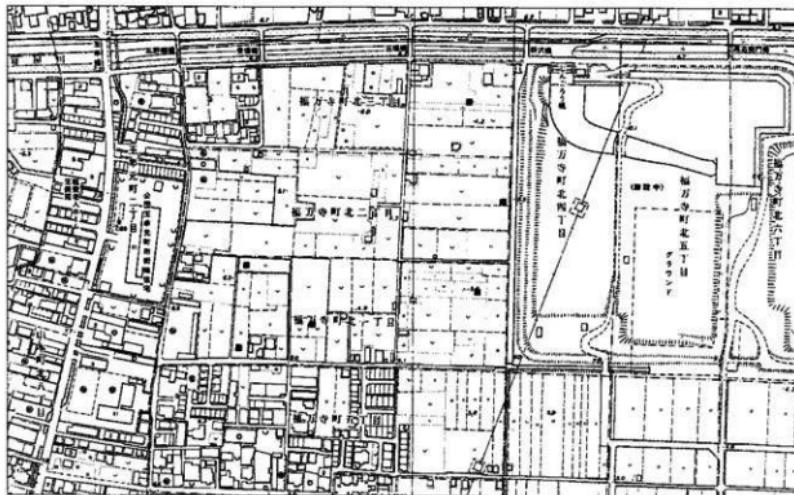
第86図 出土遺物実測図 (1/4)



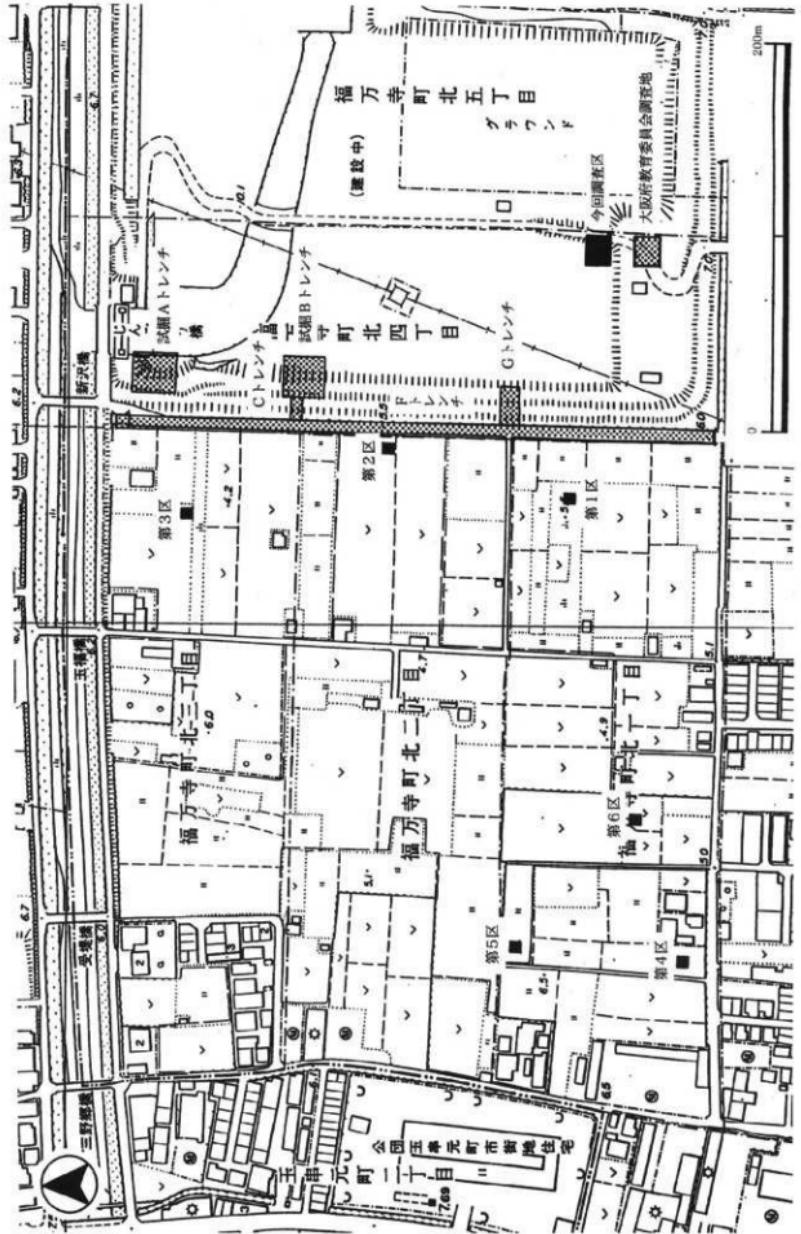
第87圖 出土遺物實測圖 (1 / 4)

11. 福万寺遺跡（98-357）の調査

1. 調査地 福万寺町北1～3丁目
2. 調査期間 平成10年11月9日～11月30日
3. 調査方法 福万寺町北地区土地区画整理事業に先立つ遺構確認調査として6か所の調査区を設定し、一辺5×5mの範囲で、重機掘削と人力掘削を併用して地表下約3mまで調査を行った。なお、調査区の名称は調査を行った順に第1区～第6区とした。
4. 調査概要 以下、第1区から第6区までの調査概要について述べる。
第1区～現地表はT.P.+5.7mを測り、畠地の上に約30cmの盛土がなされている。盛土以下地表下1.05mまでは近年の耕作土と考えられる砂質土層が続き、以下地表下1.6mまで河川堆積の粗砂層となる。地表下1.6～1.7mおよび2.0～2.1mでは灰色微砂シルト層がみられ、瓦器片が含まれることから中世頃の耕作面に推定される。地表下1.7～2.0mでは河川堆積の粗砂層となり、地表下2.1m以下は、湿地状堆積と考えられる灰色微砂層～植物遺体を含むシルト質粘土層～粘土層となる。地表下2.7m以下は河川堆積の粗砂層が0.2m以上続くが、これらの層では、遺構・遺物は確認できなかった。
第2区～現地表はT.P.+5.4mを測り、盛土の直下に近年の耕作に伴うと思われる東西方向に伸びる畝状の溝がみられる。地表下0.5～1.2mでは粗砂層から次第に細かい細砂層となり、地表下1.2～1.3mおよび地表下1.7～1.9mでは、第1調査区と同様の中世の耕作面に推定できる微砂シルト層がある。地表下1.3～1.7mでは河川堆積の粗砂層となり、地表下1.9m以下は、湿地状堆積と考えられる微砂層～植物遺体を含むシルト質粘土層がみられる。地表下2.4m以下は、河

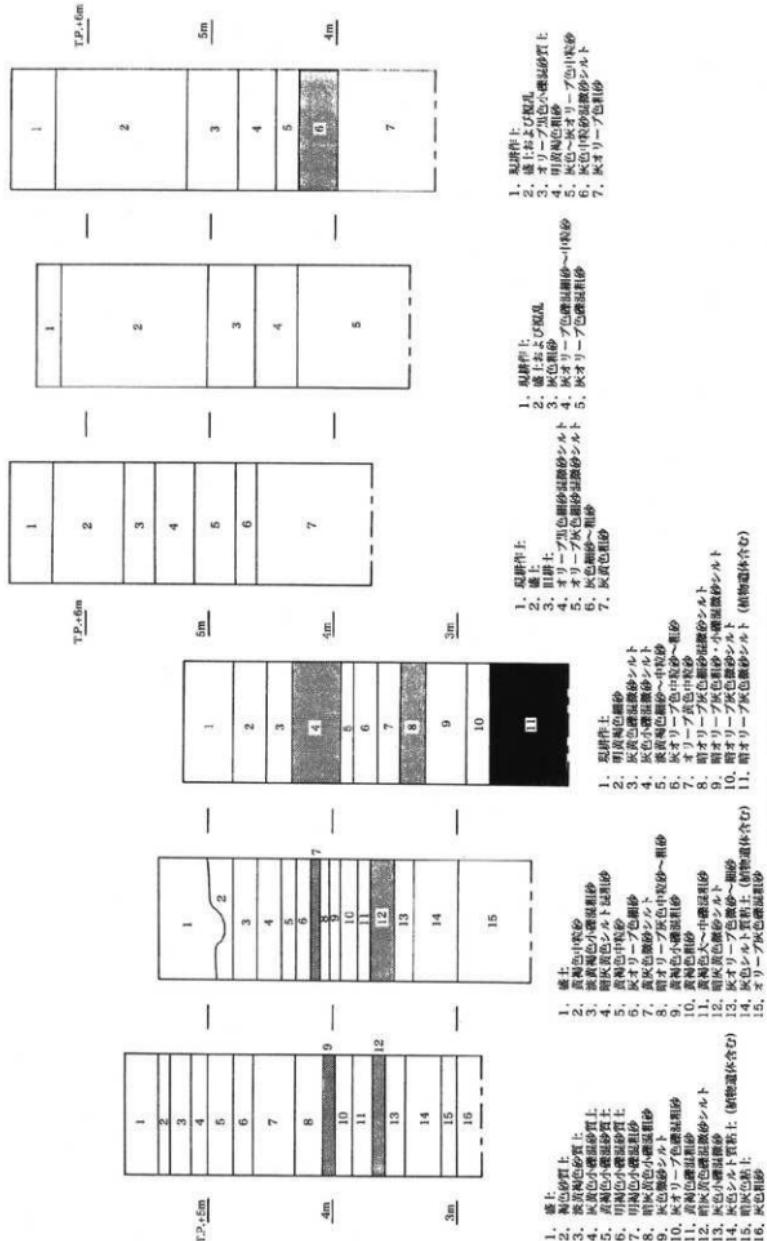


第88図 調査地周辺図 (1/5000)



第89図 調査区設定図 (1/2500)

第1区 第2区 第3区 第4区 第5区 第6区



第90図 土層模式図 (1/40)

川堆積の粗砂層が0.6 m以上続く。

第3区－現地表はT.P. + 5.2 mを測り、現耕作土直下で細砂層がみられる。地表下0.65～1.25mでは中世の耕作土と考えられる灰色微砂シルト層が続き、地表下1.2 m前後で土器片が出土した。以下地表下1.75 mまでは、河川堆積の砂層となり、地表下1.75～2.5 mでは灰色微砂シルト層がみられる。地表下2.5 m以下の微砂シルト層には植物遺体が含まれ湿地状堆積と考えられるが、遺構・遺物は確認できなかった。

第4区－現地表はT.P. + 6.6 mを測り、現耕作土の下に約0.6 mの客土がなされており、地表下0.9 mで客土以前の旧耕土となる。地表下1.15～1.8 mでは微砂シルト層がみられ、陶器・土器片が含まれることから近世頃の耕作土と考えられる。地表下1.8 m以下では河川堆積の粗砂層が1.1 m以上続く。

第5区謙賜現地表はT.P. + 6.4 mを測る。現耕作土以下約1.2 m前後は客土および擾乱層となっており、第4調査区でみられた近世の耕作土は削平されているようである。地表下1.4 mで河川堆積の粗砂層となり、1.6 m以上続く。

第6区－現地表はT.P. + 6.6 mを測る。現耕作土以下約1.1 m前後は客土および擾乱層となっており、地表下1.4～1.8 mで、第4調査区と同様の近世の耕作土と考えられる微砂シルト層がみられた。地表下1.8～2.3 mでは河川堆積の粗砂層となり、地表下2.3～2.6 mは微砂シルト層で、中世頃の耕作面になると考えられる。地表下2.3 m以下は、河川堆積の粗砂層が0.8 m以上続く。

5. 出土遺物

第1・3・4・6区で遺物が出土したものの少量であり、いずれも細片で図化できるものはなかった。

6. まとめ

福万寺遺跡は、西に玉串川の自然堤防、東は生駒山地とその西麓に形成された扇状地に挟まれた南北に長い低地部にあたり、中世まで遡る「条里制」地割が、現在まで水田としてよく残っている地域である。今回の調査地の東側一帯の調査（大阪府教育委員会による）においても、中世から近世に連続と続く水田面の条里遺構が検出されている。今回の調査地においては、東側の第1～3調査区で、水田耕作土と考えられる微砂シルト層と河川の氾濫によると考えられる粗砂層が交互に堆積している状況が確認できた。面的な調査ではないため畦畔などの遺構は検出できなかつたが、同様の条里遺構が広がると考えられる。なお、第3調査区の地表下2.5 m (T.P. + 3.7 m) 以下でみられる灰色微砂シルト層については、今回の調査では遺構・遺物ともに検出できなかつたもの、前述の大阪府教育委員会の調査で古墳時代後期（6世紀）の遺構面が検出されており、今後の調査においては注意が必要であろう。

一方、西側の第4～6調査区においては、近世以降の水田耕作面と考えられる微砂シルト層は残っているものの、中世の時期にあたる層はやや東よりの第6調査区でみられるのみで、地表下1.8 m (T.P. + 4.8 m前後) 以下は河川堆積によると考えられる粗砂層が続いている。

（吉田珠己）

参考文献

大阪府教育委員会 1983 「池島遺跡発掘調査概要・II」

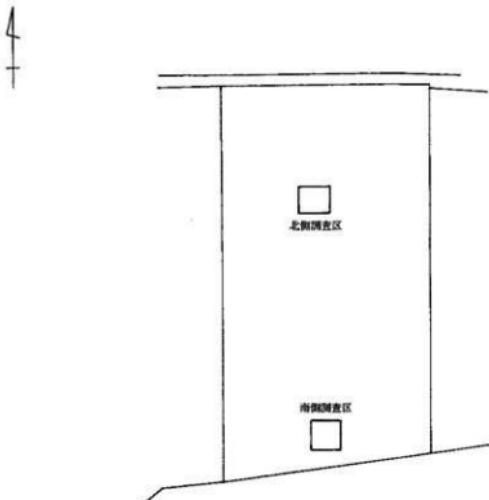
大阪府教育委員会 1986 「池島遺跡発掘調査概要・I－八尾市福万寺地区－」

12. 宮町遺跡（98-99）の調査

1. 調査地 八尾市宮町2丁目26-2
2. 調査期間 平成10年5月25、26日
3. 調査方法 施工予定地の北側人孔及び南側人孔の設置部分に2.5m四方の調査区を設定し、地表下2.0m前後まで重機と人力を併用して確認した。
4. 調査概要 (北側人孔) 地表下0.96m前後、TP+7.3m前後で南北方向の溝状遺構を検出した。これは調査区の西壁にかかる状態であり、東肩のみの検出であったが、最大検出幅0.75m、最大深0.5mを測る。埋土は暗茶灰色砂質土層でおよそ3層に細分できる。瓦器片、東播系須恵器すり鉢片、北宋代とみられる白磁片等が含まれていた。さらに遺構面構成層の茶灰色砂質土B層及びこの下の灰茶色砂質土A層及び同B層には、瓦器片、土師器片、国産陶磁器片が含まれていた。さらに溝の底面構成層である黄白色粘性微砂層では鎌倉時代とみられる土師器片が含まれていた。さらにその下の茶灰黄白色粘性シルトA～C層には遺物は含まれていなかった。
また溝状遺構底面では灰黄白色微砂層が幅3cm前後で帯状に延びるのを、約1.4mの区間で確認した。西壁土層断面で確認したところ液状化現象とみられる砂脈が3箇所みられ、このうち溝状遺構埋土の最下層に及ぶ中央の砂脈を溝底面で確認したことがわかった。砂脈は中央と北側の2本が灰黄白色微砂であり、南側が褐灰色砂である。3本とも先端が細くなって終わっている。これは液状化現象による噴砂とみられ、鎌倉時代の包含層とみられる溝底面構成層の黄白色粘性微砂層を貫いていることから、鎌倉時代以降の地震の痕跡である可能性がある。
- (南側人孔) 地表下1.02m前後の茶灰色砂質土層上面で土坑状の遺構を検出した。これは調



第91図 調査地周辺図 (1/5000)



第92図 調査区設定図 (1/400)

査区の西壁にかかる状態で東肩のみを検出したが、最大検出長は南北で1.4mを測り、最大深は0.3mを測る。埋土は茶灰色粘砂層、淡茶灰色粘砂A層、同B層である。埋土から土師器片が少量出土している。さらに遺構面構成層の茶灰色砂質土層からも瓦器片、土師器片、須恵器片が少量出土した。またこの下の地表下1.2m以下の土層断面においても、灰白色微砂シルトが縦方向の細い縞状に4条確認できた。北側調査区の同様の墳砂ではないかとみられる。

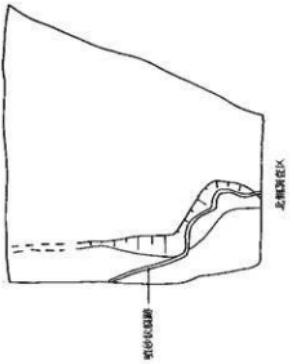
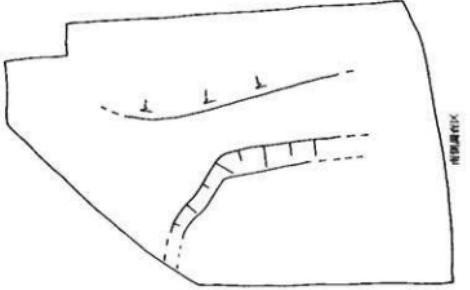
5. まとめ

今回の調査区ではTP+7.3m前後で、鎌倉時代後期の遺構面を確認した。これは平成3年度の(財)八尾市文化財調査研究会の発掘調査によって本調査地の東方で確認されている鎌倉時代の遺構群と密接な関係を有するものとみられる。

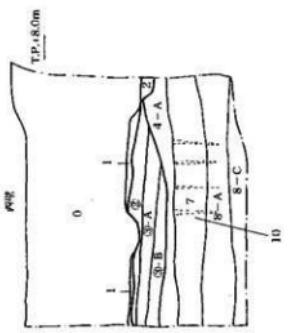
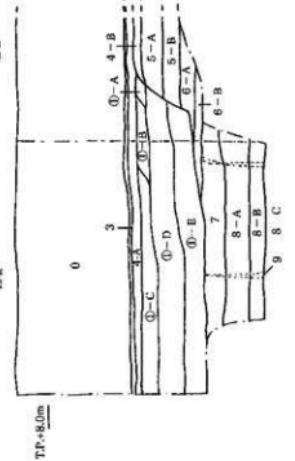
なお八尾市内の発掘調査で液状化現象による墳砂が報告されている例は、本調査地の南西方2kmの久宝寺遺跡例や、本調査地の北東方3km余りの池島・福万寺遺跡例等がある。久宝寺遺跡例は弥生時代後期末以降の地震の痕跡とみられており、池島・福万寺遺跡例は1596年の大地震によるものとみられている。

本調査地で確認した墳砂とみられる地層の状態は、民間の申請による遺構確認調査であるため、専門家の知見を得ることができなかつたが、墳砂であるとすれば、他の八尾市内での確認例との関連性が注意されるところである。今後の当遺跡内の調査に注意したい。

(吉田野乃)



- 断面
1. 青灰色粘砂層 (耕作土?)
 2. 深褐色粘砂層茶灰色粘砂層
 3. 黑色砂質土層
 - 4-A. 茶灰色砂質土層
 - 4-B. 同上. 粘性大
 - 5-A. 厚茶色砂質土層
 - 5-B. 同上. 粘性大
 - 6-A. 厚茶白色粘砂質土層
 - 6-B. 同上. 粘性大
 7. 黄白色粘性微砂層
 - 8-A. 深灰黃白色粘性シルト層
 - 8-B. 同上. 砂多
 - 8-C. 同上. 粘性少
 9. 淡灰色砂層 (礫のか)
 10. 浅白色微砂シルト層



第93図 北側調査区 平・断面図 (1/40)

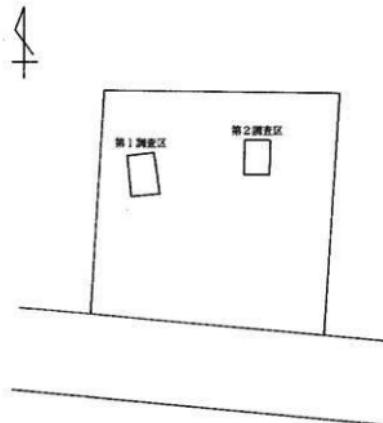
第94図 南側調査区 平・断面図 (1/40)

13. 弓削遺跡（98-380）の調査

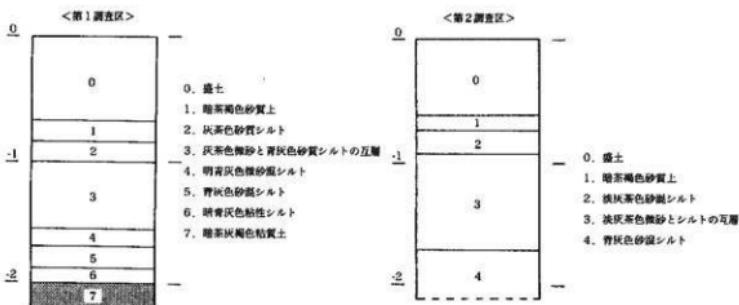
- | | |
|---------|--|
| 1. 調査地 | 志紀町南3丁目171番地 |
| 2. 調査期間 | 平成10年11月18日 |
| 3. 調査方法 | 専用住宅建設に先立ち、建築予定地内に2m×1.3mの範囲の調査区を2ヵ所設定（西側から第1調査区、第2調査区と呼称）し、地表下2.2m付近まで遺構確認調査を行った。 |
| 4. 調査概要 | <p>第1調査区　層厚約0.65mの盛土以下、地表下1.0m～1.85mの間に河川堆積層が広がる。この河川堆積層の下層となる青灰色砂混シルト層から、弥生土器、須恵器の破片に混じって埴輪が出土している。埴輪の種類には、円筒埴輪の底部(1)と口縁の一部(2)と不明形象埴輪等の破片がある。出土した埴輪は、川西編年のV期にあたり、古墳時代後期のものである。おそらく、周辺に存在した古墳から流出したものであろう。しかし、埴輪の表面が、ほとんど摩滅していないことから、古墳はさほど遠くないところにあったと考えられる。</p> <p>そして、地表下2.0mの暗茶灰褐色粘質土層より弥生時代後期の壺(3)がほぼ完形で出土している。遺構をとらえることはできなかったが、遺構内の遺物であろう。</p> <p>第2調査区　第1調査区とはほぼ同様の土層であるが、河川堆積層がやや厚く、地表下0.9m～2.1mまで続く。出土遺物もなく、第1調査区の弥生時代後期の遺物包含層に対応する層は確認できなかった。</p> |
| 5. 小結 | 弥生時代後期の遺構が周辺に広がっていることを確認できた。さらに、河川堆積層ながら、古墳時代後期の円筒埴輪等を確認した。今後、周辺の調査で古墳の存在が明らかになることを期待したい。
(藤井) |



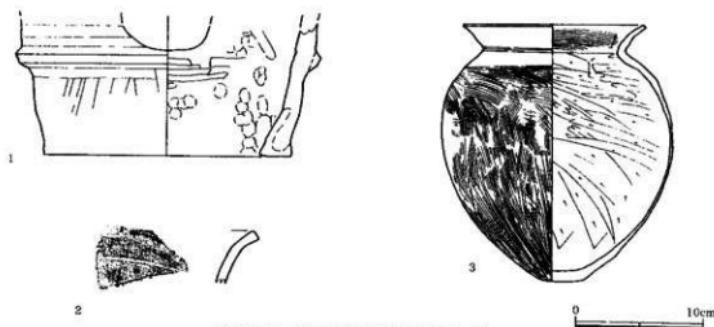
第95図 調査地周辺図 (1/5000)



第96図 調査区設定図 (1 /400)



第97図 土層断面図 (1 /40)



第98図 出土遺物実測図 (1 / 4)

図版

調査区南より
天王の社を望む



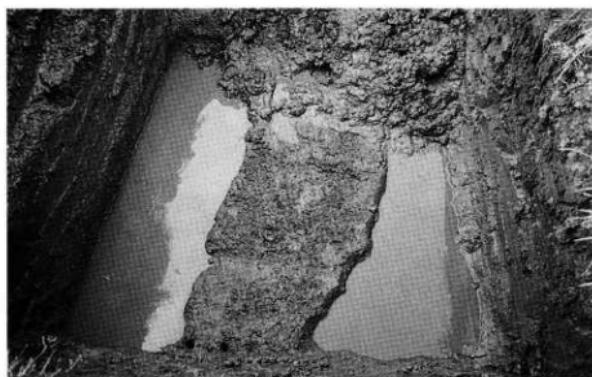
試掘調査区
北より



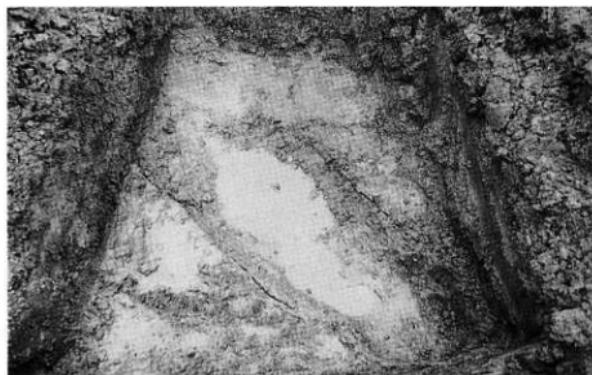
立会調査区
南壁



SD101（右側）
(北より)



SD301検出状況
(北より)



SK301土器出土状況



調査風景
その1



調査風景
その2



SW01
出土状況



第1遺構面
(東より)



第3遺構面
(東より)



SD3-1骨片出土状況



調査地
南より



南側調査区
第2遺構面
石組み出土状況



南側調査区
第1遺構面検出状況
南より



調査地
北より



北側調査区
東より



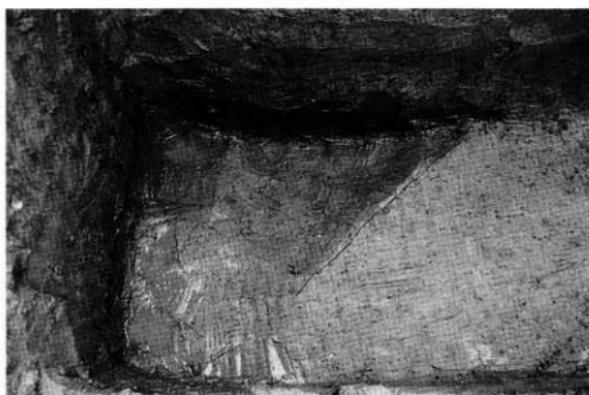
南側調査区
西より



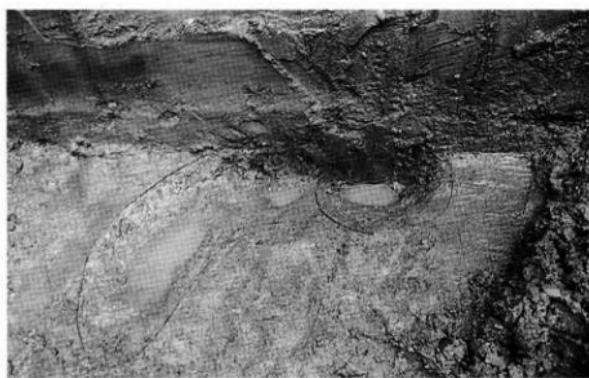
2区中～近世畦畔と古
墳時代土坑（西より）



2区庄内～布留式期
土坑（東より）



3区古墳時代溝



第1区
(南より)



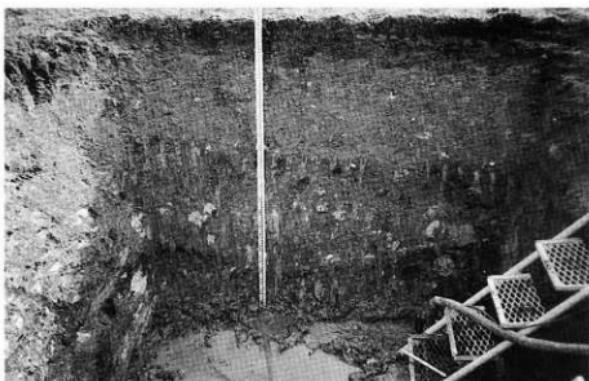
第2区
(東より)



第3区
(南より)



第4区
(北より)



第5区
(西より)



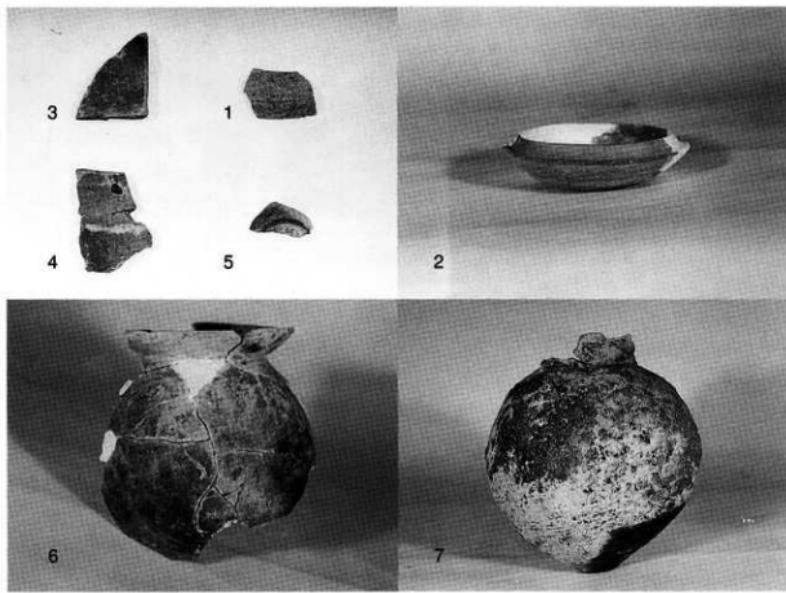
第6区
(東より)



圖版 10 恩智遺跡（98—54）・董振遺跡（98—9）出土遺物

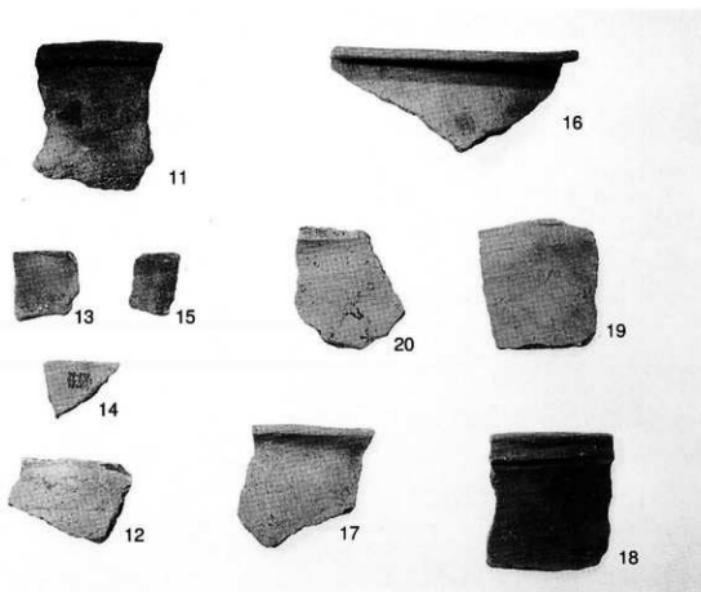
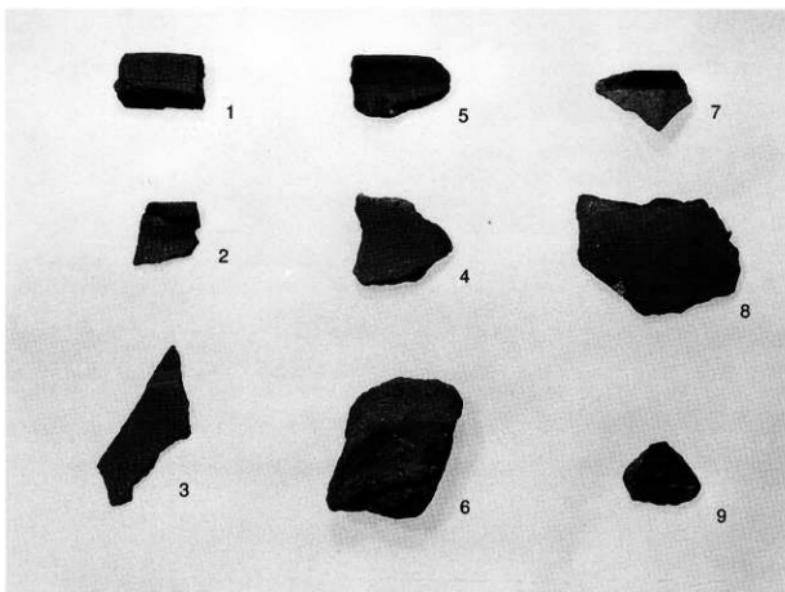


恩智遺跡（98—54）

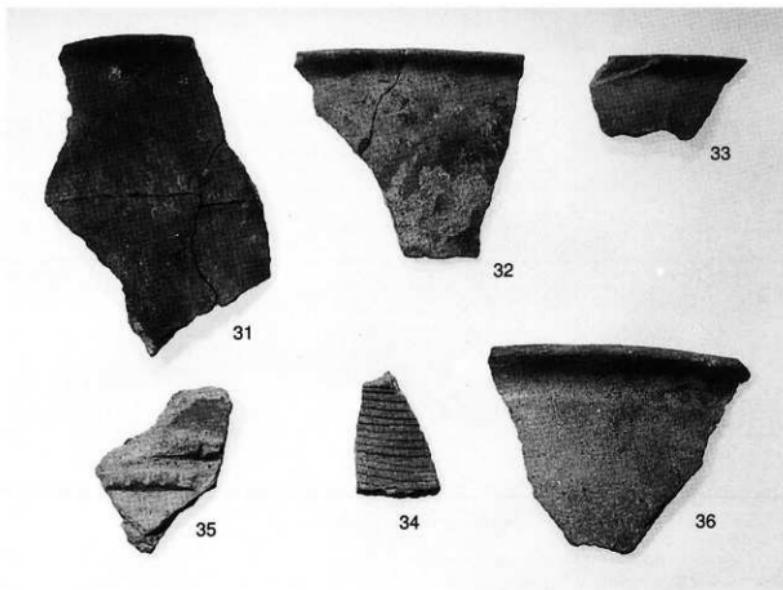
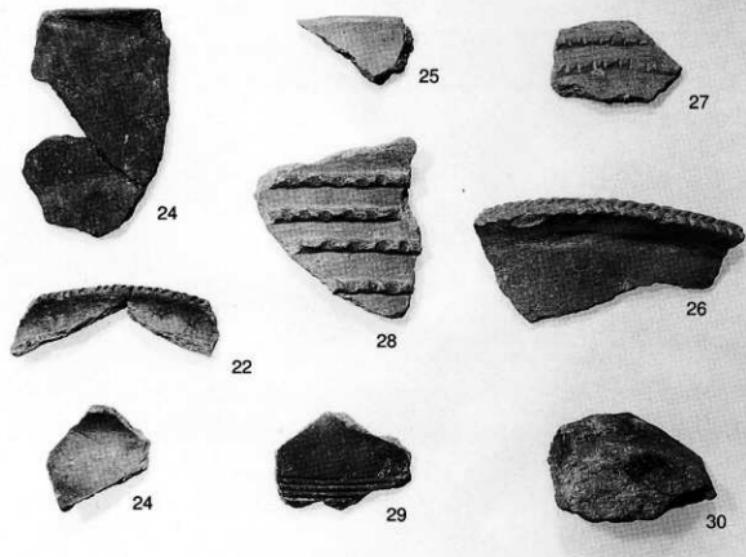


董振遺跡（98—9）

圖版 11 恩智遺跡（98—278）出土遺物



圖版 12 恩智遺跡（98—278）出土遺物





37



41



40



42



39



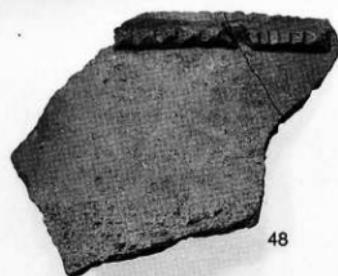
38



43



58



48



47



45



50



49



44



52



46



51



54



53



55



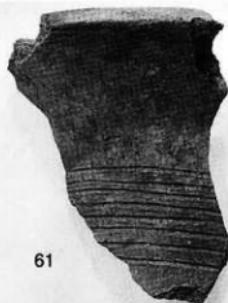
56



57



60



61



62



63



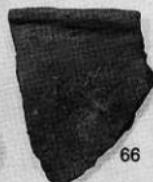
68



64



65



66



67



23



10



5



25



37



南調査区出土
鐵釘状遺物



20



21

SE01出土遺物

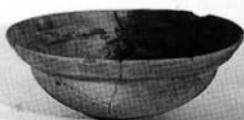


32



33

SW01出土遺物（その1）



34



35



37

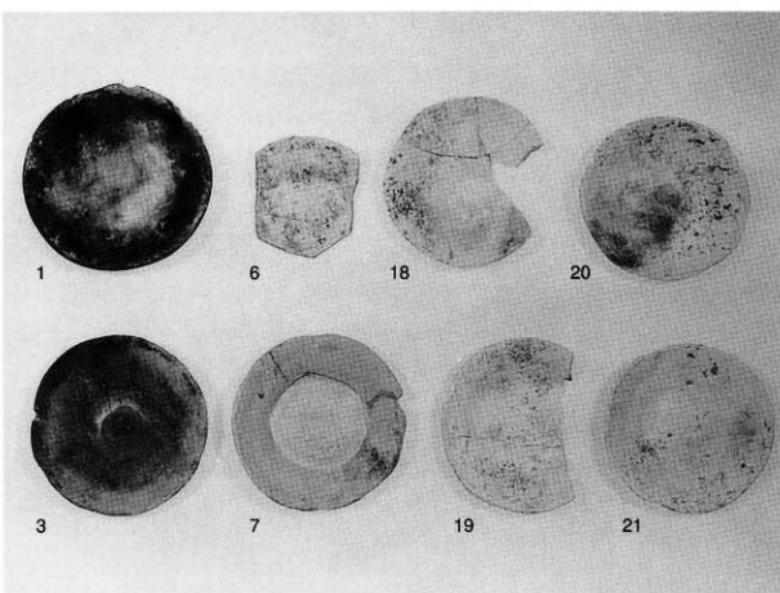


38

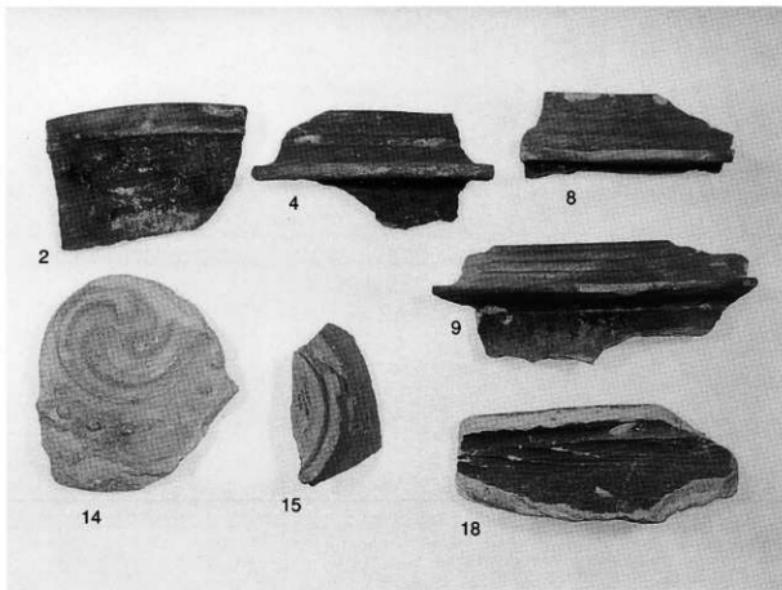


40

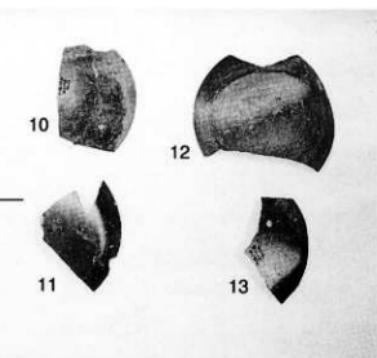
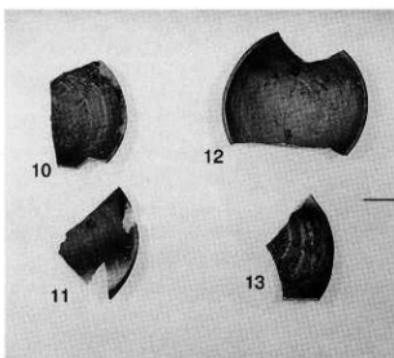
SW01出土遺物（その2）



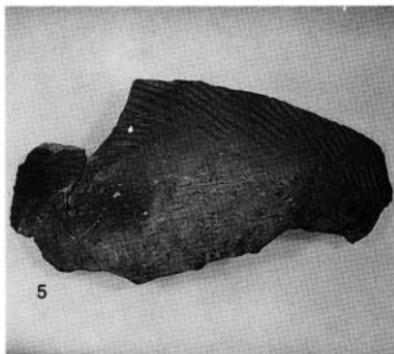
土器皿



軒丸瓦、須恵器、瓦質土器

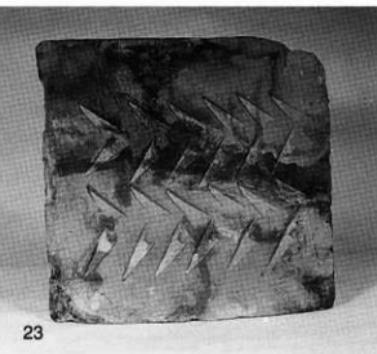


第3面出土瓦器椀



埋甕（SX101）

壁面上土坑出土羽釜



瓦質井戸側用材

報告書抄録

ふりがな	八尾市内道路半成10年度実測調査報告書						
書名	八尾市内道路半成10年度実測調査報告書						
副題名	平成10年度国庫補助事業						
番次							
シリーズ名	八尾市文化財調査報告						
シリーズ番号	40						
編著者名	木田敏幸・酒井・吉田野乃・吉田珠己・藤井深弘						
編集機関	八尾市教育委員会						
所在地	〒581-0003 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 ☎0729-91-3881						
発行年月日	西暦 1999年 3月 31日						
ふりがな 所以道路名	ふりがな 所在地	コード 古町村 道路番号	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
ひらおひせ 跡部道路	ゆきし ひらおひせ 八尾市 春日町	27212	34° 35'	35° 49'	19980119, 0512	4	共同住宅建設に伴う道路確認調査
ひらおひせ 忍智道路	ゆきし ひらおひせ 八尾市 忍智中町	27212	34° 35'	35° 21'	19980423, 0619	9	特定駆使局建設に伴う 道路確認調査
ひらおひせ 豆振道路	ゆきし ひらおひせ 八尾市 豆振町	27212	34° 35'	35° 36'	19980814~18	6	分譲住宅建設に伴う道路確認調査
ひらおひせ 木の本道路	ゆきし ひらおひせ 八尾市 木の本	27212	34° 35'	35° 36'	19981119	2, 73	専用住宅建設に伴う道路確認調査
ひらおひせ 久宝寺道路	ゆきし ひらおひせ 八尾市 久宝寺	27212	34° 35'	35° 37'	19980319, 0330~0402	3, 3, 7, 5	小暮所付住宅建設に伴う 道路確認調査
ひらおひせ 郡那道路	ゆきし ひらおひせ 八尾市 教興寺	27212	34° 35'	35° 42'	19980416, 15, 19	5	専用住宅建設に伴う道路確認調査
ひらおひせ 東郷道路	ゆきし ひらおひせ 八尾市 東郷	27212	34° 35'	35° 38'	1998120; 1999019, 26	9	共同住宅建設に伴う道路確認調査
ひらおひせ 高安寺須磨	ゆきし ひらおひせ 八尾市 大字恩智	27212	34° 35'	35° 59'	1998109~19	3, 0	送電鉄塔整修工事に伴う 道路確認調査
ひらおひせ 東郷道路	ゆきし ひらおひせ 八尾市 東郷	27212	34° 35'	35° 21'	19980204, 09	1, 3, 5	共同住宅建設に伴う道路確認調査
ひらおひせ 中田道路	ゆきし ひらおひせ 八尾市 八尾木北	27212	34° 35'	35° 05"	19980416, 27, 38, 0430	3, 1, 2, 5	診療所建設に伴う道路確認調査
ひらおひせ 西呑呑木道路	ゆきし ひらおひせ 八尾市 半町	27212	34° 35'	35° 40"	19980309	8	特定駆使局建設に伴う 道路確認調査
ひらおひせ 福乃寺道路	ゆきし ひらおひせ 八尾市 福乃寺北	27212	34° 35'	35° 38"	1998109~30	1, 5, 0	区画整理事業に先立つ 道路確認調査

よりり名 び歴跡名	よりり名 所 在 地	コード 市町村 道跡番号	北 緯	東 綱 34° 37° 53°	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
691仙社 宮町遺跡	千葉市 八尾市 宮町	27212	34° 35' 49"		1998.5.26	12.5	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
691仙社 弓削遺跡	千葉市 八尾市 志紀町南	27212	34° 35' 29"		1998.11.18	5.2	専用住宅建設に伴う遺構確認調査
所取遺跡名	種 別	上な時代	上 な 遺 構		上 な 漢 物	特記事項	
勝部遺跡	集落	古墳時代	土状遺構		土師器 須恵器		
忍智遺跡	集落	古墳時代～ 弥生時代	包含層		須恵器 弥生土器		
	集落	弥生時代	薄状遺構		弥生土器 サヌカイト 縄文土器		
	集落	縄文時代	包含層		弥生土器 石器 骨片		
	集落	弥生時代	薄 土坑		弥生土器 石器		
	集落	弥生時代	包含層		弥生土器 石器		
笠原遺跡	集落	古墳時代	構 土坑		土師器 須恵器 瓦器		
木の本遺跡	集落	平安時代	包含層		土師器 黒色土器 須恵器		
久安寺遺跡	集落	古墳時代～平 安時代	上枕 潤 戸 壁含層		弥生土器 上師器 須恵器 埴輪 瓦器 瓦		
	集落	中世～近世	ビット 潤 上枕 墓壁 包含層		土師器 須恵器 瓦器 瓦		
郡川遺跡	集落	弥生時代	ビット 潤状遺構?		弥生土器 須恵器		
	集落	縄文時代	薄 ビット 包含層		土師器 瓦器 瓦		
	集落	古墳時代	薄		土師器 須恵器 瓦器		
	集落	縄文時代	包含層		土師器 須恵器 瓦器		
高安古墳群	古墳	不明	土坑 ビット		須恵器		
東郷遺跡	集落	中世	底込み状遺構 包含層		土師器 瓦器		
中田遺跡	集落	古墳時代 奈良時代	包含層 十成 ビット 溝状遺構		古式土師器 弥生土器 土師器 須恵器 須恵器		
西部奥寺遺跡	集落	弥生時代	薄 ビット 土坑		土師器 上師器 須恵器		
福万寺遺跡	集落	中世～近世	水口面		土師器 瓦器 陶磁器		
宮町遺跡	集落	鎌倉時代	土坑 潤		土師器 瓦器 白磁		
弓削遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	包含層 河川堆積		弥生土器 埴輪		

八尾市文化財調査報告 40
平成10年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書 1

発行日 1999年3月

編集・発行 八尾市教育委員会 文化財課

〒581-0003 八尾市本町1-1-1

TEL (0729) 24-8555 (直通)

(八尾市刊行物番号 H10-73)

